
Happiness Magic ! ~ハピネスマジック! ~

JUN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H a p p i n e s s M a g i c ! ~ハピネスマジック!~

【コード】

N 8 6 4 3 A

【作者名】

J U N

【あらすじ】

極々普通な高校生霧谷優真は妹の優音や幼なじみの鳴瀬愛華と共に幸せな生活を送っていた。しかし、変化の刻は刻一刻と迫っていた……………。

第一話（前書き）

うい。まだ春の訪れもまだ終わらせてない作者、JUNです。なんとなくこつこつ作品も書きたくなったので春の訪れと同時進行しようと思います。

第一話

トントントン。

俺は今、いつもの如く朝早く起きて朝飯を作っている。

俺の名前は霧谷優真^{きりたにゆうま}。

市内の高校に通う二年生だ。

今は一つ年下の妹と一緒に二人暮らしをしている。

俺達の両親は七年前に事故で他界した。

その後は親戚中をたらいまわしにされて、最終的には祖母に引き取ってもらった。

祖母には妹共々可愛がってもらった。

しかし、それから二年で寿命で祖母も亡くなってしまった。

それから五年、決して楽ではないが祖母の保険金やバイト代で生活しながら今に至る。

「よし!できたっつと。」

後はあいつを起こしに行くだけか……。

素直には起きてくれないよなあ……。

俺は妹の部屋の前まで行き一応ノックだけはしてみた。

コンコン。

「優音^{おつね}ー、起きてる……分けないよなあ……。入るぞ。」

ガチャ。

俺は優音が寝ているそばまで歩み寄った。

「おーい、優音。朝だぞ、起きろい。」

「くー……………」

やはり起きんか……………」

ならば、

「フー。」

「にひゃー!!?」

優音の耳に息を吹きかけたら飛び起きた。

「うー、お兄ちゃん!!耳に息を吹きかけるのは止めてよ。」

優音が上目遣いでにらみ上げてくるが俺は軽やかにスルーした。

「ハイハイ、さっさと着替えて飯にするぞ。」「うー、はい……………」

「

優音は渋りながらも返事を返した。

毎日が大変でも優音と2人、それなりに楽しくやっている。

これからもずっと続くと思っていた。

だが、2人の人生を狂わせる変化は確実に迫ってきていた……。

第二話（前書き）

どうも、なかなかファンタジーなところまでいけないツスが第四話辺りからファンタジーいけると思っんでよろしくツス。

第二話

朝、登校前。兄妹2人が通学路を歩いている。

「ほらほら、早く行かねえと遅刻しちまうぞ。」

「ち、ちよっと待ってよ、お兄ちゃん。」

まだそれほど急ぐような時間でもなかったが、のんびりしすぎていと遅刻してしまうような時間帯なので俺は優音を急がせた。

「ん？あれは……。」

前方に昔からよく知る人物を発見。

「おい、愛華^{あいか}！」

「あ……、優君……。」

俺は愛華の隣まで小走りで来た。

「おはよっす。」

「…おはよっす……。」

こいつの名前は鳴海愛華^{なるみあいか}。

昔からよく一緒にいる、まあ俗に言う幼なじみというやつだ。

愛華は見た目はかなり可愛いがおとなしく、引っ込み思案な性格をしていて、人見知りも激しい。

優音の姉のような存在だ。

「はあはあ、お兄ちゃん、早いよ。」

ようやく優音が追いついてきた。

「あ、愛華お姉ちゃん、おはよー。」

「おはよう……優音ちゃん……。」

ふむ。こうして見ていると美少女姉妹という感じがするな。

こいつらと一緒に歩いていると他の男子共の嫉妬攻撃が激しい。

まあ、攻撃してくる度に撃退してるんだが。

「じゃあ、さっさと行くか。」

「うん！」

「うん……。」

俺達と一緒に学校に行くことにした。

……。

「じゃあ、お兄ちゃん、愛華お姉ちゃん、また昼休みにね。」

「おう。しっかりやれよ。」

「じゃあ……また後でね……。」

昇降口で俺は優音と別れた。

「んじゃ、行くか、愛華。」

「うん……。」

俺は愛華と連れ添って教室へ歩いていった。

……。

キーンコーンカーンコーン。

「ふう、昼休みか。」

俺は隣の席の愛華に話しかけた。

「愛華。昼飯一緒に食うか？」

「あ……うん……。」

俺と愛華は優音を迎えに優音のクラスへ行った。

「鳴海さん！」

優音のクラスに向かう途中、突然愛華が一人の男子生徒に呼び止められた。

「はい……何でしょう……？」

「ちょっといいかな？」

その男子生徒はチラチラと俺の方を見ている。

愛華は不安そうに俺を見上げている。

「行ってこいよ。待ってやるから。」

「うん……、じゃあ……行ってくるね……。」

そうして愛華は男子生徒につれて行かれた。

……。

少しして、愛華が戻ってきた。

「ごめんね……待たせちゃって……。」

「いや、いいよ。いつもの事だしな。で、やっぱりいつも通り？」

そう言っていると、愛華は顔を赤くした。

「う、うん……。告白された……。」

「ははっ、そっか。愛華は相変わらずモテるなあ。」

そう、愛華は昔からすごくモテた。

小、中、高でいつも1、2を争うほどの人気っぷりだ。

本人曰わく、

「そんなこと……ないよ……。」
らしい。

「それにしても、何で愛華は誰とも付き合わないんだ？告白してくるやつに良い人はいるだろうに。」

そう俺が言ったら、一層愛華の顔が赤くなった。

「私には……ずっと前から……好きな人がいるから……。」

「ふうん、そいつからは手紙も告白もされないのか。」

「うん……。」

愛華が好きになる人ってどんな奴なんだろうなあ。

と、思っていたら、

「何で……ずっと一緒にいるのに……気づいてくれないんだろっ……」

……。」

愛華がボソツと呟いた。

「ん？なんか言ったか？」

「ううん！何でもないよ……。」

「そうか。お、ついたな。」

そうこうしている内に優音のクラスに着いた。

「あ、お兄ちゃん。」

ナイスなタイミングで優音が出てきた。

「おう、迎えにきてやったぞ。さっそく行くか？」

「うん。」

俺は愛華と優音を連れ添って学食へ歩いていった。

.....。

キンコーンカーンコーン。

「ふう、やっと今日の日程終了か。」

俺はまだ隣に座っている愛華に声をかけた。

「なあ、愛華。一緒に帰るか？」

「あ.....うん.....。」

愛華は少し頬を赤らめて頷いた。

そして、愛華が帰り仕度を始めたが、

「あっ!?!.....。」

筆箱を落として中身がそこら中に散らばってしまった。

愛華がすぐに拾おうとするが、

「あーいい、いい。俺がやっとくから。先に用意しとけ。」

「え?.....でも.....。」

「そうした方が早い。な?」

「うん.....。ありがとう.....。」

愛華は顔を赤らめて言った。

俺は筆箱の中身を全部拾って、愛華に渡した。

「ありがとう……優君……。」
「気にするな。」

ふと、愛華が俺を見つめていることに気がついた。

「どうした？」

「優君は…優しいね……。」

「これくらいで大袈裟だなあ。」

そう言つと、愛華は首をふるふると振った。

「そんなことないよ……昔から私は優君に助けってもらってばかりだった……。」

「愛華……。」

愛華は昔から引っ込み思案だったから、ほっとけなかつただけなんだが……。

「だから……だから私は……優君が……。」

俺が……？

と、その時、

「お兄ちゃん！」

優音がクラスに入ってきた。

「あれ？お兄ちゃんと愛華お姉ちゃん、何してるの？」

優音がこの状況を見て聞いてきた。

「ん、いや愛華、今何言おうとしてたんだ？」

「う、ううん！何でもない……。」

「そうか？」

ふむ。まあいいか。

「で、どうしたんだ？優音。」

「一緒に帰ろうと思って。」

「ああ、じゃあ帰るか。」

俺は愛華と優音と一緒に帰っていった。

第三話

何で急にあんなこと言おうとしてたんだろう。

目の前では優君と優音ちゃんが楽しそうに歩いている。

自分でも何故告白しようと思ったかはわからない。

私が優君を好きになったのはもうずっと前……。

初めて会ったときから好きで、私の一目惚れで初恋だった。

優君はずっと前からすごく優しく、私がいじめられていたときもよくかばってくれていた。

でも、私はそんな優君を傷つけた。

一生かけても償えないような罪を……。

だから私は何があっても優君の味方でいようと決めた。

何があっても……。

……。

「あ、ちょっと古本屋さんに寄って行って良いかな？」

突然、優音が俺と愛華に言った。

「俺は別に構わんが。」

「私も……いいよ……。」
「しかし、何しに行くんだ？」

俺が聞いてみると優音は、

「頼んでた本が届いたみたみだから。」

「ふん。」

そして、俺達は古本屋へ向かった。

……。

「こんにちは！」

「おお、優音ちゃん。いらっしやい。」

古本屋に入ると人の良さそうなおじいさんが店番をしていた。

「こんにちは。」

「こ……こんにちは……。」

「おや？いらっしやい。」

おじいさんは一瞬驚いたがすぐに笑顔で迎えてくれた。

「優音の兄の霧谷優真です。」

「な、鳴海愛華です……。」

俺と愛華は自己紹介をした。

「珍しいね。ここは若いもんはほとんど来ないんだよ。」

「へ〜。」

「ねえおじいさん。頼んでた本入ってますか？」
「ああ、ちよつと待ってね。今持ってくるよ。」

そう言っておじいさんは奥にはいつていった。

俺は物珍しく辺りを見回していた。

「ん？なんだあれ？」

そうしているとある一冊の黒い本を見つけた。

俺はその本を手にとって開こうとするが開かない。

「何だよこの本。」

俺は優音達と話しているおじいさんのところへ向かった。

「おじいさん、これ何の本なんですか。」

「ん。どれどれ。」

おじいさんはその本を手にとって調べた。

「何じゃこれは？よくわからんな。」

「え？商品じゃないんですか？」

しかし、おじいさんは首を横に振った。

「こんな気味の悪い本、店には置いときたくはないな。もしよかつたらもらってくれんか？」

「え？いいんですか？」

「ああ、その代わりまた来ておくれ。」

「はい、ありがとうございます。」

「おじいさん、サヨナラー！」

「あの…さようなら……。」

そう言っつて俺達は店を後にした。

……………。

「お兄ちゃん、何でそんな本もらってきたの？」

「いや、何か気になるんだよなあ……。」

「何か…その本……ちよつと怖い……。」

愛華が怯えた目でこの本を見ている。

「大丈夫だよ。愛華は心配性だなあ。」

「うん……。」

だが、まだ愛華は気になっているようだ。

よし、ここは一つ話題を変えて、

「そつだ、愛華。久しぶりにうちで晩飯食わねえか？」

「あ、それいいね。愛華お姉ちゃん、一緒に食べよう。」

俺の提案に優音も賛成した。

「え、でも……。」

「よーし、そつと決まれば急ぐぞー！」

「おー」

「え…う…あ……ええ！？」

ほぼ強制的に愛華を家に連れて行った。

……………。

「いただきます。」

「いただきますーす!。」

「いただきます……………。」

愛華と晩飯を食べる事になり、優音と愛華に晩飯の用意をしてもらい、今に至る。

「ごめんな、愛華。客なのに晩飯の用意させて……………」

「ううん……………いいの……………。作るのって……………私好きだし……………」

うむ、俺もいい幼なじみを持ったもんだな。

俺はしみじみとそう思った。

「でも、愛華お姉ちゃん、おじさんに連絡しなくていいの?」

「うん……………、今日も……………出張らしいし……………」

愛華は今、親父さんと二人暮らしをしている。

愛華の母さんはある事件に巻き込まれて亡くなった。

そして、親父さんは出張が多く愛華を1人にしがち。

なので俺は、寂しくないように優音と3人で出来るだけ一緒にいようと思っっている。

「じゃあ、愛華お姉ちゃん！今日泊まっていってよ！」

と、突然優音が言い出した。

「え？でも……、」

「でもは無し。いいよね？お兄ちゃん。」

「俺は愛華がいいなら別に構わんが。」

「じゃあ決定！」

強引に優音が決定を下した。

いいのか？愛華が困ったような顔してるが……。

「おいおい。愛華が困ってんだろ。いいのか？愛華。」

「う…うん……。優君がいいなら……。」

「じゃあ、布団用意してくるよ。」

早々に飯を食い終わった俺は布団を用意しに行く。

しかし、優音が、

「あ、後で私がつとくよ。それよりお兄ちゃん先にお風呂入ってきて。」

「ん、分かった。じゃあ先に入ってくるよ。」

俺は汗を流しに風呂場に向かった。

……。

風呂から上がった後、俺はじいさんにもらった黒い本を見ていた。

「お兄ちゃん、何してるの?」
「?」

風呂から上がった優音と愛華が聞いてきた。

「ああ、ちょっとこの本を調べてるんだかやっぱ開かないんだよなあ……。」
あ……。」
昼間と同じように開こうとするがやはり開かない。

「うーん、何でだろ?」

「ちよっと……見せて……。」

と、愛華が言い、俺は本を愛華に渡した。

次の瞬間!

「なっ!?!?本が光った!!」

「えっ!?!?なににな!?!?」

「きゃっ!?!?」

愛華が驚き本をテーブルの上に落とした。

「いったいどうなってんだ!?!?」

そう言った次の瞬間、

「なっ!?!?本が開いていく……。」

だが、本が開いた瞬間、俺の、いや、俺達の意識が消えていった……

⋮
○

第四話（前書き）

今回からようやくファンタジーっぽくなってきたス。

第四話

「う、く……。」「

目が覚めたら、そこは森の中だった。

「く、あい…か？ゆう…ね？」「

俺はゆっくりと周りを見回してみるが2人の姿は見当たらない。

2人とも、どこいったんだ？

「……………！？……………？……………！」

何か声が聞こえる。

あ、やばい。また、意識が飛びそうだ。

俺が再び気を失う直前に見たのは1人の人影だった。

……………。

「ん……………。」

目を開けて起きあがると、そこはどこかの部屋みたいだった。

「……は……………。」

「あ、目覚めました？」「

「え？」「

声が出た方を向くと、そこには青い髪を腰まで伸ばして、緑の瞳を持つ少女がいた。

「あ、ああ。君が助けにくれたのか？」

「はい、そうですよ。森の中に倒れてたんでびっくりしました。」

少女はそう言って俺に近づいてきた。

「あ！そうだ、愛華と優音……女の子2人もそこにいなかったか？」

「え？あなた1人だったと思いますけど……。」

「そうか……。」

なんてこった。いきなり本が開いたと思ったら、見たこともないところに飛ばされて、愛華と優音も行方不明とは……。

そうして頭を抱えていると、

「あの……父に頼んで探してもらいましょうか？」

確かに、ここがどこだか分からないし、俺もまだ満足に動けない。

だったら、頼むしかないか……。

「ああ、よろしく頼むよ。」

「はい！」

そう言ってその少女は元気よく答えた。

「そういえば、自己紹介がまだだったな。俺は霧谷優真。」
「霧谷優真……。優真さんですね。私はレン・グラッドです。」
「レンか……。よろしく。」
「はい！よろしくお願いします。」

レンは勢いよく頭を下げた。

「それで、レン。一つ聞きたいんだが……。」
「はい、何でもしょう？」
「こじつてさ……どこじつ？」
「……………？」

2人の中にしばし、沈黙が流れた。

「あ、こじつていうか、この世界？」
「え〜っと、ということは優真さんは異世界の人？」
「ああ、多分……。」

俺は本が開いた時のことを話した。

……………。

「なるほど、本が光って、気づいたら森の中に……………。」
「ああ、そうだ。何か分かるか？」

俺は1人で考えているレンに聞いてみた。

「う〜ん……………、私にはよく分かりませんが、父に聞いてみれば分かるかもしれません。」
「そうか……、親父さんは今どこに？」

「あ、父は学校の先生をしていて、もうすぐ帰って来ると思います。」

「おいおい、それじゃ愛華達をすぐ探せんじゃないか。」

「やっぱ、俺1人でも探しに行かないと。」

「やっぱり、俺2人を探しに行ってくる。」

「あ、ダメですよー。まだ、動いちゃ。もうすぐ、お父さんも帰ってくると思いますから。」

「いや、でも……。」

「渋る俺にレンは必死で止めようとしている。」

「大丈夫ですよー、どんなところにも、お父さんの魔法で一発ですから！」

「そう言って、レンが胸を張る。」

「って!?!魔法!?!?」

「この世界には魔法なんてあんのか!?!?」

「あ、そういえばまだこの世界について説明してませんでしたね。」

「そう言って、少し咳払いをして、話し始めた。」

「まずこの世界の名前は『グリーンベウム』といって、私達がいるこの国は『リーザス王国』といいます。そして、この世界は魔力を使った様々な技術が発達しています。」

「ふむふむ。」

「でも、二十年前、『リングサーク神王国』という国と『ゼノン帝
国』という国の戦争がありました。」

「…戦争……。」

また、ずいぶんと近い年にあつたんだな。

「その戦争はリングサーク神王国と同盟を組んでいたこの国も巻き
込んで、一年近く続いていましたが、『十賢者』と呼ばれる十人の
人達が戦争を終結させました。」

「十賢者……。」

たつた十人で戦争を終わらせたのかよ。

「とりあえず、大まかに説明すると最近の大きな事件はそのくらい
です。次に魔法のことなんです……、」

「ただいま。」

どうやら、誰かが帰って来たようだ。

「あ、お父さんが帰って来たみたいですね。魔法のことはお父さん
の方が詳しいので、後で聞いてみましょう。とりあえず、このこと
を説明してきます。」

そう言って、レンは戸を開けて行ってしまった。

……。

しばらくすると、レンの父と思われる人が入ってきた。

「やあ、君が優真君だね。はじめまして、レンの父のグレンです。」
「あ、どうもはじめまして、霧谷優真です。あの、さっそくなんです
すが……、」

「ああ、レンから話しは聞いたよ。すぐ、始めよう。」

そう言って、グレンさんは立ち上がって、目を閉じなにやら呪文を
唱え始めた。

「風の精霊シルフよ。我は緑風を持つ者。今ここに2人の人物の居
場所を示せ。」

そういうと、グレンさんの体が緑に光った。

『ウインドサーチ。』

突然、風が巻き起こりグレンさんを包んだ。

「ふむ、どうやら2人は森の中にいるようだ。」

「本当ですか！？無事なんですか！？」

「ああ、2人とも大したことないようだ。」

そう聞くと、俺は安堵してベッドに座り込んだ。

「じゃあ、お父さん。早く探しに行かないと。」

「ああ、そうだな。」

そう聞いてきたレンにグレンさんは答えた。

「では、私は2人を迎えに行ってくる。優真君は大人しくしてるんだよ。」

「はい、ありがとうございます。」

そう言っつて、グレンさんはすぐに行ってしまった。

「じゃあ、私は晩御飯の用意をしますからそれまで休んでいてください。」

「ああ、ありがとう。」

俺はそのまま一眠りする事にした。

.....。

「優真さん！お父さん達が帰ってきましたよ！」

「.....！？すぐ行く！」

寝起きで少し機能停止していたが、すぐに飛び起きた。

そして、限界の方へと向かった。

「愛華！優音！」

「優君！」

「お兄ちゃん！」

俺の姿を見た愛華と優音が抱きついてきた。

「優君.....ぐすっ.....良かったあ.....。」

「うぐ.....ぐすっ.....お兄ちゃん.....。」

安心したのか、そのまま2人とも泣き出してしまった。

「よしよし、2人とも、よく無事だったな。」

俺は2人が泣き止むまでずっと頭を撫でていた。

……………。

2人が泣き止んだ後晩飯が出来ているということ、俺達はご馳走になった。

既に、女の子組は自己紹介も済ませ、仲良くなっていた。

俺はまだ事情がよく分かっていない2人にさつき教えてもらったことを説明した。

「面白そう!!」

俺の説明が終わり、優音の第一声がそれだった。

「面白そうってお前、今のこの状況分かってるか？」

「分かってるよ。でも、魔法なんてゲームや漫画でしか知らないんだもん。」

まあ、その気持ちは分からなくてもないんだが……………。

「それに、本の事はグレンさんにも分からなかったんだし。」

「面目ない……………」

「あ、いえいえ！気にしないでください。」

結局あの本の事はグレンさんにも分からなかった。

「でも……いつまでもここにいるわけにはいかないでしょ……?」
「あら、私は全然構わないわよ。子供が三人増えたと思えば。」

控えめに言った愛華にレンの母のリンさんは言った。

「ふむ、だったら帰る方法が決まるまでリーザス魔法学園に入学してはどうかね。」

「……リーザス魔法学園?」「」

頭を捻らせていた俺達にグレンさんが言った。

「あ、お父さんそれ名案!」

なんだか、とんでもない方向に話しが進んでいるが……。

「学園長なら、本の事を知っているかもしれないし。それに、私も教師をやっているから多少の融通だったら利く。」

グレンさんって教師だったのか……。初めて知った……。

「でも、入学金とかかかる……」

「ねえねえ、私達も魔法が使えるようになるんですか?」

かかるんじゃないでしょうか?と聞こうとしたら優音が横から邪魔してきた。

「ああ、誰でもできるようになるよ。」

「わぁー……。」「

優音の目がものすごく輝いている。

「魔法……。」「

愛華……。お前もか……。

「お金の事なら、奨学金があるから心配入らないよ、優真君。それに、あっちには寮もあるしね。」「

「はぁ……。」「

まだ問題があるような気がするんだが……。

「お兄ちゃん、私、魔法使ってみたい！……！」

「優君……。私も……。」「

「優真さん……。」「

優音に加えて、愛華とレンも俺に視線で訴えかけてきた。

「う……。分かったよ。」「

「やったー！……！」

俺が折れると、優音が手放して喜んだ。

「グレンさん！よろしくお願いします！」

「よろしくお願いします……。」「

「ハア、すみません、よろしくお願いします。」「

「うん、了解。一週間後に入学式があって、レンも入学する事になっているんだ。」「

どうやら、時期的にもちよつど良かったようだ。

女の子三人組は未来の事に胸を躍らせている。

ハア、俺達、無事に帰れるかなあ。

これからの事に不安を覚える俺だった。

第五話

「では、まず魔法について説明しましょう。レンもおそろいってことでもいいね。」

「はい!」

「はい……。」

「はい。」

真っ先に返事をする元気娘、優音とレン。

その後に愛華と俺も続く。

「まず、この世界の様々な技術は魔力が使われています。そして、この世界には魔物と呼ばれる存在もいます。」

「え!?!」

「そんなのいるんですか!? グレンさん。」

そう言うと、グレンさんは縦に首を振る。

「だから、夕暮れ前に君たちを保護する必要があったんだ。夜になるとあの森には魔物が多く出てくるからね。」

そ、そんなに危ない森だったのか……。

今になって冷や汗が出てくる。

「話しは戻るが、そういった魔物を倒す事を仕事にする職業も数多くある。」

「へえー。」

お気楽に優音は反応した。

「リーザス魔法学園は主に魔物撃退の職業に力を入れていて、なりたいた職業の武器を持参するんだ。」

「武器……ですか……？」

愛華が恐る恐る聞いた。

「ああ、例えば戦士を目指すなら一本の剣、魔導師なら杖とかね。」
なるほど、職業を示す武器か……。

「あ、そうそう、学園を卒業したら目指す職業のギルド、つまり仕事を紹介してくれる団体に入る事が出来るんだ。」

ふくん、ギルドか……。

「まあ、学園のシステムはこんなところかな。」

つまり、なりたいた職業の武器を学園に持参して、勉強を重ねていき卒業すればなりたいた職業のギルドに入れるということか。

「さて、次は魔法の詳しい説明だが、優真君。さっき私が使った魔法の属性は何か分かるかい？」

属性……。ゲームとかではよく聞くが。

確かさっき、風の精霊とか言ってたよな。

「風…ですか？」

「そう、正解。属性は全部で8つある。『火』『水』『雷』『風』『土』『氷』そして、『光』と『闇』。属性はもともと決まっ
て、基本的には1人1つ。だが、時々1人で2つ持つ人もいるんだ。」

かなりまれだがね、とグレンさんは付け加えた。

「そして、属性にはそれぞれ色がついているんだ。」

「『色？』」

3人の声がつまくハモった。

「そう、この色にも8つあるんだ。『紅』『青』『黄』『緑』『紫』『蒼』、そして、『白』と『黒』。色と属性はそれぞれ64通りあるが、それぞれの属性にはその属性のイメージの色とセットになる場合が多いんだ。例えば、属性が『火』だったら色は『紅』の場合が多い。」

ふむふむ、なら『水』なら『青』ってところか……。

それにしても64こも組み合わせがあるのか……。

「属性にはその系統の魔法が使えるという意味があり、色には相性という意味があるんだ。」

相性？

「紅は黄に勝ち、黄は青に勝ち、青は紅に勝つというふうになって

いるんだ。もう一つは緑は紫に勝ち、紫は蒼に勝ち、蒼は緑に勝つ
というふうになっていて、唯一違うのは、白と黒は互いに弱点にな
りうることだけかな。」

ふうん、そういう仕組みになってんのか。

「さて、魔法に関してはこれくらいかな。何か質問はあるかな？」

はい、と優音が手を挙げた。

「相性はどんなときに役に立つんですか？」

「相性はほぼ魔物撃退の職業しか関係はないんだよ。魔物も色を持
つから。そのときに相性は知っていれば役に立つんだ。」

なるほど。

「さて、では今から、君たちの色と属性と向いている職業を調べよ
うと思う。」

「え？そんなこと出来るんですか？」

俺は驚いてグレンさんに聞いた。

「ああ、魔法を使ってね。レンはもう終わらせてあるんだ。」

「へえー、ちなみにレンの色と属性と向いている職業ってのは？」

「あ、私のはですね、色と属性は『緑雷』で職業は『魔導師』でし
た。」「えー、いいなー魔導師ー。」

優音がかなり羨ましがっている。

「でも…属性が『雷』で…色が『黄』じゃなくて『緑』ということ
は珍しいんでしょ……。」

「おお、確かに。レンすごいじゃん。」

そう言われてレンは照れ笑いしている。

「それで、どうするんですか？」

とりあえず俺は先に進めることにした。

「ああ、まずは1人立っていてくれ。」

「じゃあ、まずは私！」

いつの間にか優音が話しに戻ってきていた。

「ったく、それでいいか？愛華。」

「うん……私はいいよ……。」

「じゃあまずは優音さんからだね。」

そう言うと、グレンさんは呪文を唱え始めた。

「風よ。この者の内面を調べ、我に示せ。」

突然、優音の体が緑に光った。

『ウインドスキャン。』

優音の体から光が消えた。どうやら、終わったようだ。

「えー、優音さんの色と属性と向いている職業は……、」

「ドキドキ。」

自分で言うなよ……。

「『紅風』。そして、『銃撃者』。」

「えー、魔導師じゃないのかー。ガツカリ……。」

いや、突っ込むところ違うだろう。

「元気だして、優音ちゃん。風の属性で緑以外の色がでるのは珍しいんだよ。」

レンが凹んでいる優音を必死に慰めている。

それにしても、

「紅風ってことは色は紅で属性が風か。でも銃撃者って……。」

「銃を使って魔物を退治する職業だね。」

危ないなあ……。あ、でも意外と向いているかも……。いやいや、しかし……。

まあ、いいか。

「次は愛華、見てもらえよ。」

「う、うん……。わ、分かった……。」

緊張しすぎだろう、愛華よ……。

『ウインドスキャン。』

優音と同じように調べ終わったようだが、グレンさんは驚いているようだ。

「どうしたんですか？」

俺は驚いて固まっているグレンさんに言った。

「ああ、済まない。愛華さんはどうやら2つずつ色と属性を持っているようだから驚いてしまった……。」

「2つ!? すごいじゃん! 愛華!」

「愛華お姉ちゃん、すごい!」

「愛華さん、すごいですー!」

「え……あ……うう……。」

愛華は誉められまくって照れてしまった。

「愛華さんの色と属性は『青水』と『蒼氷』で向いている職業は『

ヒーラー』。」

「ヒーラー?」

って、回復役ってことかな。

「ヒーラーはその名の通り回復に長けた魔導師のことだよ。水の属性が一番回復魔法が多いからぴったりだと思っよ。」

「確かに、愛華にはぴったりの職業だよな。」

「そ、そうかな……?」

愛華は首を捻って考えている。

さて、いよいよ俺の番か。

「お兄ちゃん、頑張れ！」

「優君……頑張って……。」

「優真さん、ゴーゴーですよ！」

何をどうゴーゴーして頑張ればいいのか分からんがとりあえず頑張ろう。

「お願いします。」

「では、いくよ。」

そうして、グレンさんは呪文を唱え始めた。

『ウインドスキャン。』

終わったか……。

グレンさんの方を見ると、またもや驚きで固まっているようだ。

「いや、今日はすごい日だな。しかもまさかあの属性がでるとは…

…。」

「えっと、どうでしたか？」

さすがにちょっと緊張してしまう。

他の3人も固唾をのんで見守っている。

「優真君の色と属性は『白光』と『黒闇』で、向いている職業は『

双剣士』だよ。」

うおー!?俺も2つの属性を持つてるのか。

しかも、職業は双剣士……。

「え?お父さん、優真さんって光と闇の属性を持っているの?」

「ああ、信じられない事に……。」

「な、なんかいけないのか?」

俺、ちよつと不安になるんだが……。

「い、いえ悪いことではないんですけど、お互いに干渉する属性は1人の人の中には発現しないって言われているんです。それに、光と闇の属性自体持っている人が少ないんですよ。」

「えっと、つまりすごいってこと?」

あんま実感わかないが……。

「すごいどころじゃないですよ!これが分かったら有名人になっちゃいますよ!」

「まあ、落ち着け。レン。」

どーどー、とレンを落ち着かせる。

「とりあえず3人の荷物は明日仕入れに行こう。今日のところはここで終わりにしよう。続きはまた明日。」

「……はい。」

そして、異世界グリンベウムの最初の夜は更けていく。

第六話（前書き）

ちよつと息抜きに更新してみます。某まんがのネタを少しパクって
いますが、中身は違くするのでご容赦を。
またしばらく更新は遅れると思います。

第六話

俺達がこの世界、グリーンベウムに飛ばされた翌日、人が賑わう町の大通りに来ていた。

「わく、スツゴい人々。」

「ほんと、凄い人混みだよな。」

俺も優音も愛華もポカンと人混みを眺めている。

「さて、入学に必要な道具を揃えようか。この商店街には大抵の物は売っているから、買い物はここでするといいよ。」

歩きながらグレンさんはどの店がどのようによいか教えてくれた。

「私のお気に入りのお店もあるから優音ちゃんと愛華さんも今度一緒に行きましょう。」

「本当？うわあ、楽しみ〜」

「・・・うん、私も行ってみたい。」

優音と愛華はレンの説明で目を輝かせている。

二人とも帰れないかもしれないということわざと考えないようにしているのだろう。

（愛華は親父さんを地球に残しているから不安だろうに・・・。）

それでも愛華は気丈に振る舞っている。

そんな愛華の不安を和らげたいと優真は考えていた。

。。。。。

「教科書に制服に・・・うん、これでだいたい揃ったね。あとは最後に武器だね。」

「や、やっと最後ですか・・・。」

全てを買い揃えた頃には既に夕方近い時刻になっていた。

朝からずっと歩き通しだったので優音除いて全員がくたくただった。

「みんな、だらしないな。」

「何でお前はそんな元気なんだ・・・。」

優音は朝からずっとこのテンションのままだった。よっぽど楽しかったのだろう。

「愛華もレンも大丈夫か？」

「・・・う、うん。大丈夫。」

「私も、大丈夫です。」

愛華もレンも疲れが出てきたようだった。

「着いた、ここだよ。」

グレンさんの言葉に優真は店を眺めた。

看板にはこの世界の文字で何か書いてあり、店の雰囲気は年代を感

じさせるが中々悪くない。

グレンさんの後について店の中に入った。

「こんにちは。」

「あら、グレンさん。いらっしやい。」

出迎えてくれたのはかなり美人な女の人だった。

髪は金髪、目は青くて背は愛華より少し高いだろうか。

「……………っは!？」

優真が少し見とれていると背後から視線を感じた。

恐る恐る振り向くと、優音がジト目、愛華が半泣き、レンが苦笑していた。

「……………鼻の下伸ばさないでよ、お兄ちゃん。」

「優君……………」

「あ、あはは、しょうがないですよ。同性でも見とれちゃいますから。」

三人の言葉に優真は慌てて言い訳を考えてる。

「し、しょうがないだろ！俺も男なんだから、美人を見るとつい目が行ってしまっ。」

「あら、嬉しいわ。」

その声に振り返って見るとさっきの美人が立っていた。

「初めまして、私はソフィア・クレイスといいます。話しはグレンさんから聞いてるから早速、やりましょう。」

「やるって、何をですか？」

優真がそう尋ねるとソフィアはキョトンとした顔をした。

「本当に何も知らないのね。いいわ、最初から説明します。今から行うのは『魔導具精製の儀』っていうの。」

「魔導具精製の儀？」

「魔導具精製の儀というのは魔導具、つまり学園に持って行く武器の事ね。それを作るの。」

「作るってそんな時間あるんですか？」

優音が不思議そうな顔をして尋ねた。

「ええ、作るのは一瞬で終わるから。」

「・・・どうのことですか？」

今度は愛華がソフィアに尋ねる。

「魔導具は体内のマナ（＝エネルギー）を具現化させてそれを武器に変えるの。」

「？」

三人は全く分かっていなかった。

「・・・まあ、試した方が早いかな。三人ともこっち来て。グレンさんとレンちゃんはそこに座って少し待っててね。」

優真達は二人を置いて奥に進んでいった。

そこには十人くらいは余裕で入れそうな巨大な魔法陣があった。

「はい、じゃあ三人とも魔法陣の中に入って。」

言われるままに三人は魔法陣の中に入る。

「三人とも、自分にあつた魔導具をイメージして。」

三人は頭の中にそれぞれの武器を描く。

優真は二振りの剣、愛華は杖、優音は銃をイメージする。

「では、今から術を発動させるからそのままイメージしていて。」

そう言つて、ソフィアは呪文を唱える。

「レイストラスメリン、我は大いなる神の使いなり。八つの精霊に命ず、願わくばこの者達の力となれ。」

魔法陣がポウツと輝き出す。

『魔導具精製』

魔法陣の輝きがより一層強くなる。

そして、だんだんと輝きが弱まっていく。

「はい、もう目開けてもいいわよ。」

優真達が目を開けると三人の手にはそれぞれの武器が握られていた。

優真は二本の刀、愛華は四十センチほどの杖、優音は二丁の銃。

だが、お世辞にもそれらの武器は見た目がいいとは言えなかった。

「何か、イメージしたのと全然違う……。」

優真の刀は中々にシヨボかった。こんな刀では何も切れないだろうというのが素直な感想だった。

「そりゃそうよ、まだ『解放』もしてないんだから。」

「解放？」

「解放っていうのは魔導具の力を引き出すこと。で、解放は三段階に分かれてるの。」

「へー。」

優音が感心したように言った。

「第一段階の解放は『解魔』^{かいま}っていつて魔法が使えるようになったり耐性がついたりするの。」

「ふむふむ。」

「第二段階の解放は『解武』^{かいぶ}とって、武器としての能力が高くなるの。」

「そして最後の解放が、属性によって呼び方が違うんだけど私の場合、土属性だから『真土解放』っていの。優真君の光属性だったら『真光解放』ね。」

「『真光解放』・・・だったら、闇だったら『真闇解放』か・・・。」
「そう、でも最後の解放はほんの一握りの人しかたどり着けないほど困難なの。」

私は使えるけどね、とソフィアは付け加えた。

「おお、ソフィアさんが輝いて見える・・・。」
「ありがと、じゃあ実際に見せてあげるから一旦戻りましょう。」

そう言ってソフィアは入り口に向かって歩き出した。

「愛華、優音。出来そうか？」
「私は一発で成功させちゃうよ。」
「・・・無理かも・・・。」

それぞれの心境を表した言葉だった。

・・・。

入り口に戻った優真達は安全の為、商店街の近くにある草原まで来ていた。

「さて、じゃあ始めましょうか。」

ソフィアが自分の武器の細身の剣、いわゆるレイピアのような物を

取り出した。

そして、レイピアを正面に構え、目を閉じた。

少しすると、ソフィアの身体に紫色のオーラのような霧のような気体が纏い始める。

しばらくすると、霧は消え、紫色の膜のようなものがソフィアの身体を包んでいた。

「はい、これが解魔と呼ばれる状態。一度解放すれば次からは一瞬で纏えるようになるわ。今のは『解魔の儀式』といってリーザスに入学して最初に行く儀式なの。」

どうやらソフィアは優真達に教えるために解魔の儀式を踏まえて見せたようだ。

「ソフィアさん！魔法、魔法使って！」

優音が少々興奮気味にソフィアに詰め寄る。

「はいはい、ちょっと待ってね。」

ソフィアはそう言うのと辺りを見回した。

適当な木を見つけて、レイピアを地面に突き刺し呟く。

『ストーンブラスト』

地面から多数の土塊が飛び出し木に向かって凄い勢いで飛んでいく。

ドゴォ！バキバキツ！

土塊が木を貫いて木はそのまま倒れてしまった。

「……す、凄い！」

「ていうか、木が可哀想……。」

「さすがに、少し手加減したのですか？」

グレンが倒れた木を見ながら言った。

「ええ、本気でやると森が森じゃなくなりますから。」

「……。」

愛華は脅えた目でソフィアを見ている。

「さて、つぎは『解武』をするわね。」

ソフィアはレイピアを腰の位置まで下げて突きの構えをとる。

「……。」

優真の生唾を飲む音が聞こえる。辺りを緊迫した空気が包み込む。そしてソフィアが叫んだ。

「大地の息吹よ、全てを貫け！！！」

『土衝穿！！』

その剣が姿を表した時、衝撃波が優真達の体を駆け抜けた。

「な、何だ！？剣の形が変わってる！」

さっきまでと全く違うソフィアの魔導具を見て優真は驚きの声を上げた。

レイピアはより長く、より鋭くなり、刃は綺麗な薄い紫色だった。

「それぞれの魔導具には名前が元々ついているの。名前を知るためには魔導具と心を通わせる必要があるのよ。」

「質問です。どうすれば心を通わせられるんですか？」

「こればかりは自分でなんとかしなきゃならないのよ、レンちゃん。私の場合は、学園の実技の授業で突然出来るようになったんだよ。」

「・・・じゃあ、学園に通っていればいずれは解放出来るようになるんですか？」

「そうね、その可能性は高いわね、愛華ちゃん。」

そして、残るは魔導具解放最終段階だが・・・。

「最後の真土解放はまた今度の機会にやることにしましょう。」

「え、どうしてですか？」

優音が不満げに頬を膨らます。

「さすがにこれ使うとしんどいし、この辺一帯がクレーターと化しちゃうから。」

微笑んだまま、さらっと恐ろしいことを吐くソフィア。

「このことは学園でも教えてくれるから大丈夫。優音ちゃんなら解魔も解武もあつという間だよ。」

「ホント？やたー！」

ソフィアに言われて子供のようにはしゃぐ優音。

つーかあいつは帰れないかもしれないというのに脳天気だと優真は思った。

と、そこに優真の服のすそが誰かに引つ張られた。

「・・・学園、楽しみだね優君。」

「・・・ああ、そうだな。」

(ここで色々考えても仕方ないか。)

無事、三人で帰れるようにやれるだけのことはやろうと優真は決意した。

第七話（前書き）

ちよいと息抜きに執筆していたらいつの間にか更新出来るくらい書いてました。

第七話

俺達三人が無事にそれぞれの魔導器を手に入れた帰り道。

「うーん、それにしてもどうやって解放とかすんだろっなあ。」

鞘に入った二本の刀を見ながら呟いた。

あっちに帰るまではどうしてもこの二人を守らなきゃならない。

出来ることなら二人には戦って欲しくはないんだが……。

愛華はともかく、優音は意外と好戦的なのがあるから心配だ。

さっそく今日から筋トレでもしようかな。

「優真君、焦らなくても学園に通ってれば少なくとも解武までは出来るようになるよ。」

刀を眺めてうんうん唸っていたらグレンさんが苦笑しながら言った。

「ん〜、でもやっぱりこのビジュアルはどうかと……。」

「私も同感。」

俺の言葉に同調するように優音も口を尖らせる。

「……優君も優音ちゃんもそんな我が侂言っちゃ駄目だよ。」

俺と優音が不満を漏らす中愛華は苦笑しながら諭す。

「うーん、僕は教師だから鼻肩することは出来ないから一つだけアドバイスしよう。」

流石はグレンさん！話が分かる！

という事でさっそくグレンさんに教えを請う。

「ま、簡単に言えば、実践だね。学園の訓練でも似たような事するから。」

………ん？

「それだけですか？」

「そう、それだけ。」

うわぁ、もつと具体的な方法教えてもらえるかと思っただのに……

優音も何かがつかりしたような顔してるし。

「人間そんな都合よくできてないって事ですねー。」

レンよ、そんな楽しそうに言っつな。さらにがつかりするから。

「とりあえず、現時点で出来ることは少ないって事かね。」

「そうだね……。」

ハア、と兄妹二人視点溜め息を吐く。

さて、そういうことなら後、数日をどうやって過ごすかな。

俺は明日の予定を考えながら帰路に着いた。

.....。

翌日、俺は未だに慣れない布団の中で目を覚ました。

「.....くあく。ふっ、今日も快調。」

俺の部屋はグレンさんの計らいで学園の寮に入るまでは余っていた客間を使わせてもらっている。

愛華と優音はレンの部屋に厄介になっているそうだ。

「さて、行くか。」

俺は身支度を終えてリビングに向かった。

「おはようございます、リンさん。」

「おはよう、優真君。早いね。」

朝ななると優音はまともに機能しないから自然と俺は朝に強くなっていた。

朝食は何故があっちでも同じ、トーストと牛乳だった。

ジャムだけは自家製らしくイチゴのようなブルーベリーのようないただか不思議な味だった。

「どうしたの？お気にめさなかった？」

まじまじと朝食を見ていて不安になったのかリンさんが尋ねてきた。

「いや、そうじゃないですよ。ここまで、あっちと同じなのに改めて驚いてただけです。」

「そうなんだ、優真君達が住んでいた所の料理、何だか私気になるわ。」

「それだったら、愛華が色々知っていますから後で聞いてみるといいですよ。」

「そうね、そうしてみようかしら。」

そう言ってリンさんは二階のレンの部屋に向かった。

どうやら、まだ寝ている娘達を起こしに行くようだ。

そんな事を考えながら朝食に手をつけていると愛華がリビングに入ってきた。

「・・・おはよう、優君、早いね。」

「まあな、うちにはねぼすけがいるから自然と朝は強くなるんだ。」

「ふふっ、優音ちゃんが聞いたら怒るよ。」

そう言いながら、愛華はパンにジャムを塗っていく。

「・・・優君、今日は何か予定とかあるの？」

「んー、いや、入学に必要な物はもう揃えたし、町でもぶらぶらし

ようかなーと。そついや愛華、さつきリンさんが俺等の世界の料理に興味があるって言ってたぞ。」

「・・・そうなんだ。じゃあお昼にでも一緒に作るうかな。」

ふむ、今から昼が楽しみになるな。

さて、俺は昼飯食ったら出掛けてみようかね。

・・・。

愛華とリンさんの激ウマランチを食った後、俺は以前来た商店街を散歩していた。

腰にぶら下げた二本の刀にまだ違和感がある。

「ここはいつでも賑わってるんだな。」

見渡す限りの人、人、人。それも何だか耳がとんがっている人や漁人っぽい人や獣耳な人何かもいた。

「・・・どこを見てもファンタジーなんだな。」

もういい加減慣れてきたが、やはりまだ驚く事も多い。

だが、全てに慣れるまでここにいるわけにもいかない。

「さつさと元の世界に戻る方法を見付けないとな、つとここは・・・」

いつの間にか知らない所まで来てしまったようだ。

「やべえ、さつさと戻んなきゃ分からなくなる。」

元の道に戻ろうと踵を返した瞬間、

「キヤーーーーー!!!?!?」

何処からか悲鳴が聞こえてきた。

「おいおい、何だ何だ?」

叫び声が聞こえた方に振り向くと、豚面な男が小柄な少女に詰め寄っていた。

「つーか何と云うかまた、べたなシチュエーション。あの野郎はいつたい何族だ?」

そうこうしてる間に女の子がピンチっぽい。助けなきゃ駄目だよなあ、主役としては……。

「ブヒ、ブヒヒヒヒ、さあ、痛い目みたくなかったら、早いとこ金目のものを出すんだブー。」

「てゆうか、お前はブー 郎か!?!」

うむ、やはりそこはつつこむべきところだろう。

どうやらやつこさんは突然の俺の出現でうろたえている。

「な、何だブー、貴様はブー、関係ない奴は引っ込んでろブー。」

「ブーブーうるせえ！お前は豚族か！？」

ぶち。

あ、なんか切れた。

「ブ、ブ、豚だとブヒー！？き、貴様生きては帰さないブヒー！！」

何だか触れてはいけないところに触れちゃったみたいだ。

おいおい、ナイフなんか取り出してくれちゃったよ。

「切り裂けブヒ、『猪断爪』」

「な！？魔道具！！？」

豚野郎のナイフが形を変えて両手指の先に十の鋭い爪が形成された。

「覚悟しろブヒ、この俺様、盗賊ギルド『山猫』のピッグ・ファイル様を侮辱した罪は重いブヒ。」

やっぱ豚じゃん、というツッコミが言えないほど俺には余裕が無かった。

やばいな、相手がまさか魔道具もっててしかも解放出来るなんて思わなかった。

「……………」

今は考えている時間は無い。隙を突いてこの子だけでも逃がさない

「くっ……。」

仕方なく、俺は腰に付けたしょぼい刀を抜く。

「ブヒヒヒヒ、何だそのしょぼい刀はブヒ。魔道具みたいだが解放出来ない魔道具なんてただの玩具ブヒ。」

「うぜえ、豚野郎。てめえなんてこれで十分なんだよ。」

とは言ったものの、剣なんて持ったことはないし、喧嘩もあまりない。

ここはひとまず女の子を先に逃げさせて、その後に俺も逃げる作戦だな。

「……俺が時間を稼ぐ、合図したら一目散に逃げろ。」

「え!?!」

ゆっくりと敵を見据えて刀を構える。

さて、頑張るとしよう。

「今だ!! 行け!!!」

俺は叫ぶと同時に走り出す。

「ウオオオオオ!!!」

ガキーン!!!

俺が振り下ろした刀をピッグ・フィルは軽々と片手の爪で受け止めた。

すかさず、もう一方の刀で水平に切りつける。

ガキーン!!

が、またもや爪で防がれる。

「っ!?!」

「ブヒヒ、そんなもんかブー、攻撃というのはこうやるんだブヒ!」
ピッグ・フィルが俺の懐に潜り込み鋭い爪で切りつけた。

「ガハ!!!!」

切り裂かれた所からドクドクと血が大量に流れ出す。

やべえ、まともにくらった。

「う……ぐ……」

目が……霞む……。

「さあ、チェックメイトだブヒ。」

俺は……こんな所で……死ぬのか……。

いや、駄目だよな、諦めちゃ、愛華と優音を残して死ぬわけにはいかない！

「ブヒ、ブヒヒ。」

ビッグ・フィルがゆっくりと近づいて爪を振り上げる。

くそ・・・強くなりてえ・・・、この豚野郎を叩きのめすほど・・・強く・・・

『力が・・・欲しいか・・・？』

何？

突然、頭の中に声が響いた。

『答えよ・・・力が欲しいか・・・？』

誰だ？

『力が欲しければ我等の名を呼べ』

『恐怖を捨て、生へ執着しろ』

生への執着・・・。

『』さあ、叫べ！！我等の名は・・・』

「来い！……！』
『白聖』
『黒禍』
！……！」

ビッグ・フィルが振り下ろした爪は突然現れた二本の刀に受け止められた。

第八話

頭に浮かんだ名前を叫ぶと俺の手には二本の刀が握られていた。

これが・・・俺の魔道具・・・

右手に握られているのは刀身も柄も全てが漆黒の刀、名は『黒禍』。

そして、左手に握られているのは黒禍とは対照的な刀身や柄、全てが純白な刀、名は『白聖』。

いける・・・この二本の刀があれば優音も愛華も守れる・・・

そう思い、前方で突然の出来事に面食らっているピッグ・フィルを見据える。

やがて、我に帰ってなんか知らんが怒りを露にしている。

「ず、ずるいブヒ！魔道具が二つあるなんて聞いたことないブヒ！」

「そんなの知るか。とりあえず今は・・・お前を倒す！！！」

そう言つて、刀を構えて、敵に向かって走り出す。

ピッグ・フィルも魔道具を持って応戦の構えをとる。

「はあああああ！！！」

黒禍をピッグに向けて横薙一闪。だがピッグの猪断爪に阻まれる。

それに加え、白聖を相手の右肩辺りを狙って切りつけるが、ピッグは黒禍を弾いてバックステップで避ける。

俺も一旦後ろに下がり距離を取る。

「ブヒヒ、単なる見掛け倒しブヒか。」

不味いな、相手はかなり戦い慣れしてやがる。

まだ戦い慣れしていない俺は圧倒的に不利だ。

「ブヒ、これでもくらえブヒ！」

ピッグがそう言うと、奴の魔道具が紫に光輝く。

そして、それを地面に突き刺す。

「『ストーンブラスト』ブヒ」

地面から数発の土塊が俺に向かって飛んでくる。

どうやら相手はソフィアさんと同じ『紫土』。魔法はソフィアさんと比べたら数もスピードもない。

「ぐっ……」

だが、初めて自分に向けられた魔法を見て少し面食らってしまった。数発ほどくらってしまった。

どうする？このまま向かっても帰り撃ちにあうのがオチだ。

絶体絶命か、と思ったその時、頭の中にさっきと同じ声が聞こえてきた。

『ちつ、しょうがねえ、少し体借りるぞ。行くぞ、シロちゃん。』

『はいはい、了解、クロちゃん。』

「な、なんだあ？」

突然、さっき頭に響いた声がまた聞こえてきた。

さっさの堅苦しい言葉とは違って変わって妙にフランクな言葉使いだ。

そして、体の自由が効かなくなり刀を一旦消し、言葉を勝手に紡ぎ出す。

『我、暗黒の淵よりい出し者、右に現れしは大いなる闇の陳』

勝手に動く右手の上には小さな漆黒の魔法陣が形成される。

『我、天上の界よりい出し者、左に現れしは大いなる光の陳』

今度は左手の上に小さな純白の魔法陣が形成される。

右手に現れたのは黒く、黒く、何処までも黒い、正に漆黒という名がふさわしいほど黒い魔法陣。

対して左手に現れたのは、白い魔法陣。全く汚れを知らない正に純白の魔法陣。

「ぶ、ブヒー!？」

呪文の詠唱中、ピッグの足元に魔法陣が形成され、身動きがとれな
いようだ。

『光の陳と闇の陳を合わせ、眼前に立つ我が敵を灰と化せ』

右手の魔法陣と左手の魔法陣を合わせて、ピッグに向ける。

『虚無の灰塵きよむのかいじん!!!』

合わせた魔法陣から突如相手に向かって大爆発が起こり、ピッグが
爆発に飲み込まれていく。

その爆発は巻き込んだもの全てを灰にさせていく。

「ぶ、ブヒイイイ!!!」

しばらく爆発が続いた後、黒こげになったピッグがバタツと倒れた。
どうやら死んではいないらしい。

それと同時に俺の体の自由も戻った。

「ぐっ……はあ、はあ……」

初めての戦闘、勝ったのはほとんどあの二本の刀のお陰だ。

『宿主よお、もっと俺等の使い方学べよ。』

『そうすれば、僕達の力を最大限に発揮してもっと強くなれるから。』

「待て、お前らいたい……」

だが、俺が言い終わる前に二つの気配が消えた感じがした。

とりあえずこの事はグレンさんに聞くとして、少し休もう。

「ぐう……痛っ……」

さっきの魔法が結構効いた……つかソフィアさんの魔法ってあれ以上なんだよな……

そう考えると猛烈にソフィアさんが恐ろしく思えてきた。

そういえば、さっき俺がやったのって、魔道具解放だよな。

「あれって、解魔？いやでも刀が変化したから解武か？うーん、分からん。」

これもグレンさんに聞くとしよう。

さて、結構回復したしそろそろ帰るか……。

と、思ったその時……

「あの……」

「あれ？君は……」

振り向くとそこにいたのは、豚野郎に襲われていた女の子だった。

銀髪の長い髪を一つの三編みに束ね、瞳の色も灰色のかなり可愛い女の子だった。

うーん、愛華に負けず劣らず・・・

ハッ、いかん、全く別の事考えてしまった。

「えっと、逃げたんじゃなかったのか？」

「すみません、やっぱり心配で・・・」

ええ子や・・・優音とは大違いだ。

「あの・・・助けていただいて、ありがとございました。」

「い、いや、どういたしまして。」

女の子が深々とお辞儀するのでそれに釣られて俺もお辞儀をする。

お互いが顔を上げると何だかおかしくなって二人とも笑いあった。

「私、リル・ウェーバーと申します。」

「俺は霧谷優真、優真でいいよ。」

「はい、優真様ですね、よろしくお願いします。」

様付け何てされた事ないから少し苦笑いした。

「どうかしましたか？」

「いや、様なんて呼ばれた事無かったから。」

まあ、これが性格なら仕方ないけど・・・

「あ、そろそろ私帰りますね。」

「ああ、俺ももう行くわ。」

「はい、優真様、また何処かでお会いしましょう。」

そう言うと、リルはまた深々とお辞儀して去っていった。

「さて、俺もさっさと帰るとしよう。」

俺はまだ痛む腹を擦りながら帰路に着いた。

……。

帰って来たらもう大変。

ボロボロな俺の姿をまず最初に愛華が見て卒倒。

次にレンがパニクリ、優音はオロオロあたふた、リンさんだけが落ち着いた様子で俺を椅子に座らせた。

「訳を聞く前にとりあえずその傷だらけの体を治しましょう。」

「すみません、お願いします。」

俺は申し訳なく思いながらもリンさんに身を任せる。

『水の精霊ウンディーネよ。我は願う。この者の傷を癒す御身の力を我に授け給え。』

ポウっとリンさんの手が青い優しい光を纏い俺の傷口にかざされる。

これがリンさんの魔法……すごく暖かい……

『キュア』

リンさんの青い光が強く輝くとだんだんと痛みが消えてきた。

光が消えると俺の傷の痛みはほとんど無くなっていた。

「おー、すっかり元通り。」

ブンブン腕を振ってみても全く痛みは無い。

「で？お兄ちゃんいったいどこで何してたの？」

優音もどつちやら落ち着いたようで怪我した訳を聞いてきた。

とりあえずさつきあった出来事をみんなに話すことにした。

・・・。

「・・・というわけなんだ。」

話し終ると興奮した優音とレンが詰め寄ってきた。

「お兄ちゃん（優真さん）！！解放出来るようになったの（んで
すか）！！？」

「あ、ああ、多分・・・」

ホラ、と俺は黒禍と白聖を両手に出してみる。

すると・・・

「「「おおー！！！！！！」」」

パチパチと二人から拍手され尊敬の眼差しが向けられる。

ふふん、何だか悪くない。

ギョツと服の裾が突然誰かに掴まれた。

「愛華？」

「・・・危ない事しないで・・・優君にもしもの事があつたら・・・私・・・」

確かに無謀だったかもしれない・・・調子に乗った自分を少し恥じた。

「ごめんな、愛華。今度からは気をつけるよ。」

「・・・うん・・・」

ギョツと更に強く服の裾を掴む愛華。

俺はそんな愛華の頭を優しく撫でる。

「あらあら、若いっていいわね。」

そんな様子を見たリンさんが冷やかしてくる。

とりあえず、俺はそれを黙殺する事にする。

そんな時玄関から誰かが入ってくる音がした。

「ただいま。」

どうやらグレンさんが帰ってきたようだ。

「あ、お父さんー！」

レンが大声でグレンさんと呼ぶ。

レンはまだ興奮が冷めていないようだ。

そんなレンを俺は落ち着かせてグレンさんにも話した。

「ふむ、なるほどな。どうやら優真君は魔法の才能があるみたいだ。」

「わ、流石お兄ちゃん・・・」

だがグレンさんは魔道具解放の方ではなく、俺が使った魔法を気にしていた。

「うーんしかし、『虚無の灰塵』か・・・」

「その魔法がどうかしたんですか？」

俺がそう尋ねてみるとグレンさんはより一層渋い顔になった。

「いや、優真君が使った魔法は『複合魔法』と言ってね。二つの属性を合わせて発動する強力な魔法なんだ。」

「その中でも相反する二つの属性の複合魔法は凄く難しいんですよ。」

その中の一番弱い複合魔法でも大型の魔物を吹っ飛ばすくらいの威力がある、とレンは付け加えた。

いや、おっそろしいな……。そんなに危険な魔法だったのか……。

「あ、でもその魔法俺が使ったわけじゃないんですよ。」

「……と言つと?」

「何だか魔道具に体をのつとられて魔法使ったつばいです。」

「ほお、それはちゃんと解放できた証だよ。」

はて?何故にそうなるのでしょうか?

そのままグレンさんに聞いてみると

「解魔の際、正確には自分が魔力をもった時にそれを制御するため
に生じる人格だと言われているんだ。一つの属性につき一人、優真
君と愛華さんは二人いるね。」

まあ、確かに二つ声が聞こえてきたっけな……。

「そして自分がまともに魔法を使えるレベル、つまり解魔が出来る
ようになって初めてその人格と話が出るんだ。でも、宿主がピン
チになると自己防衛として宿主自身の体を使うこともある。」
「なるほど。」

は、勉強になるわ。流石教師、説明が上手い。

「さて、ここから先は学園で教えてもらえるから今日のところはひ
とまず終りにしよう。」

「はい、話し終ったところでこっちも出来たわよ。」

グレンさんがそう言うのとタイミングよく、リンさんの料理が運ばれてきた。

「やった！ご飯、ご飯」

「優音、意地汚ねえぞ。」

我が妹ながら恥ずかしい……って聞いちゃいねえ！！

そこからはもう俺と優音の第一次おかず取り合い戦争が勃発した。

そんな様子を見てグレンさんとリンさんは楽しそうで、レンと愛華は苦笑していた。

そして夜は更けていき、魔法学園入学式があと数日まで迫ってきていた。

第九話（前書き）

なんだか最近ファンタジー書いてるうちに面白くなっていったの間に書いた量が一番多くなってました……。

この小説でもジュンというキャラが出てきますが同一人物ではないです。ただ、作者が好きなのでっす。

第九話

いよいよ今日はリーザス魔法学園の入学式。俺達四人は学園の前まで来ていた。

俺はそれほど緊張してないんだが、他の三人娘はもの凄く緊張しているなあ。

「やれやれ、そんなに緊張する事かね？」

「だ、だって入学式なんていつだって結構緊張するもん！」

「・・・う、うん、そうだよね。」

「あ、あはは、私もです・・・」

ふう、別に気楽にしていればいいと思うんだがなあ。

と、そんな事を思っていると突然後ろから大声と走って来る音が聞こえてきた。

「うおー！！！！アーリサー！！！！ラブラブウォンチュー
ー！！！！」

「な、何だ？」

ズドドドつと物凄いスピードで人っぽい物体が通り過ぎて行った。

「な、何だ今の？」

「さ、さあ？」

俺達が呆然と走り去った方向を見ていると後ろから声がかかった。

「あ、ねえ、その人達！」
振り返るとそこには俺と同じ年くらい二人の男が立っていた。

「今ここを未確認奇声物体が通り過ぎなかった？」

「あ、ああ、向こうに。」

そう答えると二人ともはあ、と同時にため息をつく。

「全く、クワちゃんテンション高すぎだよー。」

「いやまあ仕方ない、クワちゃんだし。」

何だ、この二人・・・妙な笑顔浮かべてるし・・・

「え、えーっと、お二人もここに入学するんですか？」

おずおずといった感じで優音が二人に聞いた。

「ああ、そうだよ。俺はジュン・フォレス。それでこっちが・・・」

「アツミ・ハイモート。どうぞよろしく。」

「あ、ちなみに、あの未確認奇声物体はクワリス・ラージ。通称クワちゃん。ただいま求愛活動中」

ジュンと名乗った男が別に話さなくてもいいことまで話した。とりあえず俺達も自己紹介をした。

「そんじゃせつかくだから皆で一緒に行こう。」「ああ、俺は別に構わんよ。」

「私もいいよ。」

「私もです。」

「・・・私も・・・」

ジユンの提案が満場一致したので俺達は一緒に会場まで行くことにした。

「ところで追わなくていいんですか？えっと、クワ・・・なんとかさんを・・・」

「クワリスね、レンさん。クワちゃんでもクワさんでも好きに呼んだけで。クワちゃんは愛しのアムールを見にいったからいいんだ。」

アツミはしょうがないよ、全くといった感じで答えた。

「その愛しのアムールってアリサって名前なのか？」

「お！よく知ってんね。そうだよ、アリサ・ウイステリアっていうんだ。」

なんで知ってんの？という視線が二人から出た。

「さつき、その人の名前を絶叫しながら走ってったから。」

「うわ、クワちゃんそんな事してたんだ。本人に聞かれたらどうすんだか。」

と、アツミ。

「さっすが、クワちゃん！やることが常識をぶっ壊してんね。」

と、ジユンが言った。

二人ともそういう状況をめっちゃ楽しんでいるようだ。

そうこうしているうちに、入学式の会場が見えてきた。

「あ！あった！早く行こ！愛華お姉ちゃん、レンちゃん！！」

「あ、待って優音ちゃん！愛華さん、行きましよう。」

「・・・うん、じゃあ優君、先行ってるね。」

「ああ。」

一人で突っ走った優音をレンと愛華が急いで追いかけていった。

「さて、俺等はゆっくり行きますか。」

ジュンの言葉に俺とアツミも頷いた。

「そういえば、優真の職業って何？」

「俺は双剣士だ。」

「へえ、俺と同じ読みの職業だな。」

ジュンの言葉に俺は首を傾げる。

「俺の職業は槍剣士^{そつけんし}。槍の剣士と書くんだ。」

「槍剣士ってどんな職業何だ？」

俺がそう聞いてみるとジュンはよくぞ聞いてくれた、みたいな顔をして語り出した。

「槍剣士ってのは片方に槍、片方に剣を持つスタイルで、近距離攻撃と間接攻撃に特化してるんだ。」

「あれ捌きにくいんだよね。」

ジュンの相手をしたことがあるのかアツミは苦々しい表情をしてい

た。

なるほど、随分と厄介な職業のようだ。

「じゃあ、色と属性は？」

「ああ、なんか俺は二つあるみたいで『蒼火』と『紫雷』っつーらしいんだよね。」

どうやらジユンも俺と同じで二つの属性を持っているようだ。

「へ〜、俺も二つの属性持ってた黒闇と白光っていうやつ。」

「お〜俺等おそろい、お前仲間はずれ〜。」

「おーい、やめてくれよ〜。仲間はずれはひどいっすよ〜。」

よよよ、と泣きまねを始めるアツミをジユンは澄ました顔でスルーした。

「うおーい！！スルーすんなよー！！」

「ああはははは！！！！」

俺とジユンは笑いながら会場へと歩いていき、後ろからアツミも追いかけてきた。

とりあえず、これから長くなりそうな学園生活、早速仲良く出来そうな友達ができて俺は一安心した。

.....

どの世界でも共通なのか、学園長の無駄に長い話を聞き終えてから

各自の教室に移動した。

人が多くて愛華達がどこにいるのか全くわからなかった。一緒のクラスでありたいと切に願うところだな。

「おー来たなー優真ー。」

教室に入るとさっき知り合ったばかりのジュンがいた。

「おお、ジュン。同じクラスだったのか。」

「ああそうだよ。心配しなくてもお前の連れはみんな同じクラスだ。アツミとクワちゃんもな。」

ああ良かった。愛華達も同じクラスだったか。

と、思っていると愛華達が教室に入ってきた。

「・・・あ！・・・優君！！」

「ほんとだ、お兄ちゃんだ。」

「同じクラスだったんですね。」

突然美少女が三人も教室に入ってきたので、男子は騒然としている。

「・・・どこにもいないから心配したんだよ。」

「悪い、人が多くて。」

最近愛華には心配ばかりさせている気がする・・・以後、気をつけよ。

そんな様子を見ていたジュンと優音がニヤニヤと意地が悪い笑顔を

見せていた。

「ラヴラヴウォンチュー？」

「そうです。お兄ちゃんと愛華お姉ちゃんはラヴラヴウォンチューなのです。」

こいつらは……。とことん人を冷やかすのが好きみたいだな、おい。愛華なんて真っ赤になってんじゃねえか。

「こんなとこクワちゃんに見られたら羨ましがっちゃうよ。」

「おいコラ！！誰も羨ましがらんっちゃうに！！！」

そうジュンが言うと後ろから声がして振り向くと、朝物凄いスピードで走り去ったクワリスが立っていた。その隣にアツミも苦笑しながら立っていた。

「おう、クワちゃん、朝ちゃんと会えたか？」

「すみません……。だめでしたあ……。」

わざとらしくジュンが言うのと少々落ち込んだ姿を見せるクワリス。

「優真、この人が朝言ってたクワリス・ラージ。通称クワちゃん。」

「ああ、よろしく。」

「で、クワちゃん。こっちがさっき言ってた、霧谷優真。」

「うん、よろしく。」

愛華達も一通り自己紹介を済ませたところで先生らしき人が入ってきた。

「はい、とりあえず席は自由に座れー。今からホームルーム始め

るぞ。」

見た感じ四十代くらいで年季はありそうだがどこか頼りなさそうに感じた。

「えー先生の名前はコザー・ワイルドといいます。最初に決めるのは……」

特に興味がない俺は隣で暇そうにしているジュンに話しかけた。

「なあ、クワちゃんの思い人のウイステリアさんってこのクラスじゃないのか？」

「いや、このクラスだよ。俺の列の一番前から二番目。」

うーんこっからじゃ後姿しか見えん。まあいいや、後で拝むとしよう。

「えーそれでは今から解魔習得の為の試験を行う。習得できなかった者はクラスが変わるから皆尽力を尽すように。」

「おいおい、そんなのあるのかよ、レン。」

「い、いえ、私も初耳です……」

周りを見渡すと皆啞然としていた。

……。

その頃、学園長室では……

「学園長！！何故力の優劣を決める試験を導入したのですか!？」

グレンが学園長に詰め寄り抗議していた。

学園長は全く怯まずグレンを威圧して言い放った。

「グラッド先生、最近魔物が急激に強くなっているのをご存知でしょうか。ギルドも人手不足で魔物退治も雑になってきている。だからこそ我々も優秀な人材はより多く出さなければなりません。」

「くっ……」

確かに最近近くの森の魔物も動きが活発になりグレン自身魔物退治を行う事もあった。

こんな状況だからこそ自分の身は自分で守らなければならない、とグレン自身感じ始めていた。

「……わかりました、それでは失礼します。」

「ああ、グラッド先生。」

グレンが部屋を出ようとした時、突然学園長に呼び止められた。

「例の霧丘優真君の事なのですが、リーザス魔導研究所の召喚魔法課の方で調べてみるそうです。」

「そうですか……ありがとうございます。」

リーザス魔導研究所というのはその名の通り魔法をあらゆる面で研究するこの世界でも五本の指に入るほど優秀な機関の事。

その中でも召喚魔法課という部門はこの世界とは異なる世界の者と契約し呼び出す召喚魔法を研究、解析し魔物討伐や日常生活に役立たせる部門である。

学園長の言葉を聞いたグレンは複雑な心境で答えた。

「それと、もう一つ、最近《死神》が不穏な動きを見せているようです。魔物が活発化している事と関係があるかもしれません。十分注意して下さい。」

学園長が長い顎髭をいじりながらグレンを見据えた。

「・・・わかりました・・・」

グレンは一礼すると学園長室を後にした。

「・・・そろそろ、試験が始まる頃か・・・」

学園長は窓の外を見ながら呟いた。

・・・。

結局、生徒達のささやかな抗議も認められずなし崩し的に試験会場である闘技場まで来てしまった。

「しかし、三人とも大丈夫か？」

三人を見てみると入学式の時の緊張以上に不安が勝っていた。

「・・・も、もし、解魔できなかつたら優君と離れちゃう・・・」

愛華は弱気になり、涙目でうつむいている。

「俺が言つと説得力ないけど落ち着いて、頑張れ！」

「優君……うん……」

愛華を元気付けているとまた横から何か言っているが無視する。

「でも、優真さんが試験を受ける意味あるんですか？」

緊張しているレンが気をまぎらわせるように言った。

「ああ、一応建前上受けとけつてさ。ついでに解武も目指せつて。」

「けつ、いい御身分だな、おい。こんちくしょう。」

俺の言葉にジュンがよくわからない怒り方をしている。

そんな事を話しているとコザー・ワイルド先生が全員いる事を確認して試験の説明に入った。

「では、今から解魔習得試験を行う。試験内容は二人一組で一体の下級の魔物と戦い倒してもらう。二人とも解魔を習得すればその時点で合格、逆に解魔を習得せずに倒すと片方が解魔を習得しても不合格になるから気をつける。」

二人一組……元々戦いに向いてない愛華は俺と組むとして優音はレンと組むだろうな。

後の三人は……まあ適当に組むだろう。

「じゃあ愛華、俺と組んでくれ。俺が盾になるから落ち着いて解魔を習得する事だけに集中してくれ。」

「……うん、わかった。」

愛華は俺が盾になる事に若干不安そうだったが概ね納得してくれた。

「じゃーレンちゃんは私と組もうね。」

「うん、頑張ろう。」

二人で一緒に出来る事に安心したのか優音とレンはさっきよりも大分落ち着いているようだ。

「お前等はどうするんだ？」

俺は特に緊張もしてなさそうなジュンに尋ねてみる。

「あー、俺はアツミと組むとしてクワちゃんはもう一人しかいねえだろ。」

「やっぱそうだよな、行ってこいクワちゃん！」

ジュンとアツミがクワに向かって悪質な笑みを浮かべている。

まあ、誰の事を言っているのかというとウイステリアさんの事だ。

「お、おーい、ちょっと待ってくれよ、無理だろ……。」

そんな事を言いながらも多少は気になる様子のようにだな、おい。

「よし、じゃあクワさんの為に私が一肌脱ぎましょー。」

この手の話しにノリやすい優音が突然言い出す。

またまた、話を大袈裟にする厄介人物……

「ええ！？いや、やめとけって……」

かなり遠慮がちに言うが優音は聞く耳持たない。

「いいから、いいからー、私に任せて下さい レンちゃんも行く」

「ええ！！？わ、私も！？」

いきなり話を振られたレンは突然の事にうろたえている。

「面白そうだわ、俺達も行くぞい。」

「ガッテンツスよ！」

優音とレンに加えてどう考えても変な方向に持っていきそうな気がするジユンとアツミも向かった。

「……なるようになる。」

「……別の不安が襲ってくるぞ……」

慰めたつもりが逆に不安にさせてしまったようだ。

クワはため息をついて事の成り行きを見守っていた。

……。

「では、今から解魔習得試験を行う。まず最初は、霧丘優真・鳴瀬愛華！」

「うわ、最初か。愛華、落ち着いていけよ！」

「う……うん……」

幾分固さが抜けたと思ったがまたぶり返して来たようだ。

とりあえず、魔物がどのくらいの強さなのか確認の為に刀一本だけにしておこう。

「行くぞ、『白聖』」

白聖の名を呼び、右手に出現させる。

まだ俺自身の魔道具の力も把握しきれていないが、今は愛華の解魔習得を優先させよう。

愛華も魔道具の杖を構えて、準備をする。

「お兄ちゃん！愛華お姉ちゃん！頑張れー！！」

「優真さん！愛華さん！ファイター！！」

「楽しみだね、クワちゃん。」

「そ、そっすね……」

優音とレンが応援していて、その横でたじたじのクワとウイステリアが見ている、さらにその後ろでジュンとアツミがいやらしい笑みを浮かべながら眺めている。

結局、あの後どうなったかというと、四人（正確には三人）の巧みな話術によってウイステリアさんは丸め込まれ、クワと組む事になった。

「では、始め！！」

先生の合図で闘技場の端にある檻から緑色の狼のような動物が出てきた。

ただ狼と違う点は色と狼の額に三つ目があるという事。

「愛華、焦らずいこうぜ。」

「う・・・うん！」

んな事言っても愛華の事だ。肩肘張ってあんまりリラックスは出来てないだろうな。

とりあえず今はあの狼がどうでるか・・・

俺は右手に白聖を構えたまま、敵を見据える。

狼は低く唸りながら遠巻きに俺を見ている。どうやらまだあっちも様子見をしているようだ。

五分くらい経っただろうか、いい加減痺を切らした狼が俺に飛びかかってきた。

「ふっ・・・!!」

飛んでくる狼の牙を刀で受け止め、その勢いを利用して横に吹っ飛ばす。

だが、狼も空中で体勢を立て直し無傷で着地する。

おいおい・・・なんかなかなか強くないか？

この狼、スピードも速いしあの牙も一度噛みつかれたら痛いじゃす
まされねえぞ……

「先生ー！こいつ本当に下級の魔物なんスかー！？」

俺は狼を牽制しながら大声で先生に聞いてみる。

「いや、お前解魔出来るんだから下級より少し強い魔物の方がいい
だろうと。」

「んな殺生なー！！？つく！？」

再び飛びかかってくる狼を逆袈裟に切り上げるが難なくかわされま
た距離をとられる。

「くっそー、だったらこっちだって本気でやってやるよ！」黒禍
「！！！！」

左手に黒禍を出現させて今度はこちらから仕掛ける。

「はああ！！！！」

白聖で狼に向かって切り上げた後、黒禍で真正面から突く。

だが、最初の斬撃はまたしてもかわされ、突きの一閃も体を横にす
らされ牙で刃を掴まれる。

かわされた白聖をそのまま降り下ろして斬撃を繰り返すが、黒禍を
口から放しまたひらりとかわされる。

俺は一旦バックステップで狼との距離をとる。

むむむ、なかなか厄介だ……早く愛華が解魔しないと……

その頃、優真と狼の戦いを遠巻きに見ている愛華は弱り果てていた。

祈っても、話しかけても、揺さぶってみても解魔が出来る気配は一向になかった。

「……ああ、どうしよう……このままじゃ、優君やられちゃう……」

愛華はもう優真が傷つく姿を見たくなかった。

自分が何もできなかつたせいで……自分が何も知らなかつたせいで……だから絶対守りたい。

だけど、今の自分に何が出来るか分からない。どうすれば……どうすれば……

「ぐあああああ……!!」

「っ優君!!?」

優真の右腕に狼の牙が食い込むのを目の当たりにすると、気が付けば愛華は走り出していた。

……。

しまった・・・愛華の方に少し気をとられてた隙に噛みつかれた。痛いわーこれ、何だかぶつとい犬歯が刺さってるよ、おい。つか歯あ汚ねえよ、少しは磨けよ!!

噛みつかれたショックでどうでもいいことを考えてしまったが、ハツとして黒禍を一振りし狼を離れさせる。むう、痛すぎる・・・右腕に力が入らん。

「優君!!」

そんなピンチの時、遠くにいたはずの愛華が俺を心配そうに見ている。

「愛華!?!ここは危ない!!早く離れろ!!!!」

「優君・・・血が・・・こんなに出てる・・・」

狼に噛みつかれたところから血がドクドクと流れ落ちていく。

愛華はそんな様子を見ると杖を強く握り締め、嫌々をするように首を振る。

「いや・・・いや・・・もう・・・優君が傷つく姿なんて・・・二度と見たくない・・・」

愛華がそう呟いた時、愛華が握り締めている杖が青く光り、闘技場が青い光で溢れていく。

「愛華・・・解放出来たじゃん・・・」

そして、愛華の口から呪文が紡ぎ出されていく。

『青く、青く、澄みきる海の申し子ウンディーネよ、御身の力で彼の者の傷を癒せ。』

愛華の手に青い光りが収束され、俺の傷口に優しく手を置かれる。

『アクアリア』

青い光りの収束がだんだんと消えていくと俺の傷も全て塞がれていった。

だが、杖はまだ青い光りを放っている。

「治ったぞ、あい……」

「……さない」

スツと愛華は立ち上がり、俺に優しく微笑むと今度は狼を見据える。

あー顔には出してないけど目が相当怒ってるわ。いや、まぢ怖……狼もかなりびびってるし……

「許さない……優君を傷つけるやつは……絶対……」

強く青い光りを放っていた杖が今度はもっと深い青、いや蒼色になっっていた。

「目覚めて、『氷魔水蓮』」

愛華がそう呟くと突然愛華を中心に吹雪が吹き荒れる。

吹雪が収まると愛華の手には三十センチ程で、先に蒼色の玉が組み込まれた杖を握っていた。

驚く暇も与えずに愛華は呪文を紡ぎ出す。

『偉大なる氷の精、セルシウスよ、地獄より存在する冷気の源で我が敵を滅せよ』

その呪文で狼の周りが急激に冷気で凍らされていく。

『ヘルシング・アイス』

再び狼の周りに吹雪が吹き荒れ始め、その姿が見えなくなった。

やがて、吹雪が収まるとそこには巨大な氷山が存在していてその中心に狼が氷づけにされていた。

「ふう……」

スツと杖が愛華の手から消えて、そのまま後ろに倒れそうなところをギリギリ支える。

「……優君……もう……怪我不い……?」

「ああ、愛華のお陰だ。」

「……よかった……」

全ての力を使い果たしたのか愛華は眠ってしまった。

「霧丘優真、鳴瀬愛華、合格。」

それまで時間を止めていたように静かだった闘技場がまた動き出した。

「きゃー！ー！ー！やったー！ー！お兄ちゃん、愛華お姉ちゃん！ー！ー！」

「優真さん、愛華さん！ー！凄かったですー！ー！ー！」

一際大きい優音とレンの讚美に俺はブイサインを送る。

そして俺は愛華を抱えて観客席に戻った。

「では、次の受験者は・・・ジユン・フォレス、アツミ・ハイモート！出なさい。」

「お！俺等だってよ！。」

「んじゃ、行くとするか。」

「二人とも、頑張れよ。」

俺の言葉にニツと笑いかけて二人は同時に言った。

「五分で終わらせてくるよ。」

.....

闘技場に降り立つと、二人は魔道具も取り出さず、ただ談笑していた。

「なあ、クワ、何をしてんだ、あの二人は？二人は？」

「うん？あーあれ、いつもの事だから。」

それはいつも緊張感が全くない二人だという事なのか？・・・よく分からん。

「始め！」

そんな事は全く気にしていないのか、コザー先生は合図を出した。

その時、檻の中からドスン、ドスンと地震のような衝撃が伝わった。

「うわー、こりやまた随分な大物だわな、アツミさんよー。」

「へー俺、ゴーレムなんて初めて見た。」

そう、中からでてきたのはあの石で出来た巨大なゴーレムだった。

「お、おい！こりやさつきとはまるで比べもんになんねえじゃねえか！？」

「あーあの二人は　ていうか俺もんだけど特別だから。」

こんな時でものほほんと言ってるクワは実は大物か？

つーか何であるの二人はゴーレム目の前にしてじゃんけん始めてんだよ！？

分からん・・・もう何もかもわけわからん。

.....

「あー俺の負けかあ。」

「じゃ、とどめは俺ね。」

じゃんけんで負けたアツミはしぶしぶ弓型の魔道具を取り出した。それに続いて、ジュンも右手に長刀のような槍を持ち、左手に若干大振りな剣を持った。

「ゴオオオオオオオ！！！」

二人の態度に我慢の限界がきたのかゴーレムは雄叫びを上げた。

「うざい。」

一瞬の事でゴーレムも優真も何が起こったのか分からなかった。

ジュンが槍を横一閃に薙いただけでゴーレムの巨体が闘技場の壁に叩き付けられた。

「はあ、アツミさん、さっさと終わらすよー。」

「はいはい。」

相変わらず緊張感のない二人のやりとりに闘技場にいるクワ以外全員が啞然とした。

「一突の下に全てをひれ伏せ、『紫電槍牙^{しでんそうが}』」

ジュンがそう言えば、槍型の魔道具『紫電槍牙』に紫の電気が帯び、刃は大きく太くなり、魔道具自体の長さもジュンの身長以上に長くなった。

豪快に吹っ飛ばされたゴーレムは再び立ち上がり、怒りを露にして

ジュンに向かって走り出した。

「アツミさ〜ん、ヘル〜プ。」

ジュンはアツミに助けを求めるが全く危機感を感じていない。

「風の一矢で敵を貫け、『ふうがきゆうぜつ風雅窮絶』」

その言葉でアツミの左手にアツミと同じくらいの大きさの黒い弓が握られていた。

そして直ぐ様、右手に黒い風の矢を出現させてゴーレムに向かって放つ。

放たれた矢は一瞬で数百本の矢に分裂し、一斉にゴーレムに襲いかかる。

「グオオオオオオ！！！」

数百の矢に右腕と左足を貫かれ、破壊されたゴーレムはその場に崩れ落ちる。

「さて、フィニッシュだ。」

ジュンはゆっくりとゴーレムに近づいていった。

「蒼炎なる我が剣よ、悪しき者全てを灰塵と成せ」

ジュンの左手に握られているやや大振りの剣が蒼い炎に包まれていく。

『蒼陳烈火』
そうじんれつか

蒼い炎が収まるとジユンの左手には身の丈ほどもある両刃の大剣に変わっていた。

ジユンのもう一つの魔道具 『蒼陳烈火』 はそこにあるだけで地を焦がし、一振りすれば炎がほとばしる。

「おい、それだしてるところらの気温が急に上がって糞暑くなるから早くして。」 「あーはいはい。」

相変わらず脳天気な二人の声が闘技場に響く。

「んじゃ、行くかー。」

仰向けに倒れているゴーレムの側に立つと、ジユンは蒼陳烈火を高く掲げる。

すると剣先からおびただしい質量の蒼い炎が噴出する。

「ふっ！ー！」

ジユンは高く掲げた剣をその重さに任せて降り下ろした。その瞬間ゴーレムを中心に大爆発が起こり、すさまじい爆風が闘技場に巻き起こる。

「うわ！？あっつー！！防いでんのにあっつー！！」

アツミは爆風の被害を防ごうとして半球状の黒い風の膜を展開した

が防ぎきれていなかった。

爆風が静まると剣を降り下ろした先には爆発の衝撃でえぐれた大穴
いがいは何もなかった。

あの巨大なゴーレムは跡形もなく、本当にゴーレムなんかいたのか
疑いたくなりそうなくらい何もなかった。

.....

「ジュン・フォレス、アツミ・ハイモート、合格。」

その言葉に俺はハツとして改めてジュンとアツミを見た。

既に何事もなかったかのように観客席に戻ってきている。

「な、なあ、クワ、あの二人何者？」

「ん？槍剣士とアーチャー。」

俺が呆然としてクワに尋ねるが、素頓狂な言葉が返ってきた。

「いや、そうじゃなくて、何であんなに強いのかって事!!」

「あー、まあ後で本人達に尋ねてみればいいよ。」

上手くはぐらかされた気がするが、まあ後で聞いてみるとしよう。

それから少しして、ジュンとアツミが戻ってきた。

「あっはっはー、疲れたー。」

「焼け死ぬかと思った.....」

「つーかお前等も試験の意味ないじゃん。」

俺の言葉に二人はニヤリと笑った。

「いや、面白いから。」

「力のアピールだな。」

なんとまあ、ふざけた考えの奴らだ。

「で、何でお前等そんなに強いんだ？」

「ん、その話しは後でしょう。多分今日はこれで終わりだし。」

何で、と聞くより早く、コザー先生の声が響いた。

「闘技場修復の為、今日はもう終わりだ。続きはまた明日とする。

明日の一試合目は霧谷優音、レン・グラッドからだ。各自準備しておくように。」

明日はいよいよ優音とレンの出番のようだ。

よくよく考えたら、愛華の氷山とジュンの大穴が残ったままだ。流石にこの状態では続きは出来ないだろう。

「さって、町にでも行って俺等の身の上話でもするか。ウイステリアはどうする？」

「うーん、暇だし行こうかな。」

その言葉を聞いてアツミがクワをウイステリアさんに見えないように冷やかしている。

「さ、行こう。」

ジュンの一声で俺達八人は町に向かった。

……。

町で適当に歩き回り、偶然見つけた喫茶店に入った。

「さて、根堀り葉堀り聞かせてもらおうか。」

「いやん、優真君、あちしの何を聞こうっていうの?」

ジュンがふざけてカマ言葉で気色悪い事を言う。

「やめんか!! 気色悪い!!」

俺が怒鳴るとジュンはへらへら笑うだけだった。

そして、キリッと今度は真剣な顔をして居住まいを正した。

「実は、俺とアツミとクワちゃんは……。」

ごくつと誰かの唾を飲み込む音が聞こえた。

「ホモ……なんですおおおお!!!!?」

俺はジュンが言い終わる前に黒禍をジュンの首筋に突き付ける。

「死ぬか？」

「いやいやいやいやいや、すみません、すみません……！分かった、正直に言おう……！」

俺は黒禍をしまい、ジュンは首をさすっている。

「俺等は十賢者の子供なんだよ。」

第十話

「十賢者って、昔起こった戦争を終結させたあの十賢者？」

「そう、その十賢者。ちなみに俺の親父は蒼き炎の槍王、クラデイス・フォレス。」

「俺は母親が黒き暴風の女帝、セシル・フランベルジュ。旧姓だけど。」

前者はジュン、後者はアツミが言った。

どっちも何だかおっかない異名だな。

「で、クワちゃんが・・・」

「・・・恐怖と戦慄の大魔導士、バース・ラージはうちのおとつあんです・・・」

つーか、その異名はどうにかならんのか？

変なイメージが纏わりついてしょうがねえ。

「ほえー・・・」

レンはもう驚き慣れたのかオーバーリアクションではなかった。

しかし、こいつらの親がそんなに有名だったとは・・・人は見掛けによらんな。

「もしかして、お前等三人、解武も出来るのか？」

「俺とクワちゃんは出来ねえけど、アツミは出来るよな。」

「ハツハツハ、ま、君達二人とは違うのだよ、私は。」

ふざけた声を出してジュンとクワの肩に手をのせる。

その態度にイラついたのかジュンがアツミに肘打ちをくらわせた。

「ふおおお・・・」

「ふん、俺だってもう少しだったの。このナッツ野郎がつ！！！」

何故ナッツ？と、そんな事を考えていたらそれまで沈黙していた優音が突然顔を上げた。

「あの！私とレンちゃんに解魔の仕方を教えてくれませんか？」

何を考えているのかと思っただけならそんな事を考えていたようだ。

「でも、試験の最中に出来るようになるんじゃないか？」

「そうかもしれないけど、不安なんだもん。せつかく皆同じクラスになったのに離れるかもしれないんだもん。」

俺の言葉に優音の抱えている不安を語る。隣で聞いているレンも同じ気持ちなようだ。

「いいんじゃないか？」

それを聞いたジュンが優音に笑いかける。

「優音つちなら職業も属性もアツミに近いし、れっちゃんなら俺の属性と近いし。」

妙なあだ名がついたのはスルーして、俺はいいのかとアツミに言った。

「ああ、俺はいいよ。」

二つ返事でアツミは了承した。

ふむ、そういう事なら頼んでみるか。

「よし、そうと決まれば早速特訓開始だ！いざ参るぞ、御三方。」

「おお。」

「はい！」

「よろしくお願いします。」

特に詳しい説明も無いまま四人は飛び出して行ってしまった。

「……行っちゃったね。」

「……ああ。」

よく考えたらあんなふざけた二人に任せて大丈夫なんだろうか？

「クワ達はどうすんだ？」

ただそう質問しただけなのにクワは妙に緊張している。

「なんだったら、ウイステリアさんもクワにコーチしてもらえばいいんじゃない？」

そう言うと、クワは、止めて！余計な事言わないで！！と目で訴えてきた。

「クワちゃんが良いならお願いしたいけど。」

「ん、別にいいけど……」

あくまでもそっけなく、言うクワ。だが、内心天にも登るような心境だろう。

「よし、じゃあ行こう。二人とも、またね。」

そう言って、クワとウイステリアさんも喫茶店を出て行ってしまった。

店内に残された二人、さてこれからどうするか。

「愛華、これからどこか行きたいとことがあるか？」

「……私は特にないな。」

愛華も行きたいとは特に無しか……。学園の寮の手続きは明日だし……。今すぐ必要な荷物も無いし……。

「仕方ない、その辺ぶらぶらして時間がたったら帰るか。」

「……うん。」

俺と愛華は暇をつぶしに町へ繰り出した。

.....。

その頃、ジュンとアツミに修行をつけてもらっている優音とレンは
.....

「え、じゃあまず解放についてさらっと説明します。」

「はい！ししよー！」

「よ、よろしくお願いします、し、師匠。」

「引っ込めー、ししよー！！！」

ここは学園内にある魔法練習場。

ジュンが三人の前でうずまき眼鏡を掛け偉そうにふんぞり返り、アツミが野次を飛ばしている。

「解魔、解武、真解放はそれぞれ三段階に分けられていますが、いずれもそれを引き起こす原因は同じです。さて、優音っち、それらの原因とは何でしょう？」

「え、ええ！！？」

いきなり問題を出されて優音は困惑した。

「えと.....えと.....」

「はい、ぶー。正解は心からの強い思いです。」

優音があたふたしているうちに、ジユンが答えを出してしまった。

「思い……ですか？」

答えられずに唸っている優音を尻目にレンは言った。

「そう、そうすることで魔道具は答えてくれるんだ。では、れっちやん、どついう状況が一番効果的でしょうか？」

「……実践、でしょうか？」

「ピンポーン、正解〜。」

すかさず、ジユンはレンに問題を出すがレンはあっさり答えを出した。

その横で優音が凹んでいる。

「実践が一番解放にはうってつけなんだ。少し危険だけどそれでもやるか？」

ジユンがやるうとしてるのは試験と同じで下級の魔物を召喚し戦わせるという事。

「私はやります。」

「私も。」

だが、優音とレンは直ぐに決意する。

「・・・分かった。じゃあ最初は優音っちら。試験と同じようにアツミと組んで魔物を倒してくれ。」

「はい！」

「うす。」

優音とアツミの気合いが入った返事を聞くと、ジユンは懐から魔法陣が書かれた一枚の紙を取り出した。

「それは何ですか？」

「これは、召喚士が魔力を込めて書いた召喚の紙だよ。これに俺の魔力を込めれば俺が創造した魔物が出てくるって仕組みなんだ。れっちゃんにも後で教えてあげる。」

ジユンは紙に魔力を込め、ボンヤリと蒼く光った紙を優音達の前に投げた。

すると、紙が空中でポーンと煙を出して爆発し、その煙が晴れると中から蒼い鬼が姿を現した。

「グオオアアオオアアオオアア!!!」

鬼の凄まじい叫び声を聞いて優音は恐怖に顔を歪める。

「なんか・・・物凄く強そうじゃないですか？」

「うーん、確かに・・・」

アツミでさえも鬼の姿に少したじろぐ。

「悪い、ちょっと魔力込めすぎたー！メンゴ、メンゴ」

「メンゴで済むかー!!!」

全く悪く思っただけそうなの二人は同時に突っ込む。

そうしている間に蒼い鬼は優音とアツミの二人を見た。どうやら敵と認識したらしく、手の鋭い爪を構えて走ってきた。

「俺が牽制するから優音さんは集中してくれ。」

そう言ってアツミは黒い風の矢を三本出現させ、鬼を狙って同時に

放った。

だが、鬼は高く跳躍しアツミの矢を難なく避けるが、アツミは追撃の為の矢を放ち空中の鬼を捉え、鬼は地面に落下した。

「やった・・・？」

「いや、まだ。」

アツミの矢をまともにつけた鬼は何事もなかったように立ち上がる。

「そんな・・・ししょーの矢も通じないなんて・・・」

「あ、言っとくけどその鬼は優音っちの攻撃しか受け付けないから。」

「そ、それを早く言えー！！！！うわ！？また来た！！？」

アツミの言葉に鬼が反応して、また向かってくる。

アツミは指で空中に簡易式の魔法陣を素早く書き、魔法を使う。

『マジック魔風牢壁』

アツミの魔法で鬼を中心に風でできた牢が現れる。

鬼はその牢を爪で切り裂こうとするが牢に触れた瞬間風に押し返される。

「これで少しの間は大丈夫。どう？出来そう？」

アツミの言葉に優音はまだ駄目、と首を振る。

「ちゃんと強く思うんだ。あの鬼を倒したいって。」

その言葉で、優音は落ち着いて目を閉じる。

(あの鬼を・・・倒したい・・・)

優音はそう強く思った。この世界に来て、興味本意で魔法を学ぼうとしたが、魔物を目の当たりにして優音は恐怖を覚えた。

だが、魔物に怪我を負わされた優真を愛華が癒し、魔物を倒す様を見て優音は二人の足手まといになりたくないと思った。

(だから、私は・・・二人を守りたい!!)

優音がそう思ったと同時に、鬼が無理矢理牢を壊し真っ直ぐ二人に向かってきた。

アツミが再び矢を構えて、距離を取ろうとする。

だが、アツミが矢を放とうとした瞬間後ろから短い爆音がドドン、と二発響いた。

鬼はその音を聞き、本能的に横に飛んだ。

さっきまで鬼がいた場所には二発の銃痕が残っていた。

アツミは驚いて優音の方に振り返る。

優音の両手には銃身が三十センチ程で赤みがあった銀色の銃が二つ握られていた。

「必ず……倒す……行くよ、ふういあかがね『風威紅鉄』」

そう呟いて、優音は鬼に向かって飛び出す。

今、優音をつき動かすのは闘争心。

いかなる敵をも倒す為、闘争心以外の感情を無意識に排除している。

「ハアツ!!!!」

ガキイン、と鬼の爪と優音の銃がぶつかりあう。

鬼は優音の銃を弾き、空いている方の爪で喉を狙って突く。

優音はそれをしゃがんでかわし、鬼の懐に入り二発の弾丸を放つ。

だが、鬼は飛び上がって弾丸を避けて優音の背後に立ち、爪を降り下ろそうとするが優音は回し蹴りで鬼を吹っ飛ばす。

そして、互いに距離を取って対峙する。

「優音ちゃん・・・頑張ってる・・・」

その様子をレンが心配そうに見つめている。

アツミは直ぐに対処出来るよう引き絞った矢を常に鬼に標準を合わせている。

(今ちょっとパンツ見えた・・・)

ジュンは真剣な顔をして場違いな事を考えていた。

その時優音はブツブツと何かを呟いていた。

「……負けない……お兄ちゃんと愛華お姉ちゃんの役に立ちたい……だから……」

カツと優音の目が見開いて鬼を睨む。

「絶対倒すんだからぁー！！！！！！」

優音がそう叫ぶと風威紅鉄が眩しいほど紅く輝く。

光の中で風威紅鉄は変形していき、光が収まると風威紅鉄は優音の身の丈程もある一つの巨大なライフルのような銃に形を変えていた。

鬼はそんな事もお構いなく爪を振り上げ優音に向かってくる。

優音は鬼に標準を合わせると、周囲に存在する魔力の源、マナと呼ばれる元素が風威紅鉄に収束されていく。

鬼が目の前まで迫って来た時、優音は引き金を引く。

銃口から紅い巨大な光の線が鬼に向かって放たれた。

「ゴガアアアアア！！！！」

鬼は巨大な光の線に呑み込まれ、消滅してしまった。

鬼が消滅したのを確認すると、今まで殺気だっていた優音の雰囲気
が普段の状態に戻っていき、地面に座り込む。

「優音ちゃん！？大丈夫？」

レンが心配して優音に駆け寄った。

「あはは、大丈夫。ちょっと疲れただけ。」

明らかに大丈夫そうではなかったが、心配をかけまいと優音は無理
して笑顔を作る。

ジュンは二人のそんな様子を見ながらアツミに話しかけた。

「・・・見たか？」

「・・・ああ、見た。」

アツミは駆け寄ってきたジュンにそう言った。

二人は真剣な顔をしながらお互いの顔を見る。

「初々しい、清楚な白だった。」

「違う！ー！つーかあんたはどこ見てんのお！ー！？」

厳かな表情をして言うジュンにアツミは突っ込みを入れる。

その突っ込みに満足したのか、ジュンはニヤリと笑った。

「冗談だ。しかし、解魔すつとばして解武やっちゃまうとは・・・あの兄妹ただ者じゃねえな。」

「でも、明日の試験解武でもいいんだっけ？」

「いいんじゃない？その辺は俺から話しくよ。」

そう言うと、ジュンは二人のところに向かい、アツミもその後続いた。

「じゃー次はれっちゃんね。準備はいい？」

「はい！よろしくお願いします！」

気合い十分といった感じで返事をするレン。それに満足するとジュンはアツミに召喚の紙を渡した。

「よし、じゃあ行くぞ。」

「はい！」

「いつでもおっけー。」

そう言ってアツミは紙をジュンとレンの前に投げた。

ジュンの時と同じように煙が立ち込める。

そして、煙が晴れると人二人分くらいの巨大鳥が現れた。

「それじゃ、いっちょ気合い入れていくか、『紫電槍牙』」

ジュンは紫電槍牙だけを出して両手で構える。

「れっちゃん、落ち着いていこうぜ。」

「は、はい。」

そう言ってジュンは巨大鳥に向かって走り出した。

.....。

「「ただいま。」」

俺と愛華が食後の紅茶をまったりと楽しんでいると、玄関から二つ
の音が聞こえてきた。

優音とレンが修行から帰って来たのかな。

そう思っていると、優音とレンが魂抜けたように疲れきってリビングに入ってきた。

「うお！？どうした二人とも！！？酷い顔してんぞ。」
「・・・大丈夫？」

俺と愛華が二人を心配していると、二人の後ろからジュンとアツミが入ってきた。

遠慮という言葉を知らんのかこいつらは・・・

「おつす、優真。結果報告しに来たぜえ。」
「二人とも予想以上に強くなったよ。」

相変わらずヘラヘラと笑いながら語る二人。

「・・・でも見せるのはまた明日ね・・・私もう寝る・・・」
「私も・・・」

まるで生氣を感じられない。いったいどんな事したんだ・・・

「いやー、ハツハツハ。明日解放出来りやいいのに気合い入れすぎで、今日出来るようにさせちまった。」

「スパルタだったよなあ……」

そう言う二人は遠い目をして思い耽っている。

そんな二人を殴ってやりたい衝動に駆られたが、そんな事よりそこまで頑張った優音とレンを褒めてやりたい。

「じゃあ、俺等もう帰るわ。」

「ん、そっか。今日はありがとな。」

そう言うとジユンはニヤリと笑って俺を見る。

「優音っちとれっちゃん、下手したらお前より強くなったかもな。」

そんな言葉を残して二人は帰っていった。

「まじか……見たくねえ……」

俺は興味半分、怖さ半分でその場で呟いた。

.....。

いよいよ開始される解魔習得試験。

初戦の優音とレンは解放出来るようになっても未だ緊張しているようだった。

「優音、昨日教えた通りに頑張つて。」

「は、はい、ししよー。」

アツミがリラックスさせるように優音に話しかける。

いつの間にそんな親密に.....兄としては複雑.....

「よーっし、れっちゃん！修行の成果を見せてやろうぞ！」

「は、はいです！師匠！」

こっちはこっちでノリノリなジュンがレンを後押ししている。

そうこうしている内に、優音とレンの名前が呼ばれた。

そして、闘技場に降り立つと二人は気持を落ち着かせるように深呼吸した。

「始め！」

ゴザー先生の声響き渡ると、檻の中からつぎはぎが目立つ巨大なぬいぐるみのような魔物が一匹出てきた。

「あ、ちょっと可愛い。」

優音がその外見に少し惹かれる。

が・・・

「ぬがぁー！！ぶっ殺すぞー！！！！！」

喋った・・・どす黒い声で・・・つーか、

「ガラ悪！！！！？」

あまりの外見と中身のギャップに思わず突っ込んでしまった。

「ハツハツハ、俺あーゆーの結構好きだわー。」

ジュンが愉快そうにぬいぐるみを見て笑っている。

あ、なんか優音がショック受けてる……

……。

ぬいぐるみはどこからともなくナイフを取り出し二人に突っ込んできた。

優音はうつむいて『風威紅鉄』を構える。

顔を上げると優音は涙目でぬいぐるみを睨みつけた。

「そんなぬいぐるみ、いやぁー！ー！ー！」

ズドドドツと二丁の銃をぬいぐるみに向けて乱射する。

「ぬいごおー！ー！ー！」

飛び交う弾丸の嵐をぬいぐるみは必死の形相で、避け続ける。

レンはそんな様子を見て苦笑していた。

やがて、弾丸の嵐も収まりぬいぐるみは一旦離れて様子を見る。

「優音ちゃん、次は私が。」

「はあ、はあ、うん、うん、レンちゃん、よろしく。」

優音の弾丸を形成するのは優音自身の魔力。

よって、無駄撃ちし過ぎると今の優音では直ぐに枯渇してしまつう。

「ふうー……」

(平常心、平常心……)

レンは目を瞑って心を落ち着かせる。

(行きます、師匠！)

『天空より来りし雷の使いよ。我が身に宿れ。』

レンの魔道具が緑色の雷を放出し始める。

『げんまらいてい幻魔雷帝』

レンの持っている杖がより一層強く緑色の輝きを放ち、変化していく。

『幻魔雷帝』はレンの身長以上の長杖になり、緑色の電気を帯びて

いる。

レンはそのまま呪文の詠唱体勢に入る。

『雷よ、大いなる神の猛る雷槍よ、我等の敵をその力で焦がし貫け。』

言魂を紡いでいくと同時に杖の先に魔法陣が形成される。

その魔法陣から巨大な雷の槍が次第に姿を現していく。

「いつけえええ!!!」『サンダーボルトランス』

レンの言葉と同時に雷の槍がぬいぐるみに向かって放たれる。

ぬいぐるみはなんとか躲そうとするものの、間に合わず直撃した。

「ぬがああああ!!!」

ぬいぐるみは貫かれ、黒こげになり仰向けに倒れた。

そのまま勝負が着いたかと思われたが、しぶとく立ち上がる。

「ぐ……あ……ぶ、ぶつ殺すぞ……」

ヨロヨロな体で言っても全く恐怖を感じられない。

「よし、回復!! レンちゃんあれやろう!!」

「うん、分かった。」

そう言うとレンは呪文を呟き始め、銃を構えた優音に杖を向けた。

『ライトニングチャージ』

バチバチと優音の体に電気が帯びる。

「はああ!! 某漫画で思いついた技! 『電磁銃』^{レールガン}!!!」

二つの銃口から電気を帯びた弾丸が物凄いスピードで放たれる。

「が……は……」

帯電した弾丸に貫かれたためいぐるみは力なく倒れ、やがて灰になって消えていった。

「霧谷優音、レン・グラッド、合格。」

先生から合格の二文字が言い渡される。

「いえーい、勝利！」

「やったね、優音ちゃん！」

パアンと二人はハイタッチして笑いあった。

.....

「やりました、ししよー！！！」

「勝ちましたー！！！」

優音とレンが帰ってくるやいなや優音はアツミに、レンはジュンに抱きついた。

「わ！？ち、ちょっとまっ！！！？」

「むふ。役得、役得」

アツミはいきなりの事に焦っていたが、ジュンはだらしない至福の笑顔だった。

「あ.....すみません.....」

顔を赤くしてレンは離れる。優音は悪ノリしてまだ離れない。

「ああ！！もう少しそのまま良かった！！プリーズ！！ワンモワプリーズ！！！！」

ジユンが本気で残念そうに訴えている。

貴様はどこまでスケベなんだ！！

「とりあえず優音、いい加減離れる。」
「はい。」

一通りアツミで遊んだ優音は俺の言う通りに離れる。

アツミも少し残念そうにしていた。

やっぱりいつらどっちもスケベなんだな。

.....。

「でも、今回結局優音は魔法使わなかったよな。」

俺は別の生徒の試験中にふと思い出した。

「それは・・・」

「解魔じゃなくて解武の方を先にやっちまったんだよ。」

優音が口を開こうとするとアツミが割って入ってきた。

「どついう事だ？」

「優音は昨日の修行で敵を倒す為だけに感情を封印して暴走したんだよ。」

それだけ思いが強かったんだな、とアツミは付け加えた。

「暴走するとどうなるんだ？」

「最悪、そのまま感情もなくなって只の殺戮人形になっただろうな。まあ、昨日は力を使い果たしたから大丈夫だったけど。」

俺はジト目で優音を睨みつける。

優音は目をそらして、我関せずな態度だ。

「それで、結局怪我の巧妙というか解武を先に出来るようになったという分けだ。」

「でも解魔すつとばして解武なんてありえるのか？」

いや現に目の前にその事例がいるんだが・・・

アツミはうーんと唸りながら答える。

「まあ、前列がない事もないんだが・・・少なくとも魔法は使えないな。武器に属性付加くらいなら出来ると思うけど。」

「じゃあ何なら出来るんだ？」

俺は既に解武が出来るアツミに聞いてみた。

「解武は武器そのものの能力の向上だ。ま、簡単に言えば魔道具を状況に応じて変化させる『変化型』、自身の身体能力を向上させる『能力型』、それ以外の特殊な力が使える『特殊型』の内どれか一つが使えるようになるって事だ。ちなみに俺は『能力型』、優音は『変化型』ね。」

へえー、そんなのがあるのか・・・俺は何なんだろうなー。

「れっちゃんはちゃんと解魔出来たよなー、俺が使う魔法も教えたし。」

「はい、ちゃんと出来るか心配でしたけど・・・」

さっきのあの二つか・・・最初のド派手なのは分かるが二つ目のは使い所がないんじゃないか？

と、そんな風に聞いてみると

「二つ目の保険だ。最初使った魔法は結構魔力いるから今のれっちゃんじゃ一発が限界だ。それで倒せなかった場合の保険。」

「魔物の中には物理攻撃が効かないやつもいるし、そういうのが出てきたら魔法が使えない優音つちと魔力切れのれっちゃん、勝敗は火を見るより明らかだろ？だから一応魔力が少ないときでも使えるあの魔法を教えといた。」

「……物凄い長い説明ありがとう。」

だが、感心した。ちゃんと考えてたんだ。単なるスケベでバカな奴じゃなかったんだな。

「ここまで考えてる俺って凄くね？マジヤバじゃん？チヨベリバ。」

「……訂正、やっぱり単なるバカでした。」

「つかチヨベリバなんてどっから覚えてきたんだか。」

「次、クワリス・ラージ、アリサ・ウイステリア。」
「あ、クワちゃん達の番じゃん。どこにいんだろ？」

ジュンがそう言って闘技場を見渡すが見付けられない。

「……もう降りてるよ。」

愛華が既に闘技場に降りているクワとウイステリアさんを見つける。

「あーあークワちゃん物凄い緊張してるよ。」

「ハッハッハ、見てておもしれー。」

アツミが呆れて、ジュンが馬鹿笑いしている。

俺も闘技場の中央を見てみるとウイステリアさんに苦笑されているクワがいた。

間一髪で牛の突進を避ける二人。だが、牛は振り向いてもう一度突進する体制に入っている。

「くっそ、舐めるなよ!!」

そう言っつてクワリスは右手をかざす。

『開け、異界の門よ!我、クワリス・ラージの名においてその姿を現せ!』

『大いなる教書 グラン・グリモア』

クワリスの右手に一冊の本が出現した。

だが、その魔道具には色が何もなかった。

「なあ、クワの属性と色って何だ?」

その事に疑問を感じた優真がジユンとアツミに尋ねる。

「クワちゃんの家系は代々『召喚士』だからな。幅広く魔法を使う為には一つの属性に絞らないようにしてんだよ。」

ジユンが闘技場のクワリスを見ながら説明する。

「だからクワちゃんちゃんの属性は『無属性』と呼ばれるものなんだ。相手への有効な攻撃が出来ない代わりに弱点もない。」

アツミも緊張しているクワリスを愉快そうに眺めながら言った。

「召喚士ってどんな職業なんだ？」

「んー、それは見てれば分かる。」

ジユンにそう言われて優真はひとまず試験の動向を見守る事にした。

「最初から本気で行かせてもらおうから。」

クワリスが本を開くと勝手にページがめくられ、あるページで止まった。

『なんじ汝は炎の精霊の一角。我に付き従いてその身を現せ。』

本がより一層輝きを放ち、辺りを埋め尽くしていく。

突然のクワリスの変化に戸惑うウイステリア。

「いやいや、魔物には容赦しない主義なので。」

いつものような笑顔を見せるクワリス。

この場にいる全員に少々引かれているのは気付いていないようだ。

「じ、じゃあ次は私がやるね。」

ふらふらになって立ち上がる猛牛を見ながらウイステリアは言った。

『響け、我が声よ。我が奏でるは聖なる神曲。』

ウイステリアは両手に白い光を纏う。

『エオリアン・ハーブ』

光の中からハーブ型の魔道具が出現した。

ウイステリアはすかさず曲を奏でる。

『タイユフェール第一楽章《氷牢》』

ウイステリアがハーブを奏で出すと猛牛の足元から徐々に凍らされていく。

やがて猛牛は完全に凍らされた。

『ファイナーレ』

ポロンと最後にハーブを奏でれば、氷に閉じ込められた猛牛は粉々に砕け散った。

「……人の事言えない気がするんだが、どうだろう?」

クワリスは本を閉じる。

すると、巨大なドラゴンも光となって本に吸い込まれた。

「クワリス・ラージ、アリス・ウイステリア、合格。」

闘技場にコザー教師の声が響き渡った。

.....。

「いやー、見てて恐ろしかったよ、クワちゃん。」

「ウイステリアも怖かったし.....尻にしかれると大変だよ、クワちゃん.....」

「うおい!!--」

ジユンの冷やかにすかさず突っ込むクワ。

「ま、これととにかく八人全員合格したわけだ。」

「うん、万歳だよね。」

俺の言葉に優音も嬉しそうに同意する。

お、どうやら最後の試合が始まるようだ。

「では最後に、リル・ウェーバー、ナッツ・マカダミアン。」
「な!?!リル!?!?」

な、何でリルが?まさかここの新入生だったのか?

「おい、見てみるよ。ナッツ・マカダミアンなんてどう考えてもつけ狙いの偽名じゃねえか。」

「ハツハツハ、しかも女子ときてやがるから世も末だな。」

ジュンとアツミがリルのパートナーを見て何気に酷い事を言っている。

まあ、お世辞にも可愛いとは言えないが……

「……………!」

あ、リルがこっちに気づいて手を振ってきた。

俺もしょうがなく手を振り返す。

「……………? 優君、知り合いなの?」

「あ、ああ。ちよつとな……………」

詳細を話せば色々と聞かれそうだな。主にあいつ(ジュン)とあいつ(アツミ)に。

コザー先生の始めの合図で魔物が檻の中から出てくる。

中から出てきたのは高さが二メートルはある巨大な大トカゲだった。

.....。

中から出てきた巨大なトカゲはリルの予想以上の威圧感を放っていた。

その魔物の敵意剥き出しの眼力にリルは恐怖した。

リルはちらつと横目で優真を見て、ゆっくりと深呼吸した。

「.....そうです、優真様が見てるんです.....恥はかきたくありません.....」

リルは気を取り直して大トカゲを見据える。

あの時、自分を助けてくれた優真。

また会いたいと思っていたが同じ学園で、しかも同じクラスで会えるとは思ってもみなかった。

だが、リルは優真に話しかける事はしなかった。

次に会えた時はもっと強くなった自分を見てもらいたい。

「だから、こんなところで負けるわけにはいきません！」

リルは両手に装着されている籠手と足の脛から下を守るレガースを一蔑した後、大トカゲに向かって走り出す。

「あ！？リルちゃん！！！」

マカダミアンが止めようとするが聞こえていないのか止まらない。

「ハッ！！！」

リルは走った勢いで大トカゲに右ストレートを繰り出す。

だが、解放していない魔道具では決定的なダメージは与えられず、逆に腕で薙ぎ飛ばされた。

「きゃあ！！！！」

リルはとっさに籠手で防御し、直撃は免れたものの薙ぎ飛ばされた時の衝撃は相当なものだった。

「うう・・・」

「だ、大丈夫!？」

マカダミアンが心配して駆け寄ってくる。

だが、リルはそんなマカダミアンを手で制し、また大トカゲと対峙する。

「グルラアアアアア!!!」

大トカゲは雄叫びを発し、高く跳躍した。

空中で長い尾を操り、リルに向かって振り下ろす。

「ぐっ!!!」

再び籠手で防御するが、振り下ろされた尾の力は凄まじく、一撃の下にひざまずかせる。

大トカゲは容赦も何もせず何度もしるに尾を振り下ろす。

その度にリルの顔が苦痛に歪む。

「ガラアアアアア!!!」

大トカゲは一度尾を引いた勢いで回りながらリルの脇腹に尾を叩き込む。

「かつ・・・はっ・・・!!!」

叩き込まれた勢いで闘技場の壁まで吹き飛ばされる。

「つつ!!!・・・ゲホツ、ゴホツ・・・はうう・・・これは・・・
・・・肋骨が何本か逝ってしまったね・・・」

リルは朦朧とする意識の中でかすれた声で呟く。

「・・・悔しい・・・」

ポロポロと涙を流しながらリルは唇を噛み締める。

意識を手放さないように手も血がにじむ程に握り締める。

その間、大トカゲがこちらに向かってくるのが見える。

リルが間合いに入ってきた事で、また大トカゲは尾を振り上げ叩きつける。

だが、解放したリルに大トカゲは最早敵ではなかった。

振り下ろされた尾の攻撃をリルは両手で掴み、逃げられないように確り押さえる。

「ガアアアアア！！ギイイイイイ！！！」

辺りに肉が焦げ付く臭いが立ち込める。

大トカゲはその苦しみから逃れようと必死で逃げようとしている。

「ハアアツ！！！」

リルは大トカゲを力任せに上に投げ飛ばす。

「いきます……」

リルは腰を深く落とし、右腕を引いて構える。

大トカゲがだんだんスピードを上げて落下してくる。

「これはさっきの……お返しです!!!!!!」

『れつえんめつせん
烈炎滅閃!!!!!!』

リルの右腕に螺旋状の炎が形成され、落ちてくる大トカゲに振り抜くと同時に爆発した。

「ガアアアアアアア」

大トカゲは爆発で吹き飛ばされ、そのまま灰となって消えていった。

「リル・ウェーバー、ナッツ・マカダミアン、合格。」

……。

「おい、あのナッツ見てるだけで何もしなかったぞ。」

「解放出来たんなら少しくらい助けてもいいのにな。」

ジユンとアツミはまた、非ナッツ議論を始めている。

その時、リルがドサツと倒れこんだ。

「リル!? 愛華! ちょっと来てくれ!!」

「う、うん。」

俺は回復が出来る愛華を連れて急いでリルの元へ向かった。

「リル！！大丈夫か！？」

「・・・あ・・・優真・・・様・・・」

「待ってる・・・愛華、頼む。」

「・・・うん。」

愛華は『氷魔水蓮』を出して呪文を唱える。

『アクアリア』

愛華の魔法がリルの体を包み込んでいく。

「私・・・ちゃんと・・・出来ましたよね？」

「ああ、凄かった。」

「・・・良かった・・・」

リルはゆっくりと目を閉じる。どうやら眠ってしまったようだ。

それから少しして愛華の放つ光が止まった。

「・・・終わったよ。・・・後はどこかで安静にしてないと。」
「じゃあ保険室に連れていくよ。」

俺は愛華に手伝ってもらい、リルを背負って保険室へ向かった。

闘技場から外に出るとき、観客席からある馬鹿者シユンの声がした。

「優真きゅん、二人きりだからって襲っちゃだめよん。」
「するか!!!」

俺はまだ何か色々言ってくるジユンやアツミから逃げるように闘技場を後にした。

・・・。

「それでは、解魔習得試験を終了する。明日から授業を行うので準備しておく事。」

結局終わってみると、一部の生徒を除いた全ての生徒が解魔を習得していた。

「あゝ、終わった終わった。この後、やるかい？アツミさんよお。」

「おお、じゃあやるか。」

「どうして？」

俺は妙にテンション高くなっているジユンとアツミに言った。

「これからちょっとトレーニング。優真も来るか？」

俺は少し考えたがリルの所に行かなきゃならないので今日はやめとくと答えた。

二人が何かと冷やかしてくるが俺は聞こえないふりしてリルの所へ向かった。

第十二話

ジユン達と別れた後、俺は優音と愛華とレンを連れて学園の医務室まで来ていた。

「入るぞ、リル。」

「あ、はい。」

中に入るとさつきより幾分顔色が良くなったりリルがいた。

「もう大丈夫か？」

「はい、ご心配をおかけしました。」

ベッドの上でペコリと頭を下げるリル。

その時優音が俺の腕を突っついてきた。

「ねー、まずは紹介してよ。」

「ああ、この人はリルって言うんだ。盗賊に襲われてたところを助けた。リル、こっちは俺の妹の優音でこっちは幼なじみの愛華、最後がレン、今居候、といつてももっとう出ていくけど、その家の娘さんだ。」

「よろしくね！リルちゃん！」

満面の笑顔で駆け寄る優音。

その次に愛華も近寄っていく。

「・・・よろしくね、リルさん。」

「よろしく願います、リルさん。」

「はい、よろしく願います、愛華様に優音様にレン様。」

その後は女四人寄ればなんとやら、俺は忘れ去られて大いに盛り上がっていた。

・・・。

「随分暗くなっちゃったな。」

リルと話し込んでいたらすっかりと夜になってしまった。

リルに迎えが来たのでそれをきっかけに俺達も帰る事にした。

「それにしてもリルさん綺麗でしたね。」

「ん、ああ。」

「・・・。」

レンの一言で俺はリルの姿を思い出す。

銀色の髪に整った顔立ちはまさに人形みただった。

「どした、愛華。浮かない顔して。」
「え？」

何だか愛華が元気がなさそうな顔をしていたから話しかけると、弾かれたように愛華は顔を上げた。

「……う、ううん……何でもない。」
「そか？」

本人がそう言ったのであまり気にしないでいると、いきなり尻を蹴られた。

「いった!!何すんだ優音!!!!」
「……鈍感。」

そう言つと愛華の手を引いてずんずんと先に行ってしまった。

「何だ、あれ。」

「あ、あはは・・・」

レンに聞いてみても苦笑いするだけだった。

理不尽だ。俺が何をしたというのか。

と、そう思った時学園の方から爆音が響いた。

「な、何だ!？」

「今の音、魔法練習場の方からしたよ!」

魔法練習場?どこだそこ?

「こっちです!」

魔法練習場に行った事のある優音とレンは脇目も振らずに走り出した。

・・・。

優真達が魔法練習場にたどり着いた時、一人の男と一体の魔物が向

かい合っていた。

「ん？どうした、優真。」

その声をかけたのはアツミだった。

「あ、いや、今物凄い音がしたから何事かと思って……」

そう言っているとアツミはああ、と納得したように言った。

「さっき言ったトレーニングをやってたよ、今はジュンが戦闘中。」

再び優真が中央を見ると、そこには二つの魔道具を構えたジュンと体長二メートルはあるかと思われる赤い鬼が対峙していた。

「あ、これ私達がやってた修行。」

「何!?!」

優音の弦きを聞いた優真が隣のアツミに詰め寄った。

「お前等！人の妹と命の恩人に何危険なことやらせてんだ！！」
「あー、耳元で叫ぶな叫ぶな。それについては二人の同意はもらっ
たし俺等も保険として援護してたから。」

アツミは耳を両手で塞いで全く反省していない様子だった。

叫ぶ優真を見て優音はため息をつき、レンは慌てふためいている。

「はあ、まあ終わった事はしかたないけどあれは？結構苦戦してん
じゃないのか？」

優真はそう言っつて赤鬼と交戦しているジュンを指差す。

「それは大丈夫。クワちゃんがちゃんと制御してるからまず死ぬこ
とはないから。」

今度はアツミが練習場の二階を指差す。

そこにはクワリスが魔道具片手に戦闘を傍観していた。

突然、アツミが思いついたように優真を見て言った。

「そつだ！優真も修行してみる？」

「え？いや、俺は……」
「あれ？しない？多分お前こん中で一番弱いよ。」

優真は否定の言葉を言おうと思ったが、アツミはニヤリと笑ってそれを遮った。

弱い……俺が？愛華や優音やレンよりも……？

ショックを受けた優真はゆらりと後ろを振り向いた。

「そ、そんなことないよ。」

優真の視線を受けた愛華が焦ったように言う。

優音とレンの苦笑がやけに痛い。

優真はキッとアツミを睨んで指を指す。

「やるぞ、やってやるよ！」
「ああ、じゃあ今はあいつの戦闘見て勉強してくれ。」

そう言ってアツミはジュンの方を向く。

優真もそれにならって見ると、今まで様子を伺っていた赤鬼が先に動き出したのが見えた。

ジュンは直ぐに反応してバックステップで鬼の爪での一閃をかわす。

鬼がよろめいたところにジュンは紫電槍牙で突きを放つ。

鬼は紙一重でそれをかわすとしゃがんだ体勢のまま回し蹴りを放つ。

ジュンは高く跳躍してそれをかわすと紫電槍牙に魔力を込める。

すると紫色をしたおびただしい量の電気がほとばしりバチバチと音をたてる。

「ハッ！！！！」

ジュンは紫電槍牙を鬼に向かって投げた。

鬼は再び紙一重で槍の突きを避ける。

が・・・

「ガアアアアア!!!」

紫電槍牙の突き刺さった場所を中心に魔法陣が形成され、その魔法陣の中にある鬼の体に電気が走った。

ジュンは地に降り立つと、両手で蒼陳烈火を構える。

「紫電槍牙の能力、『雷縛り（かみなりしばり）』だ。魔法陣の中にいる存在は痺れて動けない。」

ジュンは蒼陳烈火を上段に構えて魔力を込める。

「そしてこれが蒼陳烈火の能力、『神炎^{しんえん}』。込めた魔力の分だけ具現化する炎の量が増し、破壊力が上がる。」

言い終わると同時に蒼陳烈火から炎が巻き起こり、それに伴い辺りの気温もどんどん上昇していく。

「終了だ。」

ジューンは高く掲げていた蒼陳烈火を鬼に向かって叩き付ける。

「ギアアアアアア！！！！」

その一撃で鬼は左右に分かれた瞬間そこから大爆発が起こりジューンと鬼の姿が見えなくなる。

爆煙が収まるとそこには蒼陳烈火を振り下ろしたままの姿のジューンしかいなかった。

「ふー、終わった、終わった。」

魔道具を消して肩を回しながら優真達のところ歩いてくる。

クワリスも本を閉じ、二階から降りてきた。

「おー、次俺と優真がやるから。」

「はあ！？」

突然のアツミの発言で優真はすっとんきょうな声をあげる。

「へー、面白そうじゃないっすか。」

気楽そうに言うジュンに優真は反論する。

「ちょっと待て！！俺もジュンと同じようにやるんじゃないの！？」

「ま、いーからいーから。」

アツミは優真の背を押して中央に立たせる。

後ろでは愛華達が心配そうな目で見ている。

「一応手加減はするからさ。」

「くっ……」

ここまで言われて黙っている分けにはいかない。

優真は両手に黒禍と白聖を出した。

アツミもそれを見て風魔窮絶を出す。

「それじゃ、始め。」

クワリスはまのびした声で合図を出した。

「ふっ・・・!!」

最初に動いたのは優真、アツミはまだ動いてはいない。

「はあっ!!!!」

優真は白聖で刃を返した状態でアツミを切りつけた。

アツミはそれを簡単に風魔窮絶で防ぐと優真の足を蹴って仰向けに倒れさせる。

「殺す気で来ないと俺には勝てないよ。」

上から聞こえる声に優真は蹴りを放つ。

だが、アツミは簡単にそれを避けるとその足を取って投げ飛ばす。

「のわ!!!??」

優真は何とか受け身をとって体勢を立て直す。

「行くぞ。」

アツミは右手に黒い矢を形成し、それを優真に向けて放つ。

「くっ……!!」

優真はギリギリで矢を刀で打ち落としてアツミを見た。

だが、視線の先には何もいない。

「いつ……!!?」

優真の頭にポコツと何かに叩かれる。

「はい、今死んだぞ。」

慌てて振り向くとアツミが苦笑しながら立っていた。

「思うに、優真はまだ全然魔道具の力を引き出せてないんだな。ま

あ、優真の場合魔道具が二つだから扱いにくいんだらうけど……

「じゃああれは？普通に二つ使ってるけど。」

優真はそう言って偉そうに威張っているジユンを指差す。

アツミはそれを一蔑するとふっ、とため息をついた。

「あんなのはまあ気にすんな。小さい頃から随分スパルタらしかったから。」

ジユンはあんなのと言われた事が不服だったのか両手を上げて怒りを露にしている。

その横でクワリスがジユンの腹に当て身をくらわせて黙らせた。

「解魔が出来たんなら《声》も聞こえたはず。まずは自分の魔道具に呼びかけて力を借りる事だよ。」

優真はそう言われてあの時話しかけて来た二つの声を思い出す。

そして心の中であの二人に呼びかけてみる。

「……………」

だが、何度呼びかけてみても何も反応がない。

「無理。」

「おかしいなあ、魔法紡いだ時どんな感じだった？」

アツミは後ろにいるジュンとクワリスに問いかけた。

「俺はあれだ。親父に殺されかけた時から普通に《心霊》と協力して紡いできた。」

「心霊？」

優真が聞き慣れない言葉に首を傾げる。

「ああ、心霊つーのは魔道具の化身だ。そいつと協力して魔法が習得できる。」

へえー、と優真だけではなく、愛華達も頷いていた。

「じゃあ愛華とレンはその心霊と協力したのか？」

「・・・ううん、私は会ってないよ。」

「私もです。」

「あいぼんはあれだろ。初めて解放するとその拍子に魔法習得する事が多いから、多分それ。れっちゃん俺が使う魔法をそのまま理解してもらったから。なかなかないぞ、他人の魔法の理論をそのまま理解して使えるのって。」

あいぼんで・・・また変なネーミングを。

優真はまず最初にそれが気になった。

「とりあえず本題に戻すと、窮地に立たせればいいんじゃないの？」

若干話が逸れてきたところでクワリスが言う。

「よし、じゃあ死なない程度に本気でやるから。」

・・・。

再び対峙する優真とアツミ。

アツミの顔はさっきとはまるで別人のように真剣だった。

「じゃあ、始め。」

クワリスの合図が出た瞬間にアツミは動いた。

まず一つ、矢を放つ。

優真は刀で切り伏せアツミに向かって走った。

「はあっ!!」

優真は刀で袈裟切りを放つが、手応えはなく一瞬のうちに目の前のアツミが消えた。

「消えっ・・・がっ!!!」

いつの間にか後ろに回りこんだアツミが蹴りを放っていた。

優真は転がって体勢を立て直しながらアツミと向かい合う。

休む間も与えずアツミは矢を放つ。

それをかわした優真だったが今度は後ろからヒュッと風を切る音が聞こえてきた。

「がっ!!?」

優真の背中で衝撃が起こり意識が飛びそうになるのを何とか堪え、後ろを振り向いた。

弓を構えたアツミが見える。どうやら矢を放たれたようだ。

「速すぎだろっ!!!」

悪態をつきながら駆ける優真。間合いに入ったところで二本の刀で次々と斬撃を放つ。

アツミは全ての斬撃をかいくぐり近距離で矢を放つ。

「ぐっ……」

無意識に刀で防いだが優真の体に衝撃が走る。

更にアツミは四本の矢を形成し、一度に放った。

「ぐああ!!!」

直撃はしなかったものの、矢に纏った風が優真の体を切り刻んでいく。

「結構本気だねえ、アツミさん。」

「でも、まだ加減してるけど。」

すっかり傍観を決めこんでいるジュンとクワリス。

その横では愛華達が心配そうに見ている。

その中でも愛華の様子がどこか変だった。

「……いや……だめ……優君が殺されちゃう……」
「いやいや、あいぼん、殺されるなんて……って寒!?!?」

いつの間にか愛華の手には『氷魔水蓮』が握られていた。

そして、おぼつかない足取りで歩いていく。

「危ないって!!そっち行ったら!!」

クワリスは愛華の手を掴み、その歩みを止めさせる。

「……放して……」
「なっ!?!?」

愛華を掴んでいるクワリスの手から凍りついていく。

「あ……く……む、無念……がくつ。」

その言葉を最後にクワリスの体が凍りついた。

「あああああ！！？クワチャーーン！！！」

少々大袈裟にショックを受けるジユン。

その後ろでは豹変した愛華を見つめる優音とレンがいる。

様子がおかしい事に気付いた優真とアツミは一旦修行を中断してジユン達のところに駆け寄った。

「あ、愛華！！何してんだよ！！！」

凍りづけにされているクワリスを見て優真が叫ぶ。

だが、愛華の目には最早動く物全てが敵に見えていた。

「……優君をいじめるのは……許さない……」

「ハッハッハ、愛されてるねえ、優真。」

「いや、笑ってる場合ちゃうやろ！！！」

狙われている当の本人がへらへら笑っているのに突っ込む優真。

その時、冷気とは別のところから今度は熱気が感じられた。

「ふははははは、凍りついた美少女の心を溶かすには情熱の炎つてねー!!」

熱気の発生源、蒼陳烈火を持ったジュンが愛華の前に立ちはだかった。

その様子を見て優真が慌てて近づくが熱くて近寄れない。

「おい！愛華に何するつもりだ!？」

「心配すんな。魔法使わせて魔力切れを狙っただけだ。」

その言葉と同時に蒼陳烈火の纏っていた炎は激しさを増し、辺りの気温も上がる。

「あづい……」

いつの間にかアツミは一人二階に上がって様子を見ていた。

「おい、巻き込まれなくなかったらこっち来た方がいいぞ。」

その言葉に優音とレンは素直に二階に上がるが優真は心配そうに愛華を見ていた。

「愛華……」

「さっさと行かないと巻き込まれるよ。」

いつものふざけた声色じゃないジュンの言葉に渋りながらも二階に上がった。

「さって、どうしたら大人しくなってもらえるのかね。」

正直、ジュンに勝算など無かった。

愛華から感じられる魔力は明らかに人外のもので、十賢者の子であるジュンでも恐怖した。

「全く、何者なんだか……アツミさん！後ろから援護頼むー
！」

「りょうかーい！」

ジュンは更に蒼陳烈火に魔力を込めて、炎の量を増していく。

その時愛華が右手をかざす。

右手に急速に集まっていく魔力を見てジュンは焦る。

「やっぱ!?!」

直感的に横に回避行動をとるジュン。

その瞬間、今ジュンがいた場所に衝撃破が走り、全てを凍らせながら壁をも凍らせた。

「ひえ〜、どんだけですか。」

今の一撃で溜めに溜めていたジュンの炎が全て消されてしまった。

間伐入れず次々に衝撃破をジュンに向けて放つ愛華。

ジュンは必死の形相で逃げ回っている。

「ひえ〜、お助け〜!!」

そんな様子を見ながらアツミは何か考えている。

「ししょー、愛華お姉ちゃんを止められる手はないんですか!?!」
「…………優真。」

何か思いついたらしく、アツミは優真に言った。

「何だ?」

「お前が愛華さんを止める魔法を紡げ。」

「む、無茶をおっしやる…………」

だが、アツミは無理矢理優真の首元を掴んで投げ飛ばした。

「うわああああ!?!?」

だが、優真が地面に叩き付けられる寸前、アツミの魔法で衝撃は避けられた。

「どわー!?!?!」

辺りを見てみると愛華からジュンが逃げ回っている。

近くで見るとさらに凄まじい。だが、不思議と恐怖はなかった。

俺が・・・あの愛華を止める・・・

優真はそう思うと本当に出来るのか不安になる。

いや、今まで俺は愛華に助けられっぱなしだった分、今度は俺が愛華を助けるんだ。

だから・・・

優真は目の前の二本の刀を見る。

「頼む！力を貸してくれ！！」

その瞬間その言葉に答えるように、二本の内的一本、白聖が白く輝く。

白聖の輝きが消えると同時にポーンと何かが出てきた。

「呼ばれて飛び出てズバババーン！はい、どうもー、シロちゃんです！」

やけにテンション高めで身長二十センチ程で天使のような羽を生やした人形のような少年だった。

「えーっと・・・お前が、心霊？」
「そーだよーん！」

自称シロちゃんは今大変な事になっているジユンを見て笑っていた。

「あはははは、あのおにーさん、たのしそうだねー。」
「ゼエ、ハア、た、楽しい分けねえだああ！！？」

愛華の衝撃破を必死で避けるジユン。

「と、とにかく愛華を止めたい、力を貸してくれ！」
「ほいほーい、じゃあイメージして。あの人を止めたいって強く。」

言われた通りに強く思う。

止めたい、愛華を・・・大切な・・・俺が守ると決めた人を・・・

「よーし、来た来たー！！！」

シロの体が眩しいほどに白く輝き出す。

それと同時に優真も紡ぎ出された魔法の理論を急速に理解していく。

やがて、光が止みシロも刀に戻る。

『これで習得完了。しっかりあのおねーさんを止めてあげて。』
「了解。」

優真は愛華に向かって駆け出した。

「愛華！！！」

優真が愛華の目の前に出ると愛華は歩みを止めた。

だが、吹き荒ぶ魔力の冷気は止まず、目も虚ろでその瞳は優真を見ていなかった。

優真は知っている。昔、今と同じように愛華が周りを傷つけてしまった事。

愛華は覚えていないがその時もこんな風に人外の力を使っていた事。思えばあれは魔法だっんじゃないかと思う。何故あの時愛華が魔法を使ったのは分からないが。

「待ってる、愛華……」

優真は白聖の切っ先を愛華に向ける。

「おい、怪我させないんじゃないのか？」
「大丈夫。」

怪訝な表情をするジュンに優真は答え、そのまま呪文の詠唱を始める。

『光よ、大いなる白銀の輝きよ、我が前に立ちはだかる敵を無に帰せ』

白聖が白く輝き、辺りを光で埋め尽す。

『煌めく封印の光』
きらめくふういんのひかり

刀が白銀の輝きを帯び、辺りの氷がどんどん溶けていく。

二階に運ばれたクワリスの氷塊も溶けてバタツと倒れた。

「し、ししょー、クワさん大丈夫なんですか？」

「ああ、まあ、気にしなくていいよ。」

アツミはもう全く心配していなかった。

最終的には優音やレンを連れて逃げようかと思ったが、優真のお陰でもうそんな必要なくなったようだ。

輝く光の刀を見て先に愛華が動いた。

右手をかざし、優真に向かって衝撃破を放つ。

優真は白聖で向かってくる衝撃破を切る。

すると、まるで蒸発するように消え去った。

「煌めく封印の光は白聖に魔法消滅と魔力封印の効果をつける。」

優真は愛華を見据えて刀を構える。

「この力でお前を助ける。」

優真は愛華に向かって駆け出した。

愛華は両手を前に突きだし巨大な氷の矢を形成し、優真に放った。

「はああー!!」

優真はその矢を縦に切り裂こうと刀を振り下ろした。

だが、切られる寸前で矢は八つに分散し優真の背後に回りこんで貫こうとする。

「くっ……!!」

優真が刀で矢を防ごうとした瞬間、全ての矢が破壊された。

「矢なら負けないツスよ。」

二階からアツミが弓を構えているのが見える。アツミは矢が回りこんだ瞬間には既に自分の矢を放っていた。

「おおっと、フォレス選手高いジャンプだー!! 十点、十点、十点、十点、十点、十点!!」

今度は頭上から声が聞こえてきた。

「おらあ！！！」

優真が見上げた時にはジユンが紫電槍牙を放った後だった。

愛華の真横すれすれで落ちた紫電槍牙は魔法陣を形成し、雷縛りを発動。愛華の動きを止めさせる。

「何するか知らんが、やるならさっさとやれ。」

「ああ、サンキュ。」

優真は愛華に歩み寄り、刀を振りかざす。

「おいおい、まさか優真……」

「お兄ちゃん！！？」

「優真さん！！」

みんなが困惑するなか優真は刀を振り下ろした。

ズバツと肩から切られる愛華。

優真以外は呆然とその様を眺めているだけだった。

バタツとつつ伏せに倒れる愛華。その様子を見ながらジユンは雷縛りを解く。

「あい……か……おねえ……ちゃん……？」

ショックのあまり啞然とする優音。

だが、切られた愛華はどこかおかしい。

切られたというのに全く血が出ていない。

「優真、お前何したんだ？」

それを疑問に感じたジユンが聞いてみた。

「煌めく封印の光の効果を付けた白聖は殺傷能力がなくなるんだ。だから、愛華は死んでない。」

その言葉に一同はほっと息を吐いた。

優真が愛華を抱き起こしてみると安らかな寝顔で眠っている。

「さて、優真。聞きたいことは山ほどあるんだが。」
「勘弁して、俺もう疲れた。」

優真は愛華をおぶると逃げるように練習場を出た。

「待つてよー!!お兄ちゃん!!」
「優真さん!!」

その後に優音とレンも急いでついていく。

「はあー、仕方がない、俺達も帰るかアツミさんよお。」
「ああ、起きてクワちゃん。」

アツミはゆらゆらと揺らすのが起きる気配なし。

「おきろっつってんだ」リアア!!」

クワリスの尻に向かってジュンは蹴りを放った。

「うぎゃーお!?!?」

クワリスはあまりの痛さに尻を押さえて蹲っている。

「ハツハツハ、そんな姿、ウイステリアには見せられんな。」
「くっ、やるかあ、このお。」

クワリスは右手に魔道具を出現させた。

それを見たジュンはニヤリと笑う。

「クワちゃん今回出番なかったからなあ、暴れ足りねえなら相手してやるよう。」

ジュンの両手にも二つの魔道具を出現させてクワリスと対峙する。

「はいはい、もうやめとけて。」

アツミがパンパンと手を鳴らして止めさせると二人は素直に魔道具をしまった。

二人もどこかしらで止めて欲しかったのだろう。

「さて、さっきの事についてどう思う？」

アツミの真剣な声色に二人の顔も無表情になる。

「あの強大な魔力は十賢者並だったぞ。」

「くう、いきなり全身凍りづけにされるとは・・・不覚。」

ジュンがああの時の光景を思い出しながら言うと、クワリスは悔しそうに呟く。

「しかし、優真に怪我させたただけであんなになるとは・・・うらやましい。」

ジュンの言葉は既に論点がずれている。

二人はそんな姿を見て苦笑していた。

「でも怒っただけであれほどの魔力が上がるもんなのか？」

アツミは思案顔で呟くと、ジュンが何か思いついたようだ。

「よし、クワちゃん、怒れ。」

「がおー。」

「あ、駄目だ、ウザ。」

相変わらずこの三人が集まるとまともな会話が出来ない。

だが、漫才をしていたジユンがふと、気付いた。

「ん？あれ？いや、まさかな……」

「どした？」

微妙に様子に変なジユンにアツミが不審に思っ
て尋ねる。

「いやさー、もしかしてあれか？『氷の精霊姫』「おひのせいれいきみなのかなーって。」

「いや、ないだろ。伝説の話だし、ありえねーって。」

「いや、そんなんだったら面白いなーって。」

ありえない、と口を揃えて否定するアツミとクワリス。

ジユンもそんなに深く考えない事にした。

「ま、あいぼんについては追々分かっていくだろ。じゃ、とりあえ

ず帰るか、今日から寮暮らしだな。」

「よーっし、さっさと帰るぞー！」

話を打ち切りにしてジュン達は学生寮に向かって走り出した。

・・・。

色々荷物があって明日から寮生活になる優真達は一旦グレン宅に帰っていた。

優真は愛華をベッドに寝かせた後、レンの部屋でさっきの事について話し合っていた。

「いったいどうしちゃったんだろ、愛華お姉ちゃん・・・」

「うん・・・」

優音とレンはさっきの凄まじい光景を思い出していた。

二人は不安と心配が入り混じったような顔をした。

「大丈夫だ、愛華は明日になればいつも通りの愛華だから。」

妙に確信めいた発言をする優真。

優音とレンはその自信満々な態度の優音を不審に思った。

さらに裏付けするように優真は言葉を続ける。

「あれはジュン達の話によると、いわゆる暴走なんだと。自分の魔力に耐えきれず、自分の意思と関係なしに魔法が発現してしまうらしい。」

へー、と納得する優音とレン。

それと丁度いいタイミングで優真はあくびをする。

「・・・俺もう眠いから寝るぞ。」

「あ、うん、おやすみ〜。」

「おやすみなさい。」

ボタンとドアを閉めて優真は近くの窓の外に見える星空を眺める。

「・・・愛華・・・もう大丈夫だから・・・」

優真はそう呟いて、自分の部屋に戻っていった。

第十三話（前書き）

最近主人公より他のキャラが目立っている気がするッス。

第十三話

今日からいよいよリーザス魔法学園の初授業。

優真達は朝早くから家を出て、既に教室に待機していた。

「最初ってどんな授業なんだろう?」

「まあ向こうとは全く違うんじゃないか。」

わくわくが隠せない優音に優真が答える。

そんな時、ジュンとアツミとクワリスが教室に入って来た。

「おーっす、おはよーさん。」

「おう、ギリギリだな。」

ふふん、とジュンは鼻で笑った後、愛華を見た。

「あいぼん、もう大丈夫なのか?」

「・・・あ・・・うん、もう大丈夫・・・」

うんうんと頷きながら優真にいやらしい笑みを向ける。

そして愛華に手招きをして何かを耳打ちしている。

「ちょっと優真に……ゴニョゴニョ。」

「……え、え？ええ！？」

ボンツと音が鳴るくらい顔を真っ赤にする愛華。

「……はう……」

愛華はトマトの如く赤くなって目を回している。

「お前、いったい愛華に何吹き込みやがった……？」

「ふっふっふっ、内緒。」

ジュンに詰め寄る優真に愛華が優真の前に立つ。

「どした？愛華。」

「……えいっ！」

ギョツと突然愛華が優真に抱きついてきた。

「な、ななななな！！？」

抱きついてる方も抱きつかれてる方も顔を真っ赤にしている。

「おおー！！！」

「ヒューヒュー！！！」

「ドンドンパフパフ！！！」

例のごとくいつもの三バカが囃し立てる。

優音とレンは事の成り行きについて行けてない。

「ジュン！テメエ、愛華に何言いやがった！？」

「え〜？」

聞こえているくせにわざと聞こえないふりをして耳を突きだしている。

優真は愛華から脱け出そうとしても愛華の力が妙に強くて脱け出せない。

「ハツハツハ、いや実は、あいぽんに昨日優真が助けたお礼として抱き締めて欲しがってるって言っただけだ。」

ジュンが自分の体を抱き締めてくねくねさせている。

「え？優真さんそんな事言ったんですか……？」
「いやいやいや、レン！信じるなよー！」

ジュンの言葉にレンがちょっと引き気味な軽蔑の目を優真に向けていた。

優音はもう我関せずな態度で教師が来るのを今か今かと楽しみにしている。

そんな時教室の入り口がガラツと開いた。

「あ、優真様、おはようございま……」

リルが今の優真の状況を見て固まってしまった。

「待て！リル！！誤解するな！！」
「い、いえ、私は何も……」

リルが顔を赤くしながら席に着く。

だがちらちらこちらを気にしている。

「ふうー、愛華、とりあえずもういいよ。」

「あ……うん……」

考えてみれば最初からこうすれば良かったのだ。

優真は落ち着きを取り戻してジユンを思いきり睨む。

「感想は？」

「いや、柔らかかった、っておい!!」

ジユンの言葉に思わずノリッコミしてしまう優真。

「許さんぞー、ジユーン……」

「やるかぁ、このぉ!!」

凄む優真にジユンは手を開いたり閉じたりしている。

優真は右手に白聖を出し、ジユンは両手に紫電槍牙を出した。

二人の異様な雰囲気、他に他のクラスメートもざわつき始める。

「行くぞぉ!!!!」

「来いやぁ!!!!」

二人の魔導具がぶつかり合う瞬間、

「止めてくださーい!!!!」

「ギャアアアア!!!!」

爆音が二つ鳴り響いて、二人の体が吹っ飛ばされ昔の漫画の如く壁にめりこむ。

爆発を起こした少女　リルは怒った顔でめりこんでいる二人に近寄った。

「お二人とも、いい加減にして下さい!! 最初の授業なんですから静かにお願いします!!!!」

「はい、えろおすんません・・・」

二人は滑稽な姿のままリルに謝る。

リルは魔導具を消して満足そうにニコリと笑うと席に戻っていった。

そんなこんなで最初の授業。

なんと最初の授業は優真達がお世話になっているグレンだった。

「皆さんはじめまして。先生の名前はグレン・グラッドです。これからよろしくお願いします。」

グレンの自己紹介で拍手が巻き起こる。

普段教師の血縁者が生徒にいる場合授業は行わないのだが、学園の教師は十にも満たない為妥協している。

だが、グレンは例え自分の子供でも贖するつもりはなかった。

「さて、では最初なのでまずは基本中の基本、魔力の制御からやっていきましょう。」

グレンは黒板に文字を書いていく。

皆、最初の授業ということで真剣だ。

ただ一部を除いては……

「眠い・・・」

「はや!？」

まだ始まって五分もたっていない内にジユンが机に突っ伏した。

「うおーい、寝るなー寝たら死ぬぞー。」

アツミがジユンの肩を掴んでガタガタと揺らす。

それで何とか体を起こして授業を眺める。

「何しに来たんだお前は・・・」

優真は呆れてそう呟き、授業を真面目に聞き始めた。

・・・。

「いやー、やっと昼休みだな!」

「お前ばーっとしてただけじゃねえか。」

伸びをするジユンに優真が突っ込む。

今優真達は（リルとウイステリアも加えて）学園見学しながら食堂を探していた。

そんな時、二人の男子生徒が優真達の横を通り過ぎていった。

「おい、聞いたか？四年のリー先輩に三年のカイラ先輩が勝負するんだって。」

「へー、リーザス四魔導の座を賭けて？」

「そうらしいぞ。」

男子生徒が通り過ぎていった後、ジユンがニヤリと笑った。

「お前何かエロい笑みが多いよなあ。」

「エロいだと！？この紳士な俺様に向かって！！」

どことが紳士だ、と言おうとした優真だが四魔導という言葉が気になつた。

「四魔導って何だ？」

「あ、それお父さんから聞いたことがあります。」

優真が聞いてみるとレンが答えた。

「四魔導というのは生徒達の中で最も高い魔力を持つと言われる四人の魔導使です。」

「そして、権力も使い放題なのだ。」

レンの説明にジュンが付け加えた。

優真は怪訝そうな顔が段々ひきつり始めた。

「まさかお前……」

「ふっ、こんなに早く四魔導の一角をお目にかかれるとは……」

おう、お前等早く行くぞ！」

「その前に飯な。」

バリバリやる気のジュンにアツミが冷静に突っ込む。

それもそうか、とジュンは納得したようだった。

だが、焦る気持ちは止められないのかソワソワしている。

そうこうしている内に食堂らしき場所が見えてきた。

「うはっ、こんでるな。」

見渡す限りの人、人、人。

だがまだ空いている席はあるようだ。

「ぬおー！！そこだあ！！！」

狙ったように九席丁度空いている席を叫びながらジュンが取った。

「ナイスだ。じゃあ俺達で席取っとくから注文してきて。」

アツミとクワリス、ウイステリアで席を取り、残りは注文を取る事にした。

そこは当然の如くクワリスとウイステリアは隣同士。

ウイステリアの前ではクワリスは妙にクールに振る舞っている。

残りの五人で注文を取った後、席に戻るとジュンがせわしなくテーブルを叩いていた。

「はやくー！はやくー！」

「ガキみたいに騒ぎ立てるなー！」

「はい、師匠、どうぞ。」

優真達の世界で言ううどんみたいな物をレンから受け取りジユンは物凄い勢いで掻き込んでいく。

優真はふと疑問に思った事をレンに聞いた。

「なあ、レンは修行終わったのいつまでジユンの事を師匠って呼んでんだ？」

「え？えーっと・・・何ででしょう？」

自分でもよく分かってないらしくレンは首を傾げる。

「ふおおふああへっひゃんふあ・・・」

「飲み込んでから喋れ。」

アツミの言葉にジユンは口の中のものを全て飲み込んだ。

「んっく、俺はれっちゃんがまだ修行したいってんなら別にいいよ。」

「ほんとですか!？」

レンの目がキラキラと期待に輝いている。

ジュンはそんなレンに笑って頷く。

「ああ。」

「じゃあお願いします!」

レンは礼儀正しくジュンに頭を下げた。

ジュンはいつものようにいやらしい笑みを浮かべている。

「ぐっふっふっ、手取り足取り教えてあげましょう……じゅるり。」

「やめとけ、レン。危険だ。」

何だかジュンにレンを任せるのは危険だと感じた優真はレンを止める。

「にゃにおう!!お前はこの俺様がそんなケダモノに見えるのか!」
「?」

「すぐえ見える。」

「ガーン……ジュンちゃんショーック!!」

わざとらしく頭を抱えるジュン。そんな様子に一同は苦笑している。

「とうとうか、さっさと食わなくていいの？」

クワリスが手を止めて次のネタを考えているジユンに言う。

ジユンははっとなり違う意味でまた頭を抱えた。

「しまったあああ！！！うおおおお！！！！」

箸を掴んで掃除機の如く吸い込んでいく。

「つかもう噛んでないな、と優真は思った。

「よっしゃあ！早速行ってくる！多分闘技場だと思うから食ったら来い！！！」

言うことだけ言ってピューッと走って見えなくなった。

「はち……」

優真はそう呟いてからカツ丼を口に運び始めた。

……。

優真達が昼食を済ませ闘技場に来てみると、中央に二人の男が剣と槍をぶつけ合っていた。

見ると周りには物凄い数の生徒達が観戦していた。

「あれ？てつきりジュンが戦ってるのかと思ったけどもつやられたのか？」

優真がキョロキョロと辺りを見回して見ると椅子に座っているジュンが見えた。

優真はジュンに近づき、ポンッと肩を叩いた。

「よお、もう負けたのか？」

「違う！俺より先に勝負仕掛けた人がまだやってんの。」

中央を見てみると、槍を持った長身の男が倒れた男の首元に槍を構えた。

倒された男は両手を挙げる。どうやら勝負はついたようだ。

「次！俺に倒されたい奴はいるか！！」

槍使いの長身の男が叫ぶと誰も挑戦しようとしなない。

それを見計らって今度はジュンが叫んだ。

「はい！次俺ー！！」

緊迫した雰囲気の中で脳天気な声が響く。

ジュンは観客席から闘技場に降り立った。

「ふん、次はお前か。名前は？」

「人の名前を聞くときはまず自分からって言いますよ？」

ジュンのその言葉に闘技場の全員が驚愕した。

ひそひそとどこからか声が聞こえてくる。

「あの四魔導の一人に……」

「バカか？」

「あいつMだな。」

明らかに最後のはおかしいが優真達はそれに突っ込んでいる余裕は

なかった。

男は一瞬キョトンとしたが突然笑い出した。

「ハツハツハツハ、確かにそうだな。俺は四年生のレイザート・リ
ーだ。レイと呼んでくれ。」
「ウツス、レイ先輩ツスね。俺は一年のジュン・フォレスツス。」

その名前を聞いたレイザートは怪訝そうな顔をする。

「フォレス……どっかで聞いたような……」
「まあ、どうでもいいじゃないツスカ。時間もあんまりないんだし、
さっさとやりましょう。」

それもそうだな、と深く考えずに一本の槍を出現させる。

それを見たジュンはつまらなそうな顔をした。

「解放させないんですか？」
「はん、させてみるよ。」
「そりゃそうか。」

ジュンも一本の槍を出現させる。

だが、紫電槍牙は魔力を帯びておらずその姿も只の槍の形だった。

「解放しないのか？」

「さっきの言葉をそのままお返しします。」

その言葉を聞いてレイザートはニヤリと笑みを浮かべる。

「そうか・・・よっ！！！！」

レイザートは一瞬で間合いを詰め、槍の柄でジュンを突いた。

だが、ジュンは体を回転させ槍を避けると回転する力を利用して、紫電槍牙で叩き付ける。

レイザートはしゃがんでやり過ぎすとジュンの足に回し蹴りを放つ。

「まだまだっ！！」

ジュンは飛び上がり紫電槍牙を思いきり振り下ろす。

しかし、レイザートは紫電槍牙の一撃を槍で防ぐ。

「ぐっ……」

ジュンの半端ない一撃は衝撃も凄まじく、レイザートは顔をしかめた。

「ぬおおおおお！！！」

レイザートは雄叫びをあげながら紫電槍牙ごとジュンを薙ぎ飛ばす。

ジュンは空中で体勢を整えて、地面にスタツと降り立つ。

その光景を見て闘技場の観客がザワザワとざわめき始める。

「あいつ、四魔導と対等に渡り合ってるぞ……」

「すげえ……」

「あいつ、実はSだったのか。」

最後のはやはりおかしいが優真達も観客と同じように驚いていた。

「なあ、四魔導って弱いのか？」

「いえ、決して弱くはないはずなんです……」

呆然とする優真の呟きにレンが答える。

レンは驚愕というより自分の師とも呼べるジュンの実力を誇らしく思っていた。

「あいつは魔法無しなら俺達の中で一番強いよ。」

「そうなのか？」

アツミの言葉に優真は聞き返す。

「これで相手がどうでるかな。」

クワリスは全く心配してなさそうに楽しそうに言う。

「ふう、お前なかなかやるな。」

「そりゃどうも。」

レイザートがため息をつくが、それでも視線はジュンから外さない。

だが、突然ふつと構えを解いた。

「今から少し本気を出してやる、だからお前も本気出せ。」
「.....」

ジューンは無言でレイザートを見る。

レイザートの周囲に魔力が集まり始める。

『裂けよ、大地』

レイザートの魔導具が変化していく。

『ちれつじん
地裂靱』

レイザートの魔導具はその槍の両端に大剣のような刃を付けた形に変化した。

218

「さあ、そつちもさつさと解放しな。」

「はいはい、わかりましたよ、『紫電槍牙』」

ジューンも相手に合わせて紫電槍牙を出現させる。

「行くぞ。」

解放したのを確認するとレイザートは頭上で地裂靱を回転させ、その勢いを利用してジューンに切りかかった。

バックステップで何とかかわす。だが、今ジュンがいた場所には尋常ではない大穴が出来ていた。

「い、今のまともにくらつたら死にますよ!!?」

「大丈夫、避けると思ってた!!!」

レイザートは再び地裂靱を振り上げ、ジュンに向かって振り下ろした。

避けきれず、紫電槍牙でその一撃を防ぐが、余りの力で足が地面にめりこんだ。

「がはっ……!!」

この重い一撃で手放しそうになる意識を何とか繋ぎ止め、一旦後ろに下がった。

「くっ、『能力型』の解武か……出来ない身としてはうらやましい。」

「正解。俺の場合は『力』の向上、何でも粉碎するぜ。」

ジュンはそれを聞くと更に距離を取り、紫電槍牙を地面に突き刺した。

そして、右手を突きだし、そこに魔力を収束させる。

「ん、近距離はやばいから遠距離ってか？」

レイザートは余裕の表情でジュンを眺めている。

「くらえ！！『サンダーボルトランス！！！！』」

詠唱無しの無詠唱魔法。詠唱有りの魔法と比べ威力は激減するがその分早く発動出来る。

ジュンの突きだしている右手の魔力が雷の槍を形成し、レイザートに向かって放たれた。

「甘いな、『アースグレイブ』」

レイザートの前方に巨大な岩の塊が突き出る。

ジュンの放った雷の槍はレイザートの岩の塊に相殺もされることなく防がれた。

「残念はずれ。相性悪かったから相殺もされなかったな。」

よく見てみるとレイザートの魔導具も巨大な岩の塊も薄い緑の光を帯びている。

それに対してジューンは紫雷。紫は緑を侵蝕することが出来ないというこの世界の概念。

ジューンは魔法も駄目だということに気づき舌打ちをした。

「どうする？降参するか？」

「……………」

ジューンは黙って紫電槍牙を消す。

それを見たレイザートは満足気に頷いている。

観客もこれで終りか、と席を立とうとした。

だが……………」

「冗談！！雷が通じないなら炎にするまで！！！！」

ジューンは両手に蒼陳烈火を出現させる。

レイザートは急展開の出来事に戸惑っている。

「ず、ずりい！さっき俺本気出せつつたろうが！！」

「誰も本気を出すとは言ってないッス。」

蒼陳烈火から蒼い炎が噴出し、ジュンの周りを炎の海と化していく。

「ふっ……！！！」

ジュンはレイザートに向かって走り出す。

焦ったレイザートはとっさに無詠唱魔法を発動させた。

『アースグレイブ！！』

巨大な岩の塊がジュンを串刺しにしようとする。

「ふんっ！！！！」

横薙一閃。岩の塊を蒼陳烈火で簡単に切り裂いた。

「相性最高！！！！」

「くっ……！！！！」

ジュンがレイザートに切りかかる。

真正面から受けるのは危険と判断したのか、レイザートは蒼陳烈火の一撃をバックステップでかわした。

対象を見失った蒼陳烈火の一撃は地面に大穴を開けた。

「まじかよ!? 『力』の解武並だし!!」

レイザートは一度距離を取るため、後ろに大きく跳躍した。

だが、ジュンは逃げることを許さない。

『神炎!!!』

ジュンが蒼陳烈火に魔力を込め、蒼い炎を増加させる。

「はあああ!!!」

『神炎』で破壊力を上げた蒼陳烈火でレイザートに振り下ろした。

「ぐあああああ……!!」

さすがに直撃させる分けにはいかないのでジユンは少し目標をずらし、巻き起こる衝撃破でレイザートを攻撃した。

レイザートは吹っ飛ばされ、壁に叩き付けられた。

ジユンもその場に座り込んでしまう。

「はあ、はあ、終わった……か……?」

レイザートの安否を確認するためにジユンは立ち上がった。

だが……

「はあ、はあ、つく……はあ」

頭から血を流しながらもレイザートは立ち上がった。

「まじか？直撃ではないものの、あんな近距離で俺の一撃くらって立ってくるとは……流石学園の四魔導。」

「はあ、はあ、入学したての……一年に……負けるわけにはいかないからな。」

レイザートは瀕死の状態にも関わらず、どんどん魔力が収束していく。

「ははっ、まだ奥の手があんのかよ……」

ジュンはどんどん収束していく魔力にもう笑う事しかできなかった。

「本当は四魔導が本気を出すのは禁止されてるんだが、まあ気にしない。」

いや、気にしろよ！といつもはポケのジュンが突っ込みたくなるくらいに魔力の高さだった。

「さあ、終わりだ。」

レイザートの魔力が極限にまで膨れ上がっていく。

『真土解放』

『神羅万象地裂靱』

レイザートの周りに岩の塊が大量に突き出ていき姿が見えなくなる。だが、中から巨大な槍を持ったレイザートが岩の塊を破壊しながら出てきた。

レイザートが持つ巨大な槍は既に太さも長さも解放前の五倍以上はあり、大剣の部分も極端に太く鋭くなっている。

「行くぞ、これが本気の本気だ。」

レイザートが高く跳躍し、神羅万象地裂靱を回転させながらジュンに叩き付けてきた。

ジュンはその一撃を全力で避けるが、叩き付けられた時の振動で大地が揺れた。

「圧倒的な力だけの真解放か……」

「どうした、反撃しないのか？」

既に体勢を立て直したレイザートがジュンを見据える。

ジュンはいよいよ覚悟を決めた。

「次が最後の一撃ッス。」
「よし、分かった。」

ありつただけの魔力を蒼陳烈火に込めるジユン。

ジユンの周りとレイザートの周りに蒼い炎の海ができる。

「はあああああ！！！！！」

蒼陳烈火から溢れ出す炎が更に増し、炎の刃が伸びていく。

「その炎は力を与え、その刃は炎と化し、その炎は全てを焼き尽す。」

□

ジユンが言霊を乗せ力を溜めている間にレイザートは腰を落とす、
神羅万象地裂靱を構え迎撃体勢に入っている。

ジユンがレイザートに向かって走り出し、蒼陳烈火を構える。

「しんえんめつれいせん 神炎滅霊閃！！！！！」

恐ろしく伸びた刃を見据え、レイザートは神羅万象地裂靱に魔力を

注ぎ込み、技を放った。

『大いなる大地の怒り（アース・オブ・アングレイス）』

槍の一撃と共に地面からおびただしい数の土の槍が迎え撃つ。

刃と槍がぶつかりあった瞬間、土煙が起こり二人の姿が見えなくなつた。

土煙が晴れてくると二人の姿が見えてきた。

ジユンの蒼陳烈火にはもう炎が宿っておらず、レイザートの土の槍も全て消えていた。

また闘技場の観客がザワザワと騒ぎだす。

「どつちが勝ったんだ？」

「引き分け？」

「あいつはSだったのか？Mだったのか？」

……最早触れまい。

その時先に動いたのはジユンだった。

「・・・俺の負け・・・か・・・」

ガクンと膝をついてジユンは倒れた。

「ジユン！？愛華！！行くぞ！！」

「う、うん。」

「師匠！！？」

倒れたジユンを見て優真と愛華とレンが急いで駆けつける。

愛華が治癒魔法をかけている間にアツミ達も駆けつけた。

「殉職したフォレス司令に敬礼！！！！」

「はっ！！！！」

「死んでません！！」

ボケるアツミとクワリスに珍しく怒るレン。

怒られた二人は予想外だったのか素直に謝った。

そんな時、レイザートも魔導具を消して寄ってきた。

「バカみたいに強かったな。」

ふらふらしながら優真達に話しかけてきた。

「四魔導の名は伊達じゃないッスね。」

アツミが振り返って言うとレイザートは肩をすくめた。

その時、闘技場の入り口から教師が数人入って来た。

「おいコラ、お前達！！授業とつくに始まってんだぞ！！！」

いつの間にか観客は一人も残らずいなくなっていた。

教師の一人が傷だらけで倒れているジュンと同じく傷だらけのレイザートを見てまた叫ぶ。

「お前等、いったい何やってたんだ！？特にリー！お前学園を代表する中の一人なんだから授業時間くらい守れ！！！」

「へい、すんませーん。」

レイザートは全く反省の色がなく、適当に答えた。

教師達はジユンを保険室に連れていったらさっさと授業に戻れよ、
と言いつつ残して学園に戻っていった。

「・・・うん、これでもう大丈夫。」

愛華の魔法で外傷はほとんどなくなり、ジユンの表情は穏やかにな
った。

「さてと、じゃあこいつを運ぶとしますか。」

アツミはジユンの周りに風を発生させ、持ち上げる。

レイザートも一緒になって優真達の後についていった。

・・・。

「レイ先輩、次は俺とやりませんか？」

保険室でジユンを寝かせると、突然アツミが言い出した。

「んあ？お前は？」

身体中治療しているレーザートにアツミはもう勝負を仕掛けようとしている。

「俺はアツミ・ハイモートス。どうですか？怪我が治ったら。」

「あーまあ考えておく。しかしフォレスもそうだけど、ハイモートつてのもどっかで聞いたような……。」

レーザートが治療する手を止めて記憶を掘り出している。

だがそこでリルが時計を見て焦りながら言う。

「皆さん、もう次の授業が始まってしまいます！急がないとー！」

「うわっ！ー!？」

優真達は急いで教室に戻ろうとする。

だが、怪我をしているレーザート以外にレンも動こうとはしなかった。

「レンちゃん、どうしたの？」

「あ、うん……私、もう少しここに……。」

その言葉を聞いたアツミとクワリスがニヤリと笑う。

「レイ先輩、出ましょう。」

「このままここに居るのは野暮というものッスよ。」

「いや、ちょっと待て!!! いでででで!!!」

二人がレイザートの手を取って無理矢理保険室から出ていく。

「レンちゃん……ファイト!」

「頑張つてね!」

「え、え? いや、違いま……」

優音とウイステリアの応援に顔を赤く染めて否定しようとするが、最後まで聞かずに二人は出ていってしまった。

「相談には乗りますよ、レン様。」

「……頑張つてね、レンちゃん。」

リルと愛華もそう言って出ていってしまった。

最後に優真がレンの肩をポンツと叩いた。

「・・・苦労するぞ。」

「え！？優真さんまで・・・」

優真も保険室から出ていき、部屋にはジュンとレンが取り残される。

「うう・・・そんなつもりじゃなかったのに・・・」

ジュンが寝ている横の椅子に座り眩く。

実際、レンがここに残ったのは純粹に心配だったからだ。

そんなつもりはない・・・そんなつもりはないはずなのに意識は
してしまうもので

「うう・・・何か恥ずかしくなってきました・・・」

流石に一人でぼーっと寝顔を見ているのは何だか気恥ずかしい。

仕方ないのでレンは別の事を考える事にした。

「さっきの師匠・・・すごかったなあ・・・」

レンは先程の凄まじい戦闘を思い出していた。

入学早々生徒達の頂点に立つ四魔導の一人と互角に渡り合ったジュン。

そんな凄い人が自分の師匠だなんて誇らしくも思う反面自分でいいのかとも思う。

単なる気まぐれで自分に修行をつけてくれたなら、また気まぐれで突然やめてしまってもいいと思うと不安になる。

「なら私も、レイザート先輩といい勝負が出来れば認めてくれるかもしれない……」

ジュンさえも勝てなかったレイザートに勝負を挑む決心をするレン。

だが、今はレイザートの足下にも及ばない。

「しばらくは真面目に授業を受けて修行かな。」

「ふん、頑張つてな。」

「はい。」

レンの独り言に答える声。一瞬レンの時間が止まった。

「……………」

「……………」

「ええっ！？し、師匠いつから起きてたんですか！？」

「んー」

いつものようにニヤリと笑うジユン。

レンはその笑みを見ると何だか嫌な予感がした。

「私もう少しここにいるって辺りからかな。」

「そんな・・・ほとんど最初からなんて・・・」

あの時の優真達言いたい放題言った事もジユンはもちろん覚えていた。

そのネタをジユンが使わないわけがない。

「れっちゃん、俺に・・・」

「ううー！ー！ー！ー！ー！」

ジユンが言おうとした事を唸って遮るレン。

既に泣きそうなくらいに目が潤っているのでジユンはそれ以上いじるのをやめることにした。

「しかし、向上心は大切だけど何でまたレイ先輩と勝負しようなんて思ったんだ？」

「え……それは……」

レンは子供の頃から十賢者のような偉大な魔導士に憧れていた。

自分もいつかそんな魔導士になりたいといつも思っていた。

十賢者の子供であるジュンも凄い魔導士で、その人についていけば自分も偉大な魔導士に近づけるんじゃないかと考えた。だから、見捨てないで欲しい、認めてほしい。

「あの……その……」

だが、そんな事本人に言えるわけもなくレンは口ごもってしまった。

「ま、いいや、俺もあの人にはリベンジしたいし、二人で頑張るとしようか。勝ったら理由教えてもらおうぞ。」

「あ、はい！」

レンはジュンの言葉に笑顔で頷いた。

……。

「春だな。」

「春だよな。」

授業中だというのにアツミとクワリスはニヤニヤしている。

今二人は保険室のその後の出来事に妄想を膨らませていた。

「クワさん、うらやましいんじゃないですか？」

「うらやましいッス！」

優音がいたずらっぽく笑いながら言う。クワリスは涙ながらに答えた。

「優音はあつちで好きなやついなかったのか？」

「え？そんなのいなかったかな。部活命だったから。」

優真はふとそんな事が気になったが、優音は否定した。

ジュン達には既に優真達が異世界から来たことを話していた。

クワリス曰く、時々召喚士の暴走で相手の承諾なしで召喚してしまう事があるらしい。

召喚を行う為には相手の承諾とその対象に係る媒介が必要だ。

クワリスが召喚するフレイムドラゴネットも、クワリスが『炎龍の羽』を使って契約した召喚獣だ。

だが、召喚士の暴走の際には媒介は用いられず、選ばれる対象はランダムで相手の承諾も得ない。

召喚される側としては迷惑極まりない話だが、大昔の召喚士は媒介が手に入れない場合はこの方法で強力な召喚獣を呼び出していた。

クワリスの使った『炎龍の羽』もクワリスの先祖がその方法で召喚した炎龍の羽が代々伝わってきた物だ。

今のところ暴走召喚された対象を元の世界に帰す方法は見つからない。

優真達はその話を聞いたとき絶望したが、魔導研究所の召喚魔法課というところが最優先で帰れる方法を探しているとグレンから聞いたので、多少は立ち直れた。

愛華と優音は悲しむよりも魔法を楽しむ事で気を紛らせようとしていた。

話は戻って、優音の好きな人はいない発言でアツミの目がキラッと光った。

「では、俺なんかどうでしょうか？」

「アハハ、またししょーはそんな冗談言ってる。」

既に優音の中ではそういう冗談を言う人物と決定されたようだ。

アツミはガンとバックにそんな文字がでそうなくらいへこんでいる。

優音はそんなアツミに全く気付いていない。

「……友よ。」

「つつさい、もう……」

生暖かい目で肩をポンツと叩いてくるクワリスの手をアツミは叩き落とした。

無駄話をしている内に授業の終わりを知らせるチャイムが鳴った。

「今日から優真達寮生活だろ？夜に歓迎会でもやるっ。」

「んな事言ってる、ただ騒ぎたいだけだろ？」

「まあ、そうとも言う。レンさんも連れてな。」

恐らくジュンとレンをネタにして色々冷やかしたいんだろう、と優真は思った。

「分かった、レンにも言っとく。」
「おう。」

優真達はもう目を覚ましているだろうジュンとレンを呼びに保険室に向かった。

第十四話

「えー、ではー、優真達の入寮祝とー、ジュン&レンの結婚披露宴を行おうと思いま……」

「思いません……!」

アツミの司会の言葉に顔を真っ赤にさせて否定するレン。

ここまでレンが怒りを露にするのは珍しい。

「ま、何でもいいや。かんぱーい!」

『かんぱーい!』

ジュンが激闘を繰り広げた日の夜、優真達の入寮祝いを寮の食堂を借りて行っていた。

そこにいるメンバーは優真、優音、愛華、レン、ジュン、アツミ、クワリスの七人だった。

「それにしても、ソフィアさんが寮長だったなんて知りませんでしたよ。」

学園の寮長をしていたのは優真達の魔導具精製の儀を行なった、ソ

ファイア・クレイスだった。

「寮長は副業なんだけどね。ちなみにあの魔法屋も副業。」

じゃああなたの本業はなんなんだ、と優真は思ったが、突然服を誰かに引っ張られた。

「飲んでますか？優真ー！」

いつものごとく、いやいつも以上にハイテンションなジュンが優真に絡んできた。

「お前は どうしてそんなに鈍感なのですか？」

「はあ？」

いきなり何を言い出すのかこいつは、と優真は思った。

ジュンは優真に肩を組んで顔を近づける。

「お前そんなんじゃない、いつか愛想つかされるぞ。」

「いや、だから何が？」

優真は更に近づいてくるジュンの顔を押し退けて言う。

ジュンは大袈裟に頭を抱えて天を仰ぐ。

「かつ！このラブコメ的主人公野郎がつ！！だったらこの俺様が・
・ってちよつと待て放置プレイか！？」
「・・・・・・・・」

優真は呆れて未だギャーギャー騒いでいるジュンをそのまま放置しておく事にした。

ふと、優音の方を見ると、アツミと優音が何か話していた。

「ししょー、学園にはクラブなんてあるんですか？」

「あー、俺もよくは知らないんだけど、色々あったと思う。確か、魔法執行部とか魔法研究部とか、あとは運動部多数。」

どうやら、二人は学園の部活動について話しているようだ。

やはり魔法の学校だからか、魔法を使った部活が色々あるようだ。

「優音は何の部活してたの？」

「私はハンドボールです。」

どうやらこの世界にも部活という概念があるようだ。

ハンドボールがこの世界にあるかどうかはわからないが、アツミはふーんと頷いていた。

「あ、じゃあししょー、何か魔法関係の部活に入りませんか？」

「え、まじっすか!？」

突然の優音の提案にアツミは目を輝かせる。

アツミは何だか期待を持ってしまいが、次の言葉で打ち砕かれることになる。

「ししょー、魔法が凄いですから、私も勉強になりますから。」

「あ……そうっすか……」

アツミはその言葉に意気消沈したが、いやでも、そこから這上がれば……、と考えた。

「じゃあ、明日にでも調べようか。」

「はい!」

アツミは下心丸出しなのだが、優音は全く気付いていない。

その辺は兄妹揃って鈍いなあ、とさりげに聞耳立てているジュンは

思った。

一方、愛華とレンは出された料理に舌鼓を打っていた。

「これ、おいしいですね、愛華さん。」

「……うん、本当に。」

二人はパスタのような食べ物を黙々と食べ続けている。

「愛華さん。」

レンは食べ終わったパスタの皿をテーブルに置いた。

丁度愛華も食べ終り、レンと同じように皿を置く。

「またいつでも家に来てくださいね。優真さんと優音ちゃんも一緒に。」

「……うん、絶対行くよ。」

愛華はレンの言葉に優しく笑って答える。

と、そこへ優真が二人の元へやって来た。

「……なあ、二人とも。ちょっと聞きたいんだが……」

「……なに？」

「なんですか？」

優真はあれ何？と指を指す。

二人がその視線をたどって行くと、そこにはどよんとオーラが見えそうなくらい落ち込んでいるクワリスがいた。

「ああ、あれな。」

ニユツと突然優真の横からジュンの顔が飛び出した。

三人はジュンの突然の行動には耐性ができたのかさして驚かない。

「今日な、ウイステリアの演奏会があつただけど、応援の言葉を言い忘れたんだって。」

ジュンに言わせればクワリスは愛故に些細な事で一喜一憂するらしい。

そんな様子を見たジュンとアツミはクワリスのところへ向かった。

「クワちゃん……これを使え。」

アツミはそつとクワリスに何かを差し出す。

「……入れ歯安定剤？」

「これを使えば、クワちゃんは言いたいことを言えるようになる！」
「いるかあ！！！」

クワリスは入れ歯安定剤を床に叩き付けた。

その様子を見てジュンはショックを受けたような顔をしている。

「え……クワちゃん、入れ歯だったのか？」

「んなわけあるかあ！！！」

叫ぶクワリスを見てニヤニヤと二人は笑みを浮かべている。

「相変わらずわけわかんねー事してんなー、あの三人。」

「あ、あはは……はあ……」

優真の言葉に乾いた笑いをするレン。

何故あれ（ジュン）を師匠と呼んでいるのか、レンは自分でもわからなくなった。

「はいはい、そろそろお開きにしましょう。」

そんな時、ソフィアが時計を見ながら全員に呼び掛けた。

外はもう随分と暗くなっていた。

「じゃあ私、もう帰りますね。」

レンも時計を見ながらそう言つと

「ふはははは、ならば俺が送ってってしんぜよう。」

わざわざ椅子の上に立って高笑いしながらジュンが叫んだ。

「……あいつがあんな態度だから本気なのかふざけてるのかわからん。」

「そつだよねー。」

自分達の事は鈍感なのに他の人の事になるとやけに敏感な霧谷兄妹が呟いた。

「・・・じゃあ師匠、お願いします。」
「ういっす。」

レンは頬を赤く染めて言うが、ジュンに気付いた様子はない。

「レンも口では違うと言ってたけど、結構まるわかりだよなあ。」
「そうだよー。」

またもや、鈍感兄妹が二人を見送りながら呟く。

「「はあ・・・」」

そんな様子を見た愛華とアツミが溜め息をついた。

「あ、そうだ。あなた達さっき部活の話してたわよね。」

ソフィアの方を向くとその手には学園の色々な部活が紹介されている資料があった。

それを見た優音は目を輝かせた。

「ちょっと見せてもらってもいいですか!？」
「ええ、はい。」

さっそく、優音は資料を開いて穴が空くくらいじーっと見ている。

「もっと詳しく載ってるのがこっちにもあるわよ。」

「あ、行きますー！ししょー、行きましょー！ー！」

「イエッサー！」

優音の後を下心丸出しのアツミがついていく。

優真はそんな様子を複雑な心境で眺めていた。

「……あれだな。ようやく優音に春が来たって事か。」

「……そうだね。」

愛華にとっても優音は妹のような存在だから、幸せになって欲しいと愛華は思った。帰れる帰れないは別として。

「じゃあ部屋の整理でもしようかな。」

「あ……私も手伝うよ。」

「じゃあ、その後は愛華の部屋だな。」

愛華はその言葉に嬉しそうに頷いた。

「じゃあ、クワ。また明日な。」

「……おやすみなさい。」

「うん、また明日。」

優真と愛華はクワリスを一人残して、食堂を後にした。

ぼつーんとクワリスは一人食堂で佇んでいる。

「ええ！？俺一人！！？」

だが、答える者は誰一人いない。

「うわーん、グレてやるー！！！」

クワリスは涙を流しながら自分の部屋に向かっていった。

……。

学園の寮は二人で一つの相部屋。愛華は優音と、優真もまた然りなのだが、まだ優真はルームメイトに会ったことはなかった。

「さて、誰が来んのかね。」

愛華の部屋の整理を手伝い、後は寝るだけなのだがその前にルームメイトに挨拶しておこうと思いい、その人を待っていた。

と、その時部屋の扉がガチャツと開いた。

「あれ？優真じゃん。」

部屋に入って来たのはレンを送って戻って来たジユンだった。

優真は目を細めて嫌そうな顔をする。

「おいおい、何だその嫌そうな顔は。」

「いや、だってお前がルームメイトって……」

どうやら二人ともお互いがルームメイトだとは知らなかったようだ。

優真はソフィアに聞き忘れ、ジユンはそういうのは全く気にしていなかった。

「諦めろ、これも運命なのだ。」

「くっ……」

優真が苦虫を噛み潰したような顔をしていると、ジユンは部屋の電気を消してベッドに潜り込んだ。

優真は少しジユンの態度に違和感を感じた。

「どうした？何かあったか？」

「・・・さつき、れっちゃんを送っていった時、得体の知れない連中に襲われた。」

「えっ！！？」

優真は驚いて、二段ベッドの下で寝ているジユンを覗き込んだ。

「怪我無かったのか！？レンは無事か！？」

「怪我あたり、れっちゃんに何かあったらこんなところで寝てるかよ。」

布団の中でジユンは欠伸を噛み殺しながら言った。

それもそうかと、優真も布団の中に入った。

「襲ってきた奴らはぶつとばしたんだが、そいつらの頭は逃がしちまった。」

「そうか、まあ無事で何よりだろ。俺も前に盗賊ギルドの豚みたいな奴と戦った時があるから、そんな感じな奴なんじゃないの？」

優真がそう言うと、ジユンは押し黙ってしまった。

少ししたら、優真の下からぶつぶつと声が聞こえてきた。

「・・・いや・・・あれは多分そんなんじゃない・・・あれは・・・
・《龍神》以上の・・・」

聞き慣れない単語が耳に入ってきたが、優真はだんだんと瞼が重くなり意識を手放した。

第十五話

学園生活二日目、ジュンとルームメイトになった優真は学園に続く道を走っていた。

「なあ、ジュンよ。」

「なんだ？」

「何で俺達は走ってるんだ？」

ジュンは走りながらうーんと首を傾げる。

「デステイニー？いや、悪い運命だからフェイトか。」

「へえ、そうなんだ・・・って違うだろ！！！」

優真が走りながらも器用にジュンにつっこむ。

もう既に本鈴まで時間がない。

「お前が寝ぼけて目覚まし魔導具でぶっ壊すからだろ！！！」

朝、時間通りに目覚ましは鳴ったのだが、寝ぼけたジュンが紫電槍牙を出して目覚ましに向かって投げつけた。

おかげで目覚ましは粉々に粉砕。壁に大穴を空ける事態に陥った。

それで目を覚まさなかった優真も優真なのだが。

「ふふふ、仕方ないのだ。何故なら目覚ましから殺気が出ていたからとつさに攻撃してしまったのだよ。寝ながらにして既に俺様最強
！！」

「目覚ましから殺気が出るかバカ！！！」

優真のそんな叫びも虚しく、学園の本鈴が鳴り響いた。

……。

「……優君、今日はどうしたの？」

「そつだよ、待ってたんだから。」

「いや、あいつのせいだ。」

「〜」

ジュンは目をそらして口笛を吹いている。

あ、とジュンが何かを思い出したように振り向いた。

「そついや、今日って実技の試験だよな。」

「話そらしてるじ。」

優真のツッコミをジyunは軽く受け流す。

優真はむっとするが、とりあえず水に流すことにしておいた。

「そういえばさっき朝に先生が言ってましたね。」
「なんて?」

「午後に二人一組で模擬戦やるから準備しておくように、だそうです。」

優真はそう説明するレンを横目でちらっと見た。

昨日、ジyunに変な事言われたから気になっていたのだが、どうやら大丈夫そうだ。

「明日は今日の模擬戦の結果でギルドの仕事が出来るみたいです。しかも報酬付き。」
「ほう。」

丁寧なレンの説明にジyunの目が（特に報酬付きの部分で）キラリと光った。

「やるぜ！俺はやるぜ！今日の相手は瞬殺だー！ー！」

高笑いするジユンを見て優真達以外のクラスメートがささっと下がった。

「では、師匠。私がお相手します。」

ジユンの笑い声だけが木霊する教室にレンの凜とした言葉が響いた。

ジユンはキョトンとした顔で、それ以外は驚愕に顔を染めた。

「レンさん、止めといた方がいいよ。何されるか分からないし。」

「そうそう、あのハイな状態な野獣に身ぐるみ剥がされるよ。」

今までどこにいたのかアツミとクワリスがレンの横に立って、危ない言葉を発している。

「何を言うか！？やるならじゃんじゃか玉くらいだ！」

クラスメート全員がじゃんじゃか玉という言葉にはてなマークを浮かべる。

だが、レンは意外と耳年増らしく頬を真っ赤に染めている。

「し、師匠！！何を言ってるんですか！！？」

「うお！？れっちゃん、このネタが分かるとは……お主もエロ
よのお。」

「怒りますよ！！！！」

もう十分怒っているような気がするがこれ以上からかうと魔導具ま
で出しそうだからジュンはからかうのを止めた。

「でもやるからには手加減はしねえぞ。」

「はい！私も昨日ようやく魔導書を読み終えて新しい魔法覚えまし
たから簡単には負けません！」

師匠と弟子の間にバチバチと火花が散る。

だが、優真はそれよりも気になる事があった。

「なあ、魔導書ってなんだ？」

「ああ、魔導書というのは魔力を持った本のこと。レンさんが読ん
だのは多分何かの魔法の理論と構造が記された本だろうね。」

魔導書の事ならクワリスと違い、優真はクワリスに聞いてみると詳
しい説明が返ってきた。

「店で普通に売ってるのもあれば、滅多に手に入らない魔導書なん

「かもある。」

「ふーん、俺も読んでみようかな。」

「スゲー分厚いよ。」

クワリスが手で本の厚さを表す。その厚さは少なくとも辞書以上の分厚さだった。

「やっぱやめた。」

「だろうね。」

元々、本なんか滅多に読まない優真はすぐに心が折れた。

クワリスは半ば予想していたらしく、苦笑を漏らした。

「そうだ、優真。俺と戦った事なかったでしょ。勝負しよう。」

「えー？絶対勝てねえから。」

「まあ、いいじゃん。これも経験だから。」

こうして半ば無理矢理優真はクワリスと勝負する事になった。

.....

そして午後になり、優真達のクラスは闘技場に来ていた。

「よくよく考えたら、入学してから妙に戦闘訓練が多くないか？」

ジユンの言葉に優真はうーんと考える。

確かに入学してからまだ一週間も経ってないのに政治や魔法の理論などよりも戦闘知識や戦闘訓練なんかが多い。

「いや、俺はこれが普通かと思っていたんだが。」

「うんうん。」

異世界から来た優真達にとってはこれが普通だと思っていた。

だが、ジユンやアツミは首を横に振る。

「いや、本当は戦闘訓練なんてまだまだ後にやる事なんだよ。それがこんなに早くやるって事は……」

「魔物の増加が原因かな。」

優真達でも最近噂話でよく耳にする。

年々現れる魔物の数は増える一方で政府やギルドの手には負えなくなっている。

優秀な学生には学生の身でありながらギルドの加入を可能にして出来るだけ戦力を上げる政策を学園でもし始める事。

この模擬戦はその為だという噂もある。

「ま、少なくともジユン達はギルド加入は出来るだろ？」

「十賢者の子供だから・・・か。」

優真は皮肉ではなく本心からそう言ったのだが、ジユン達は複雑な表情をした。

「俺等だつて最初はバリバリの素人だつたんだよ。でも、血のにじむ様な努力してここまで来れたんだ。」

「そう、だから十賢者とか関係なく俺達の実力でギルドに入る。」

「・・・いや、俺のセリフ無くな？」

おいしいセリフは全てジユンとアツミに取られ、クワリスは涙を流した。

と、その時、前の試合が終わった。

「止め！！勝者、ナッツ・マカダミアン！次、霧谷優真、クワリス・ラージ、前へ。」

名前を呼ばれた優真とクワリスは立ち上がった。

「じゃあ、行くか。」
「ああ。」

二人は握手をした後、闘技場に降りていった。

「・・・優君・・・頑張つて。」

「お兄ちゃん、頑張れー!!」

「優真さん！頑張ってくださいーい!!」

「優真様、ファイトです。」

「頑張れ優真。」

「ファイトだ優真。」

「俺の応援は!!!？」

クワリスは涙を流しながらジュン達に抗議する。

だが・・・

「クワちゃん！頑張れー!!」

ウイステリアだけクワリスの応援をしていた。

それを見たクワリスは

「はい！頑張りますー！」

テンションが一気に急上昇し始めた。

その変わり身の早さに優真は顔を引きつらせる。

「では、始め。」

コザー教師の合図で二人は真剣な顔になり、共に魔導具を出現させそのまま対峙する。

「ぶっちゃけ優真の勝率ってどんなもんよ？」

対峙したままの二人を見ながらジユンはアツミに聞いた。

「優真の魔法は相手の魔法を打ち消す魔法。でもクワちゃんの召喚する召喚獣は魔力で形成されている類じゃないし、勝率はほぼゼロだな。」

「ええ！？優真さん負けちゃうんですか！？」

そっけなく答えるアツミにレンは優真を心配そうに見ながら聞いた。

そもそも召喚士との戦い方は召喚獣を直接倒して魔力切れを狙うか、召喚士本人を倒すかしかない。

今の優真の實力ではクワリスの召喚する召喚獣本体は倒せない。従ってクワリス本人を倒すしかない。

「よしっ、行くぞ！」

優真本人もその事は分かっていたらしく、クワリスが召喚する前に走り出した。

クワリスは本を片手に持ったまま動こうとしない。

「はっ！！！！」

優真は右手に持った白聖で袈裟切りを放つがクワリスはひらりと避ける。

優真は体を捻って回し蹴りを放つが、これも腕でガードされた。

逆にその足を掴まれ優真は後ろに投げ飛ばされた。

「ぐおっ！？・・・いってて・・・」

優真が顔を上げた時にはクワリスは既に呪文を唱え始めていた。

「よしっ、行くぞ！」

優真本人もその事は分かっていたらしく、クワリスが召喚する前に走り出した。

クワリスは本を片手に持ったまま動こうとしない。

「はっ！！！」

優真は右手に持った白聖で袈裟切りを放つがクワリスはひらりと避ける。

優真は体を捻って回し蹴りを放つが、これも腕でガードされた。

逆にその足を掴まれ優真は後ろに投げ飛ばされた。

「ぐおっ！？・・・いってて・・・やべっ！！？」

優真が顔を上げた時にはクワリスは既に呪文を唱え始めていた。

『汝は水の精霊の一角。我に付き従いてその身を現せ。』

クワリスの隣で何も無い場所に大量の水が渦を巻いて現れる。

『水龍アクアドラゴネット』

大量の渦巻く水が何かの形を成していく。

やがてそれは体のいたるところに水を纏った巨大な青い龍になった。

「アクア、食うな、殺すな、あんまり痛くするな。」

「主よ・・・それは少々難しい・・・」

クワリスの要求にアクアと呼ばれたドラゴンは困ったような声を上げる。

「いいからやる。みずてっぼう、みずてっぼう。」

「う、うむ。」

優真はドラゴンが真っ直ぐこっちを見ただけで怯んでしまった。

その巨大な口からクワリスの言うみずてっぼうが来るのかと思いきや

「ふん!!--」

「はなみずてっぼう!!--?」

巨大な鼻から水の固まりが飛んで来た。

意表を突かれた優真の体にはなみずてっぼうが直撃した。

「がつ！？……くっ……地味にいてえ……」

だが、避けられない速度じゃない。避けながらクワリスに近づかないと……

優真は二本の刀を握り締めて走り出した。

「ふんっ！ふんっ！！」

複数のはなみずてっぼうが優真に向かって放たれる。

優真は右に、左に避け、時には切り裂き、それらをかいくぐる。

「はっ！！！！」

「おおっ！！」

最後に放たれたはなみずてっぼうを高く跳躍してかわし、クワリスに切りかかった。

「甘い。」

クワリスに放たれた斬撃はギリギリの所でドラゴンの手に阻まれた。そのまま優真は吹っ飛ばされ空中で何とか体勢を立て直して着地した。

「今のは惜しかった。」

「はい、惜しかったです。」

手に汗握りながらの優音の言葉にリルが答えた。

だが、ジューンは首を傾げながら隣のアツミに聞いた。

「惜しかったか？」

「いや、全然。」

「え？何で？」

全否定のアツミに疑問を感じたウイステリアが言った。

確かに周りの目からしても今のは惜しかったように見えたが、ジューンとアツミの目にはそう映らなかった。

「クワちゃんが使役する召喚獣の中でドラゴンは最も最強の種族。クワちゃんがもし本気でやれば優真は瞬殺だよ。」
「……瞬殺……」

愛華はボソツと呟いたがそれには誰も気付かない。

「さっきのはわざと。優真がまた新しい力を手に入れないとクワちゃんに勝つのは到底無理……。なあ、さっきから何か寒くねえか？」

ジユンの言葉にそういえば、とみんなもそれに気づく。

優音はふと隣の愛華を見た。

「わああ！？愛華お姉ちゃんがまたトランス状態に入ってる！！！！」
「なにー！！！！？」

詳しい事を知らないリルとウイステリアは事態を飲み込めない。

事態の大変さが分かる四人は何とか愛華を落ち着かせようとする。

「あああああ愛華さん！！！！？おおおおお落ち着いて下さい！！！！！！」

「いや、まずねっちゃん落ち着こつぜ。」
「はっ！！」

ジユンに言われてレンは深呼吸して逆に落ち着かされる。

アツミは恐る恐る愛華の肩に手を置いて説得を試みた。

「まあ、ちよつと落ち着こつかあああああ！！！？」

愛華の肩に手を置いた瞬間アツミの右手が一瞬にして凍りついた。

「Nooooooooo！！！！？」

「よーっし、俺の炎で溶かしてやるぜ！」

ジユンは炎を具現化させてアツミの手の氷を溶かしていく。

リルとウイステリアは事態についていけずオロオロしている。

そんな中、優音だけは今にも試合に乱入しそうな愛華の前に立っている。

「…………助けなきゃ…………優君を助けなきゃ…………」
「お姉ちゃん…………」

愛華は優音が見えておらずブツブツと同じことを繰り返して

る。

優音は意を決して愛華に話しかけた。

「お姉ちゃん、お兄ちゃんを信じてあげて。お兄ちゃんが心配なのは分かるけど、お兄ちゃんも頑張ってるの。」

「……………」

優音の言葉で愛華の眩きが止まる。

ジユン達はハラハラしながらその様子を見守っている。

「お姉ちゃん、優しいから……。でも信じて見守るのも優しさだよ。だからお願い、お兄ちゃんを信じてあげて！」

優音の悲痛な叫びに愛華を中心に渦巻いていた魔力がだんだん弱くなり、やがて消えていった。

「……………ごめんね、優音ちゃん。その通りだよね……………」
「お姉ちゃん……………」

優音は愛華に抱きついて安心した笑顔を浮かべる。

その光景を邪な目で見ている男が一人……………」

「うん、可愛い女の子が二人抱きついてる……萌えるわ。」
「うおおい!? 燃えてる! 燃えてる!!!?」

アツミの氷を溶かしていたジュンがそんな光景を見て思わず炎の力を上げてしまった。

アツミの手には氷の代わりに今度は火が纏わりついた。

「MOOEEEEーぶっ!!!?」

アツミがパニックしていると闘技場から水弾が飛んできてアツミの火を鎮火した。

だが、全身水浸しでアツミは恨めしそうにクワリスを睨む。

「……もうちょっとましなやり方は無いのか?」
「しめん、ない。」

ドラゴンに水弾を撃たせたクワリスは全く悪びれずに答えた。

そんなクワリスは再び優真に向き直った。

「さて、一騒動も終わったし、再会しようか。」
「ああ。」

とは言っても、優真にはまだ何の策も思い付いていなかった。

愛華達を見ていながらも勝つ方法を考えていたが、何を考えても返り討ちに遇う事しか考えられなかった。

「ほら、行くよ。」

優真が色々考えている内に先にクワリスが攻撃してきた。

ドラゴンが放った水弾は今度は鼻からではなく口から放たれた。

その質量に受け止めるのは不可能だと分かった優真は横に飛んで避ける。

「くっそ！！！」

もう何を考えても仕方ない。特攻あるのみ。

優真はドラゴンの放つ水弾を避けつつ少しずつクワリスに近づいていく。

そんな優真を見て、少し本気を出そうと思ったのか、クワリスは本

を開き呪文を唱え始める。

『降り注げ無数の雨よ。我に仇なす者を貫け。』

クワリスが本に手を添え言霊を乗せると、ドラゴンの周囲に無数の水の槍が形成される。

それと同時にドラゴンは口を大きく開けて、巨大な水弾を形成していく。

『ペネトレイト・スコール』

ドラゴンが巨大な水弾を放つと同時に無数の水の槍も優真に向かって放たれる。

ドラゴンが巨大な水弾を放つと同時に無数の水の槍も優真に向かって放たれる。

「おいおい、そりゃまじやべえって……」

優真は迫り来る巨大な水弾と無数の水の槍の前にただなす術もなく立ち尽くしていた。

魔力で作られたこの攻撃なら『煌めく封印の光』で打ち消す事は出来るが、全てを打ち消す事は今の優真では到底出来なかった。

「っ！？優くーん！！！」

愛華の悲しい叫びも虚しく、優真は水弾の嵐に巻き込まれ、土煙でその姿は見えなくなった。

闘技場にいる全ての人が終わったと確信した。

だんだんと土煙が晴れ、そこにいたのは……

「あっ！！！」

「おっ！！！！！」

右手に妖しく輝く黒禍を持った無傷の優真が立っていた。

「あり？」

だが、一番不思議に思っているのは優真本人だった。

その時、黒禍の光が消えると同時にポンッと何かが現れた。

「ちっ、頼りねえ宿主だな。」

現れたのは優真の心霊と同じような少年だが、シロとは対照的に目付きは悪く悪魔のような羽を生やした少年だった。

優真はすぐに、こいつが俺のもう一人の心霊なんだなあと悟った。

「おう、宿主。俺は黒禍の心霊のクロってんだ。今後ともシクヨロ。」

「シクヨロって既に古いよな。」

「うっせえぞ、ゴラア！」

若干ヤンキー入ったような性格だが、今はそれどころじゃない。

「頼む！あれを倒せるくらいの魔法を生み出してくれ！」

「・・・まあそのために出てきたようなもんだけどもさあ。お前もっと自分の力だけで何とかしようとは思わねえのか？」

その言葉に優真は考え込む。

確かに一度向かって失敗したとはいえ、他の事を試す前に心霊に頼るのは御門違いというものかもしれない。

「ま、いいか。今回は最初という事だし、紡いでやるよ。次からは

簡単にはいかないからな。」

クロの体が黒く輝き出す。

それと同時に、優真の頭の中でも新しく紡ぎ出される魔法の理論と構造を急速に理解していく。

クロの体から光が止み、優真も理解し終えたところでクロは黒禍に入ってしまった。

『じゃ、さっさと倒しにいこーや。』

「おう。」

優真が、さてここから！とクワリスの方を振り向くと、何故かドラゴンが水芸を披露して観客を喜ばせていた。

「あ、終わった？」

観客と一緒に水芸を眺めていたクワリスが優真に気づく。

どうやら優真が新しく魔法を紡ぐのを待っていたようだ。

「ちょっとアクア、もういいから。」

「ぬっ？」

体のいたるところから水を吹き出していたドラゴンが優真に向き直る。

召喚獣の中で最強の種族と言われるドラゴンに水芸させるのは世界広しと言えど、クワリスただだろう。

「じゃあ、新しい魔法見せて。」

「言われなくても!!」

優真はクワリスに向かって駆け出し、黒禍を構える。

先程と変わらない優真を不審に思いながらも、クワリスはドラゴンに数発の水弾を撃たせる。

だが、水弾は全て白聖で打ち落とされた。

優真は自分の間合いに今度はクワリスではなく、ドラゴンを入れ黒禍を下段に構える。

『漆黒なる闇の調べ：斬罪』さんざい

黒く輝きを放つ刀身がドラゴンの腕を切りつけた。

「グオオオオオ!!!」

「うおお!?大丈夫か、アクア!!!」

ドラゴンは痛みに吠えるが心配ない、とクワリスに言った。

優真はその間にクワリスとドラゴンと距離を取る。

「何だ、それ。さっきはアクアの体に傷一つつけられなかったのに……」

「この魔法は切り裂く事だけに特化した魔法だ。でも、レパトリはこれだけじゃないぜ。」

そう言って二人と距離を取ったまま、優真は黒禍を中段に構える。

『漆黒なる闇の調べ・裂衝^{れっしゅう}』

優真が黒禍を振り抜くと同時に刀身から黒い斬撃が飛んできた。

さっきの事もあり、クワリスは急いで本を開く。

『打ち碎け、水の刀刃!』

ドラゴンの鋭い爪に五つの水の刃が形成される。

『ネイル・アズール!!』

優真から放たれた黒い斬撃はドラゴンの水の爪に打ち落とされた。

「今度は何さ？」

「今のは斬撃そのものを飛ばす魔法。斬罪より威力はないが、中距離からの攻撃が出来る。ちなみに、レパトリーはあと三つある。」

一回で五度おいしい優真の魔法にクワリスは、そりゃもう反則だろう、と呟いた。

それで調子に乗ったのか優真はニヤリと笑みを浮かべる。

そして何故かいきなり、二本の魔導具を消した。

「出来るかわからんが、今からとっておきの魔法を見せてやる。」
「む？」

クワリスは何が来てもいいように、本に手を添え迎撃体勢に入る。

場合によっては本気を出そうと思っていた。

『我、暗黒の淵よりい出し者。右に現れしは大いなる闇の陣。』

優真の右手に小さな漆黒の魔法陣が形成される。

『我、天上の界よりい出し者。左に現れしは大いなる光の陣。』

今度は左手に小さな輝く魔法陣が形成される。

「あ、あれってもしかして……」

「リールン、何か知ってんの？」

最早、ジュンの妙なあだ名付けには誰もつつこまなくなっていた。

リルは優真が初めて使った魔法を見ていた一人だった。

「優真様が初めて使った魔法です……」

「え？じゃああれが……」

レンは初めて見る複合魔法に興味津々だった。

優真は魔法陣の形成を終らせ、後はこの二つを合わせて発動するまでに至った。

だが、少しでも集中を乱してしまつと暴発するかもしれないこの魔法を使った事を少し後悔していた。

優真は全身の力が抜けそうになるのを堪えながら、魔法陣を合わせる作業に入る。

『光の陣と闇の陣を合わせ、眼前に立つ我が敵を灰と化せ。』

優真が二つの魔法陣を合わせると、何故かクワリスの足元に現れるはずの魔法陣がジュンの足元に現れた。

「ん？何だ？動けん……」

だが、それは優真もクワリスも誰も気づかない。

当の本人も何が起きたか全くわかっていない。

『虚無の灰塵！！！！』

優真が魔法を発動すると、ジュンの足元から小爆発が巻き起こった。

「ギャーーーー！！！！！！！！」

「うわっ！？」

「キヤツ!？」

ジュンの隣に座っていたアツミとレンはいきなりの事に思わず飛び退いた。

爆発が収まるとそこには黒こげで、頭がボンバーヘアーになっているジュンがいた。

「・・・優真・・・後で・・・覚悟してるよ・・・ガクッ」

「きゃあああ!?!?!? 師匠!?!?!?!」

レンの叫びも虚しく、ジュンは白目を向いて倒れた。

直ぐ様、愛華が治癒魔法をかけているのを優真とクワリスは呆然と眺めていた。

「あっはっはっは、やっぱこの魔法は俺にはまだ早かったかぁ。」

優真は何事も無かったように乾いた笑い声を上げている。

「どつする? まだやるか?」

「いや、今ので魔力すっからかん。俺の負け。」

クワリスの言葉に優真は素直に負けを認める。

クワリスは本を閉じると同時にドラゴンが光となって本に吸い込まれた。

「勝者、クワリス・ラージ。次……」

次の出場者が呼ばれている内に優真とクワリスが戻って来た。

「お疲れー、最後は予想外だったけど。」

アツミの言葉に優真は苦笑を浮かべる。

優真は愛華に治癒魔法をかけてもらっているジユンを見て手を合わせた。

「そんな縁起悪い事しなくても……」

「いや、なんとなく。」

苦笑する優音に答えながら、優真はさっきの魔法について考えていた。

最初に使った時の威力や発動範囲に比べると大分劣っていた。

なんとなく使えるかな、と思って使ってみたがやはりまだまだ修行不足のようだ。

それとは別に魔法だけじゃなく、剣術も鍛えなくては……と優真は考えていた。

と、そうこうしている内にジュンの治療が終わったようだ。

「ゆうーまー、貴様あー！許さんぞおおー！！」

「まあまあ、レンが寂しがつてんぞ。」

「えー!？」

いきなり話を振られて戸惑うレン。だが、そんな事でジュンは惑わされない。

「俺は惑わされんぞー!!覚悟しやがれー!!」

「あ、あんな所にすつ裸で歩いている美少女がー!!」

「え?まじ!?!?どことどこ!?!」

うわあ、こいつ、バカだ……とその場にいる全員が思った。

アツミが悲しい顔をして首を左右に振り、指を指す。

指を指した方向には既に優真が遠くに逃げているのが見えた。

「貴様ー！！騙したなー！！！」

「いや、今のはお前が悪い。」

一人怒るジュンにアツミが冷静につっこむ。

と、その時、試合が終わったようだ。

「次、ジュン・フォレス、レン・グラッド、前へ。」

「よしっ、れっちゃん、手加減はしねえよ……って何怒ってんすか？」

「……別に何でもありません。」

明らかに怒っているが、あくまで何でもないと主張するレン。

レンは自分には反応しなかったのに、すっ裸の美少女に反応したジュンに怒っていた。

だが、ジュンがそんな事に気付くはずもない。

ジュンは不思議に思いながらも観客席から降りていった。

「始め。」

コザー教師の合図でいきなりレンは臨戦体勢に入る。

レンはさっそく、幻魔雷帝を出し呪文を唱え始める。

『ライトニングチャージ』

レンは自らの体に電気を帯びさせ、バチバチと音を起て始める。

レンは一旦魔導具を消して、ジュンに肉弾戦を挑む。

「カモン、れっちゃん。」

「てええーい!!」

レンはジュンに向かって回し蹴りを放つ。

だが、ジュンはしゃがんで避け……

「おっ……ぐおっ!!!??」

なかった。

おかしい。いつもだったら簡単に避けるはずなのに。

レンは不審に思い、一度ジュンから少し離れた。

「師匠、手加減してるんですか！舐めてるんですか！」「
「いや、そういうわけじゃないんだけど……れっちゃん。」
「……何ですか？」

ジユンがいきなり真剣顔をしたので訝しげにレンは尋ねる。

「れっちゃんにはまだ黒の、しかも紐はまだ早いと思うんだけど……」
「……」
「……！！！！！！？」

長く考えた後、レンはスカートを抑えて、真っ赤な顔をしてジユンを睨む。

どうやら怒りのあまり自分がスカートだという事を忘れていたようだ。

「ふむふむ。れっちゃんは大人っぽいのが好みっと。」
「……師匠。」
「なに……ひっ！！！」

ジユンがメモリながら顔を上げると背後に般若でも見えそうなくらいレンは殺気を放っている。

「ま、待て、れっちゃん！ほんの出来心だったんだ！！」
「……」
『雷走』
「……」

レンは新しく覚えた魔法を発動させる。

レンの体に帯びていた電気が両足に収束していく。

「げっ……覚えてきたのってそれ？」

「……」

最早レンは何も答えない。

刹那、ジュンの目からレンが消えた。

「やばっ!?!?」

直感的にジュンは前方に前転した。

振り向くと、そこには幻魔雷帝を振り下ろしたレンの姿が。

「れ、れっちゃん!?!? 杖って殴る道具じゃない!?!?」
「問答無用です!?!?!?」

再びレンが『雷走』で目にも止まらぬ速さで走り出す。

ジュンは紫電槍牙を出して背後に構える。

ガキイン、とすんでのところでジユンはレンの一撃を防いだ。

ジユンはそのまま弾いてレンと距離を取る。

「ふっ、中々やるではないか。師匠として嬉しいぞおおおお!!!?!?」

レンはジユンのセリフの途中に一瞬で間合いを詰めて魔導具で殴りつける。

ジユンはギリギリのところを避けると、ふざけた顔から真剣な顔をした。

「よし、じゃあそろそろ本気で行くぞ。」

そう言うと、ジユンの体からも電気が走り出す。

レンはその様子を遠巻きに見ている。

『雷走』

ジユンの両足にもレンと同じように電気が収束していく。

そして一瞬の内にレンの背後に回り込みその肩に手を置く。

「これで同じ条件だ。れっちゃんも全力でやらんと俺には勝てんぞ。」
「……じゃあ全力を出させてもらいます。」

ジュンの目の前からレンが消え、ジュンの後ろに現れる。

レンは後ろから魔導具を振り下ろすが、当たる事なく空を切った。

ジュンはその一撃を飛んでかわし、上から魔導具で突く。

だが、ジュンの一撃もレンを捉える事なく空を切った。

その光速な戦闘に観客は目で追えきれていない。

「うっん、二人共速すぎて何が何だかわからないよ。」
「……うん、全然わからない。」

速すぎる二人の戦いに愛華と優音は目を回している。

だが、アツミとクワリスは何とか目で追えていた。

「……涼しい顔してるな、あいつ。」

「うん、確かに。」

「何が？」

アツミとクワリスのそんな呟きにウイステリアが聞いてくる。

クワリスは一瞬言葉に詰まるが、代わりにアツミが説明する。

「いや、レンさんは必死になってやってるんだけど、ジュンの奴はつまんなそうにしてるんだよな。」

「失礼だよな、結構。」

どうやら、レンは躍起になっているがジュンはそんなレンを見てつまらなそうにしているようだ。

「趣味悪いなあ。」

「そうですか？」

ウイステリアの言葉にリルが疑問に思った。

それに優音は聞き返す。

「どういう事ですか？」

「魔導書のデメリットは心霊の協力が得られない事です。それだといざというとき力が思うように出せません。」

ジュン様はレン様が自分でそれに気付くのを待っているのではないのでしょうか？」

その言葉を証明するかのようになんたんとレンの速度が落ちていく。

「はあ、はあ・・・」

「どうした、れっちゃん。こんな初歩魔法に魔力消費し過ぎじゃないのか？」

「はあ、はあ、ま、まだまだ、です。」

レンは『雷走』に魔力を消費し過ぎて疲れを見せている。

そもそも『雷走』は雷属性の初歩に位置する魔法でそれほど魔力は消費しない。

だが、それは心霊と紡ぎ出した場合による。

魔導書で得た魔法は心霊との協力を得られないので、魔力の消費が大きい。

レンは新しく魔法を覚える事に頭がいっぱいでそのデメリットまで知らないようだ。

ジューンは心霊の大切さを教える為と同じ魔法で対抗していた。

口で言うのは簡単だが、ジューンが敢えてそうしなかったのは実際に肌で感じた方がわかりやすいと考えたからだ。

とうとう、レンの足が止まり帯びていた電気も消え去った。

「はあ、はあ、どろじて……」
「終りか？」

ジュンは冷たい目でレンを見下ろしていた。

いつもはへらへらしてて、ちょっとおバカで優しい自分の師匠が初めて自分に向ける冷たい視線にレンの体は竦み上がってしまった。

「あ……う……」
「……」

ジュンは本気でレンに向かって殺気を出していた。

レンはそんなジュンを見て恐怖で体が震えている。

「ふう……」

ジュンはため息をついて、殺気立った雰囲気からいつもの雰囲気に戻した。

「っとまあ、魔導書なんか頼るといざというときに魔力切れ起こすって事に気づいて欲しかったんだが……まあいいか。」
「……え？」

レンは涙目でジユンを見上げる。

そんなレンを見てジユンはしゃがんで、レンと視線を合わせる。

「ごめんな。怖がらせちまったか。でも、上位の魔物相手だと殺気立ってる奴がほとんどだから、気をつけて欲しい。」

「あ……ん……」

レンはまださっきの恐怖感が抜けないのか、上手く声が出せない。

もしかしたらこの事がきっかけで自分を避けてしまいかもしれない。

だが、ギルドに入る事を目標にしている以上魔物との戦闘は避けられない。

だったら今の内に格上の相手の殺気を経験しとけば下位の魔物相手に臆する事はない。

そう考えれば安いもんだ。

と、ジユンは考えていた。

「先生！この勝負俺の負けねー！！」

明らかにジユンの勝ちなのだが、わざとジユンは白旗を上げた。

全員がポカンとしている中でジユンは観客席に戻らず、そのまま闘技場から出ていこうとした。

「おい！どこ行くんだった！」

「帰る。」

アツミの問いににそう言い残してジユンは帰っていった。

ジユンがいなくなったすぐ後、優音はレンの元に駆け寄る。

「レンちゃん。大丈夫？」

「あ……ん……大丈夫……」

まだ顔は青ざめているが言葉はしっかりしている。

優音に支えられながらレンはフラフラと観客席に戻っていく。

そして、次の試合が始まる……

第十六話

ジユンとレンの壮絶な試合が終わった後も実技試験は滞りなく進んでいた。

レンはまだ顔色が悪かったので今は保険室で休んでいる。

そして、いよいよアツミの出番がやって来た。

「ししょー、頑張ってくださいー!!」

「おう、頑張る!!」

優音の声援を背に受けてアツミは観客席から降りていく。

アツミは相手が決まらなかったという事と普通の相手じゃ話にならないという事で特別に三対一の試合だった。

「いいか？お前ら！相手が十賢者の子供だろうと所詮は親の七光り。

一気に攻めれば恐くない!!」

「「そうだ！恐くない!!」」

アツミの相手をする三人は円陣を組んで気合いを入れていた。

そして、意気揚々と観客席から降りてくる。

アツミは風雅窮絶を出現させ、三人組もそれぞれ剣と槍と盾を構える。

「ヘイ！ハイモート。まずは自己紹介だ。俺はベオグラード・ライだ。」

「そして俺はレコーディ・ハネム。」

「最後に俺はカリム・クレイスだ。」

「はいはい、右から順にベオグラにレコディにカリね。」

アツミはでかいのがベオグラード、普通のがレコーディ、小さいのがカリムと覚えた。

「ふっ、しかし、お前のダチのフォレスって野郎は最低な奴だな。」
「なに？」

ベオグラードはいきなりジュンを最低呼ばわりし始めた。

他二人もうんうんと頷いている。

「だってそうだろ。勝負なんて分かりきってるのに女の子をとことん追い詰めて最後には泣かせてんだから。」
「……………」

アツミはその三人組が言いたい放題言っているのを黙って聞いている。

何があったのかはアツミは知らない。だがジユンが理由も無しにただレンを追い詰めたとは考えられなかった。

「ま、後であいつは俺達が締めてやるけどな。」

「そりゃ無理だ。」

この三人組の力がどれくらいのものか分からないが、見た感じ無理だろうとアツミは思った。

三人組はむっとなつてアツミを睨む。

「無理かどうかはお前の目で確かめるんだな。」

ベオグラードは剣を構えて臨戦体勢に入る。

「始め。」

その時、コザー教師の合図が出されたと同時にベオグラードがアツミに向かって来た。

「はっ！ー！」

特に解放もしていないベオグロードの一撃を難なくアツミは受け止める。

隙だらけ体にアツミは蹴りを入れて距離を取る。

「ぐっ……中々やるじゃねえか。」

「いや、今のどこにやる要素があるんだ？」

だが、ベオグロードは全く聞耳持たない。

今度は後ろの二人に呼びかける。

「おいお前等！解放して一気にけりつけるぞ。」

「おう。」

「アイアイサー。」

三人組の持つ魔導具がそれぞれ輝きを放ち始める。

まず最初に動いたのはベオグロードだった。

「燃やし尽せ！！『炎斬』えんざん」

ベオグラーズの剣の刀身に炎が纏わり付き、アツミに切りかかって来た。

アツミはその一撃をバックステップで避け、矢を放つ。

だが、突然横から出てきたレコーディの槍によって阻まれた。

「次は俺だ！風よ貫け！！『風裂呀』」

レコーディは解放すると、直ぐ様アツミに無数の突きを繰り出した。

アツミはそれを後ろに飛んでかわし、数本の矢を放った。

だが、レコーディはそれを全てかわして見せた。

「ハッハッハ、んなもんに当たるかあ！！」

代わる代わる攻撃を仕掛けてくる二人にアツミは避けるか防御するかしかなかった。

「どうしちゃったんだろう、ししよー・・・防戦一方だよ。」
「待ってるんだよ、アツミは。相手が全力で来るのを。」

不安になる優音に安心させるようにクワリスは言った。

ウイステリアはそれを疑問に思つて、クワリスに聞いてみる。

「どうしてそんなことするの？」

「・・・相手の全力を完膚無きまでに叩き潰すつもりなんだろうなあ。誰だつて友達馬鹿にされたら怒るよ。」

クワリスの視線の先にいるアツミは未だに敵の攻撃を避け続けている。

防戦一方だが、アツミの目は何かを狙っていた。

「はあ、はあ、すばしっこい野郎だ。おい、一気に片付けるぞ！」

「おう、行くぞ、カリム・・・カリム？」

レコーデイは返事が返つてこないカリムを不審に思い、振り向いた。

そこには壁に打ち付けられて気絶しているカリムの姿が。

「カリムー！・・・おのれ、いつの間に！・・・」

ベオグロード達は気づいていない。

彼等が避けたアツミの流れ弾、もとい流れ矢が全てカリムに命中していた事を。

だが、ベオグラード達はそんな事もお構い無しに怒っている。

「ぬおおおお！！もう許さん！！！！」

ベオグラードとレコーディは全ての魔力を魔導具に込める。

ベオグラードの魔導具は赤い炎を巻き散らし、レコーディの魔導具からは緑の風が吹き荒ぶ。

アツミは次に来るのがこの二人の最大最強の攻撃だと分かった。

アツミも魔導具に魔力を込め、アツミを中心に黒い風が巻き起こる。

『漆黒なる風よ、全てを切り裂くその力、今示し時。』

アツミが言霊を乗せると台風並に風が吹き荒れる。

そんな時、ベオグラードとレコーディがアツミに向かって走って来た。

アツミも矢を構え迎撃体勢に入る。

「くられ！！！！」
「滅火斬」
「はああ！！！！」
「風幻閃」
「！！！！」

ベオグラードの炎の斬撃とレコーディの風の突きがアツミに迫り来る。

アツミは矢を引き絞り、二人に向かって放った。

『れっぶうごくめいせん
烈風黒鳴箭』

放たれた矢は黒い風を纏い、辺りの物を切り裂きながら突き進む。

矢は二人の技とぶつかったが、まるでそんなものは無かったかのように簡単に打ち消し、二人を吹っ飛ばした。

「うわああああ！！！！？」

「があああああ！！！！？」

ベオグラードとレコーディはカリムと同じように壁に打ち付けられて気絶した。

アツミは魔導具を消し、優音達に向かってブイサインを送った。

「勝者、アツミ・ハイモ・・・」

「キヤー！！！！ししよー！！！！凄ーい！！！！」

コザー教師の言葉は優音の歓声に打ち消された。

アツミは観客席に悠然とした態度で戻って来る。

「ししょー、カッコよかったですよ!」

「ハツハツハ、まあ、こんなもんっすよ。」

優音に褒められて鼻高々になっているアツミ。

その横では愛華とリルが戦闘の準備をしていた。

「あれ？次、二人がやるの？」

それを見たウイステリアが尋ねると二人は頷いた。

「私達は相手がいなかったので余り物同士です。」

「・・・・・・（こくり。）」

リルの言葉に愛華は頷いた。

そして、二人は観客席から降りていく。

「二人共ー、頑張ってー!!!」

優音の声援を背に受けながら、二人は互いに対峙する。

そして、コザー教師の始めの合図が闘技場に響いた。

「愛華様、ここではつきり言っておきます。」
「……………」

魔導具は出さずにリルは愛華を見据えて言う。

アツミ達も何事かとリルに目を見張る。

「私は優真様が好きです！いえ、愛してます！！」
「……………」
「ええ————！！！！？」

突然のリルの告白に闘技場にいる観客は皆、啞然とした。

ジユンがいたら大騒ぎしそうなネタだが、生憎とここには本人も冷やかし役もない。

「愛華様はどうなんですか？」
「……………」

既に周知の事実な内容だが、それでも愛華は言いよどむ。

そんな愛華を見て優音はやきもきしている。

「ああ、もうっ！お姉ちゃんも言い返せばいいのに！」
「性格なんですよ。」

クワリスは仕方ないという風にため息をついた。

リルはさらに追撃をかける。

「愛華様が何とも思っていないなら、私がもらってしまいます。」
「そ、それはダメ！！！」

愛華の焦った言い返しにリルは一瞬きょとんとし、優音はガッツポーズをした。

だが、言い返した本人は途端に弱気になっていく。

「・・・あ、そ、そういうのは優君が決める事だし・・・私達がとやかく言うのは・・・」
「わかりました。それじゃあ、どっちが上か白黒つけましょう。」

全く分かっていないリルに愛華は少し不安になる。

リルは色恋沙汰になると性格が変わるようだ。

リルが黙って魔導具『轟炎』を出すと、愛華も仕方なく『氷魔水蓮』を出す。

元々、戦いは好きではない愛華は少し逃げ腰になっている。

「では、いきますー！」

「キヤッ!?!」

素早く接近してきたレンの蹴りを間一髪で避ける愛華。

とっさに愛華はレンとの間に氷の壁を出現させる。

だが、レンはその壁を魔導具で爆破させ、粉々に打ち砕いた。

「愛華様、本気で来てください！」

「・・・でも・・・」

正直、愛華は負けてもいいと思っていた。

魔法を学びたいと思ったのも只の興味本意だったし、こんなに戦いばかりだとは思っていなかった。

ここまで周りに流されて来てしまったが、ただ自分は優真の隣にいたいだけだった。

じゃあ、私は何でこんなところで戦ってるんだろう。

「・・・もう、いいです。」

逃げ続ける愛華を見てレンは静かに言った。

「優真様の隣は愛華様にはふさわしくありません。これからは私が優真様を支えます。」

愛華はその言葉で動きが止まった。

優真の隣が奪われる・・・

私の居場所がなくなってしまふ・・・

・・・いやだ・・・いやだ・・・それだけは絶対にいやだ!!!

昔からの私だけの居場所を、リルさんなんかに奪われてたまるもんか!!!

私の戦う理由も・・・私の存在理由も・・・

これから先ずつと・・・

「優君の隣にいる事だから！！リルさんには渡さない！！！」

その瞬間、愛華を中心に闘技場を包み込むほどの吹雪が巻き起こった。

「ふおお！？寒い！！」

「冷え〜！！」

アツミとクワリスだけではなく、観客全員が寒さに震えている。

リルはいよいよ本気を出した愛華を見て、再び構えを取った。

「やっと本気を出しましたね、愛華様。それでこそ、私のライバルです。」

リルの魔導具の炎は消えるどころではなく、さらに激しく燃え上がった。

リルは体勢を低くして愛華に向かって駆け出した。

愛華は駆けてくるリルを見て、無数の氷柱を出現させ、リルに向かって放つ。

『舞え』

リルは流れるような動作で無数の氷柱を次々と受け流していく。

『りゅうえんぶ
流炎舞』

愛華の放った氷柱はリルが捌ききった後、全て爆発して砕け散った。その美しい舞に観客の全てが魅了された。

「芸術は爆発だ、という事か？」

アツミのコメントで美しい舞を見た後の余韻も醒めてしまった。

よくよく考えればアツミに芸術の素晴らしさを分かれというのも無理な話だ。

「え？何？何で皆さん、睨んでおるのですか？」『……………』

アツミの周りの人々は再び、愛華とリルに視線を戻した。

アツミはわけもわからず不思議そうな顔をしている。

愛華はリルに繰り返し氷柱を放つが、このままじゃ埒が明かないと思いつ文を唱え始める。

『来たれ水よ、集いて集いて母なる海と化せ。』

愛華は地面に手を置き、魔導具は青い魔力を帯びる。

『ウォーターフィールドクリエーション：オーシャンイメージ』

瞬く間に闘技場の地形が海に変化していく。

アツミとクワリスはその魔法を見ると口をあんぐりと開けてアホ面丸出しになる。

「地形変化の魔法だ・・・こういうのは相当高度な魔法なのに・・・
・愛華さん、いつの間に。」

「てゆうか俺等でも出来ないよね。」

アツミ達さえも出来ない魔法をどうして愛華が使えるのか、優音は不思議に思っていた。

いきなりの高等魔法に気を取られたリルは水に足を取られて上手く動けないようだ。

「くっ・・・」

華は今度は蒼色に輝く魔導具を横に振り抜く。

すると氷の衝撃波が放たれ、海を凍らせながらリルに襲いかかった。

「ハッ！『烈炎滅閃』！！」

リルは燃え盛る拳で氷の衝撃波を爆発させて止めるが、水蒸気が発生して辺りが見えなくなった。

「いけないっ！？」

リルはこのままでは自分が不利と思い、愛華がいた場所と逆方向に走る。

だが、それがいけなかった。

「えっ！？」

リルの足が急に動かなくなり、前に倒れそうになった。

見ると、リルの両足は海もろとも凍らされている。

だんだんと水蒸気が晴れていき、振り向くと沈痛な表情の愛華が立っていた。

愛華は水音でリルの居場所が分かっていた。

「・・・お願いリルさん、もう降参して。」
「いやです。私、負けず嫌いなんです。」

リルはそう言うと、足に魔力を溜め始める。

リルのレガースが赤く染まっていき、再び炎を灯し始める。

「ハアッ!!」

リルは両足のレガースを爆破させ氷を砕く、そしてその爆風で高く飛び上がる。

「そろそろ私の魔力も限界です。次で終りにします。」
「・・・うん。」

リルの両足のレガースが赤い炎を吹き出し、急降下してくる。

『水よ、母なる海よ、神の頂きに立つ姿と成せ。』

闘技場の海の水が一つに集まり、水柱が上がる。

「わあ……」
「おお……」

観客の全員が感銘を受けた。

水柱の中から神々しく、美しい女神のような女性が現れた。

「水神 罔象女」
みずのはのめ

水神はリルに向かって手をかざした。

すると、その手からリルを呑み込むほどの大量の水の波動が襲いかかる。

「爆炎戦斧！！」
ばくえんせんぶ

リルはその圧倒的な水の波動を前にしても怯まず、炎を纏ったレガースで落下の速度と体重を乗せた踵落としを放つ。

愛華の水神の技とリルの技がぶつかり合う。

愛華はリルの炎を弱らせ、リルは水を切り裂いていく。

「あああああ！！！」

「やあああああ!!!」

二人供、ありつたけの魔力を魔導具に注ぎ込む。

愛華の水とリルの炎が最大に達した時、二人を巻き込む大爆発が巻き起こった。

だんだん爆煙が晴れていき、対峙する二人の姿が見えてくる。

二人の手には魔導具は既に持つておらず、ただ立ち尽くすだけ。

流石のコザー教師も判定がつけられない様子だ。

「.....」

しばらくすると、ほぼ同時に二人は膝をつきうつ伏せに倒れ込んだ。

「愛華お姉ちゃん！リルさん！」

「てえへんだ！てえへんだ！」

「えらいこつちや！えらいこつちや！」

この後に及んでまだふざける二人を優音とウイステリアは無視して愛華とリルの元に向かう。

ウイステリアが二人の容態を確認する。

「アリサさん、二人は大丈夫ですか？」

「……うん、大丈夫。ただ眠ってるだけ。」

よかつた、とその場に尻餅をつく優音。

観客席からアツミとクワリスが歩いてくるのが見える。

「それじゃ、二人を保険室に連れていこう。」

優音とウイステリアの間に風が吹くと、フワリと愛華とリルの体が浮いた。

アツミは二人を浮かせたまま、闘技場を出ていった。

「あれって浮いてる方は凄く恥ずかしいよね。」

「とりあえず二人には黙っておきましょう。」

優音とウイステリアは浮いてる二人を見ながらうんうんと頷いた。

……。

結局さっきの試合は引き分けという事になり、いよいよ優音の試合が始まる。

クワリスとウイステリア、そして保険室から帰って来たアツミは屈

伸運動をしている優音を見守っている。

アツミはあのままクワリスとウイステリアを二人きりにしようかな、と企んだがどうせまともに会話出来ないんだから止めといた。

「それにしても、優真どこまで逃げたんだろうな。」

そういえばとアツミが言い出した。

優真が逃げ出してから随分と時間が経ったが、未だに戻ってこない。

「案外ジュンとエンカウントしてまだ逃げ回ってんじゃないの？」

クワリスは笑いながらジュンが優真を追い掛け回す姿を思い浮かべる。

その姿は某大盗賊三世と某日本の警部のようだ。

「あ、始まるよ。」

ウイステリアの言葉で二人は再び現実に引き戻される。

優音の相手もどうやら準備が完了したようだ。

「始め。」

コザー教師の合図で優音は『風威紅鉄』を構えて走り出した。

……。

保険室の静かな雰囲気の中でレンは目を覚ました。

優音に保険室に連れてきてもらって、横になって休んでいる内に眠ってしまったようだ。

起き上がって周りを見てみると、隣には愛華が、そのまた隣にはリルが眠っている。

「っ……っ」

さっきの恐ろしい光景が蘇ってくる。

初めて味わう本物の殺気。恐怖で全く体が動かなかった。

これから先、あんなのをまた味わうと思うと学園を辞めたくなくなる。

「……いけない、いけない。」

弱気になっている自分に喝を入れる。

自分がこの学園に入ったのは昔からの夢の為。

おとぎ話に出てくる魔法使いや十賢者に小さい頃から憧れていた。

自分もそうありたいとずっと思い続けていた。

やっとスタート地点に立ったというのにいきなり挫折はみつともない。

それに師匠だって教えてくれた。これから先、十賢者のような魔法使いになるにはギルドに入るのは避けられない。

そうなったら、魔物討伐の仕事もあるだろう。だから、師匠は敢えて本気で来てくれたんだ。

その事に感謝こそすれ、脅えるなんて失礼極まりない。

でも、師匠の事だ。きっと気を使って自分とは極力関わろうとしないだろう。

だからまずは、師匠に会って謝ってまた元に戻さなければ。

「うん、じゃあ闘技場に行こう。」

レンは隣で眠っている愛華とリルを目に尻目に保険室から出ていっ

た。

.....

レンが闘技場の近くまで来ると、物凄い歓声が聞こえる。

何かかと速足になり闘技場に着くと、優音が自分の体ほどもある長銃を構えたところだった。

「ぬぬぬぬぬ.....」

優音は長銃を構えたまま、険しい顔で唸っている。

「どうなっただんですか？」

「あ、レンちゃん、もう大丈夫なの？」

心配そうに見るウイステリアに笑顔で大丈夫です、とレンは答えた。

レンの質問にはアツミが答えた。

「今、優音が解武したんだよ。で、解放状態を何とか維持してるどころ。」

再びレンが優音を見てみると、優音は銃の照準を相手に向けていた。相手はダメージがあるのか膝について動けないようだ。

優音の周りに風が吹き始め、銃口に魔力が収束していく。

「ぬぬぬ・・・す、ストームブレット」！！！」

風威紅鉄の銃口から溜めに溜めた魔力が一気に放出され、紅い風を纏った弾丸が放たれた。

だが、その弾は目標から大きく逸れ、アツミ達の下の壁へ。

「どわあ！！？」

「きゃあ!？」

凄まじい弾丸の威力に闘技場全体が地震が起きたように揺れ、壁には大穴が残った。

「・・・・・・・・」

その威力を目の当たりにした優音の相手の男子生徒は気絶。

撃った本人も二丁拳銃の姿になった風威紅鉄を抱えたまま、キョトンとしている。

「し、勝者、霧谷優音。」

上擦った声でコザー教師がそう言うと、優音はハッと我に帰った。

「や、やったー！出来ました、ししよー！！！」

「うむ、グッドだ。」

アツミは妙にでかい態度で賞賛の笑みを浮かべる。

そして、優音はアツミの隣にいるレンに気が付いた。

「あー！！！レンちゃん！もう大丈夫なのー！！？」

「うん！もう平気！」

優音の嬉しそうな笑顔にレンも笑顔で答える。

そんな様子を見て、アツミはさっきからずっと気になっていた事をレンに尋ねる事にした。

「なあ、レンさん。さっきジュンが殺気出してたけど何したんだ？」

アツミが分かっていたのはジュンは怒っているわけじゃないという事だけ。

何故そうなったのかアツミは分からなかった。

「・・・修行の一貫のようなものです。もし私が魔物と戦闘になった時、怯まないようにわざとそうやったんですよ。」

「それにしたって、いきなりやらなくても・・・」
「いや」

ウイステリアの言葉にアツミは否定の反応を示す。

「魔物は待つちゃいけないからな。いつ、どこで襲って来るかわからないし・・・」

アツミの言い分は最もな事だった。

最近ではギルドや政府の手が足りず、まれにだが魔物が一般人を襲う事もあり得る。

だが、それでもウイステリアはどこか不服そうだった。

「でも、女の子にそういう事するなんて……ブツブツ……」

その時、今日の最終試合で戦うウイステリアの名前が呼ばれた。

「ほらほら、試合試合。」

「わかってるよ……ブツブツ……」

アツミに言われ、まだブツブツ言いながらウイステリアは闘技場を降りていく。

「頑張つて!」

「頑張つて下さい!」

「ファイトです!」

クワリスと優音とレンの声援を背にウイステリアは相手と対峙する。

コザー教師の合図で相手の男子生徒は槍型の魔導具でウイステリアを切りつけてきた。

だが、ウイステリアはまだブツブツ言いながらその斬撃を避ける。

次々と襲いかかる槍の斬撃をウイステリアはヒョイヒョイと避け続ける。

相手が一旦距離を置いたところでウイステリアはようやく魔導具『エオリアン・ハープ』を出した。

「・・・今ちよつと機嫌悪いから早く終らせるよ。」

そう言うとウイステリアはハープの弦に指を走らせる。

ウイステリアの奏でる曲は聴く者全てに安らぎを与え、動きを鈍らせる。

『嬉遊曲第一楽章《氷の人形》』

ウイステリアの前に氷の人形が二体現れた。

そして、ウイステリアは再び曲を奏で始める。

「さあ、踊って。」

二体の氷の人形がウイステリアの奏でる曲に合わせて踊り始め、相手に攻撃を仕掛ける。

「はっ!?!?ぐあっ!?!」

人形は踊りながら次々と蹴りや肘打ちという色々な攻撃を相手に放つ。

ウイステリアが速く弦を弾けば素早く、強く弾けば力強くステップを踏む。

そうして、いよいよ曲が終盤に差し掛かってくる。

「さあ、終わりだよ。『ファイナーレ』」

ウイステリアはハープの端から端を指で弾いていく。

すると人形の内一体が相手を上空に蹴り飛ばし、もう一体が高く飛び上がり今度は相手を蹴り落とした。

「ぐあああ！！！！」

ウイステリアにボコボコにされた男子生徒は白目を向いてそのまま気絶してしまった。

正に圧倒的。これからはウイステリアを怒らせないようにしようとかワリスは心に深く刻み込んだ。

「勝者、アリサ・ウイステリア。これより一時間後、明日のギルド

体験のメンバーを発表する。」

そう言うと、コザー教師は闘技場から出て行ってしまった。

悠々と戻って来るウイステリアは相手をぶつとばして少し気が晴れたようだ。

「お、お疲れ。」

「うん、ありがとう。」

恐る恐るクワリスが話しかけてみると、ウイステリアは笑顔で答えた。

その笑顔にとりあえずほつとする四人。

「そろそろ呼びにいった方がいいかな。」

クワリスはみんなを見ながらそう言った。

みんなというのは優真とジュンと愛華とリルの事だろう。

「あー、じゃあ俺は優真を探して来るよ。」

アツミは体に風を纏わせて、空高く飛び上がった。

空から探した方が都合がいいと思ったのだろう。

「いいなあ、私も空飛びたいなあ・・・」

「風の属性も持つてるならいずれ出来るようになるよ。俺はジユン連れてくる。三人は保険室にいる二人を連れてきて。」

クワリスは三人の返事も聞かず、魔導具『グラン・グリモア』を出して、緑色のドラゴンを呼び出し空へと舞い上がった。

「あれがクワちゃんの三体目のドラゴンかあ。」

ウイステリアはクワリスが飛んで行った方向を見ながら呟いた。

「さて、私達も行きましょう。」

優音とレンとウイステリアは連れ添って保険室に向かっていった。

.....

「到着。」

「おぶっ・・・もう絶対空は飛ばん・・・」

どうやら一番乗りは優真とアツミのようだ。

アツミは学園の中を徘徊していた優真を見つけた途端、無理矢理引っ付かんで飛んで来た。

「あ、もう終わったんだ。で、これから何やんの？」

「明日のギルド体験のメンバー発表。てゆーかお前は何してたんだ？」

「いやー、戻りたかったんだけどさ、ジュンが怒ってるとまずいなーと思つて学園探索してた。」

笑いながら言う優真にアツミははあ、とため息をついた。

とりあえず、アツミはみんなが戻って来る前に優真に今までの事を話した。

「ふーん、レンが負けて、愛華とリルが引き分けねえ・・・」

ジュンとレンの事は細かく話し、愛華とリルの事は優真争奪の会話を省いて教えた。

そんな時、優音達が愛華とリルを連れて戻って来た。

「あ、お兄ちゃん。戻って来たんだ。」

「「え？」」

愛華とリルが同時に顔を上げる。

そこには心配そうにしている優真の姿が。

「愛華、リル、倒れたんだってな、大丈夫か？」

「「……………」」

愛華とリルはさっきの試合を思い出し、顔を赤く染めた。

まさか、と思い二人はアツミを睨む。

「……………！！」（ブンブンブン）

アツミが優真に見えないように首を激しく横に振る。

その様子に愛華とリルはほっと息を吐いて優真に駆け寄った。

と、その時、上空から巨大なドラゴンが飛んで来た。

ドラゴンは優真達の頭上で消え、二人の人が落ちてくる。

一人はクワリス、もう一人は…………

「ふ〜おおおおお！〜！！！」

ロープでぐるぐる巻きにされた拳句、猿轡までされて身動きが取れないジユンが落ちてきた。

「よっど。」

「ふ〜おっ！〜！？」

クワリスは無事着地、ジユンはドスツと落下した。

「うわあ！？大丈夫か！？」

「大丈夫。無駄に頑丈だから。」

驚く優真にアツミは酷い事を平気で言い放った。その言葉の通りにジユンはピンピンしている。

「ふ〜ふ〜ふ〜！〜！！（はずせ！〜ら〜！！）」

「何故こんなことに？」

ナチュラルにアツミはジユンを無視してクワリスに聞く。

見るとクワリスもいくつか軽い怪我をしていた。

「……いや、このおバカが何か、れっちゃんに会わず顔がない！
って暴れるから仕方なくこうするしかなかった。」

「師匠……」

その言葉を聞いたレンはジュンに近づき、しゃがんでジュンに話しかけた。

「師匠、私もう気にしてませんから。私の為にああしてくれた事は分かってますから。だから、これからも私の師匠でいて下さい。」

「ふっふん……（れっちゃん……）」

何だかいい感じなムードになってきている空間を優真達は遠巻きに見ている。

だが、優真はそんな空間に水を差した。

「レン、そのシチュエーションはお前がジュンに変態プレイさせて
るみたいだぞ。」

「ち、違います！……」

レンは激しく否定して、急いでジュンの猿轡を外してロープも解いていく。

「・・・なあ、れっちゃん。」
「・・・なんですか？」

レンはロープをほどいていきながら答える。

その顔はジュンと和解出来たのが嬉しいのか、ほころんでいる。

「いや、思いっきり、パンツ見えぐほあ！！！！！！！」

レンは途中でロープをほどくのを止め、ジュンの頭を思いきり蹴り飛ばした。

「・・・最後に・・・いいもん・・・見させてもらったぜ・・・
ガクッ。」

ジュンは白目を向いて気を失った。

レンは肩で息をしながら物凄く怒っている。

「はあ、はあ・・・」
「さ、さあて、結果発表まだかなあ？」

レンが優真達の方を見ると、全員一斉にレンから視線をそらした。

と、そんな時、コザー教師が闘技場の中に入って来た。

「それでは、これより、明日のギルド体験メンバーを発表する。」

優真達はごくりと喉を鳴らし、次の言葉を待った。

レンは正気に戻り、ジュンは白目を向いたままだ。

「今回は過去最多の九人だ。まず、一人目、ジュン・フォレス。」
「……………」

ジュンは白目を向いたまま、全く反応しない。

コザー教師は一応ジュンを見てみるが特に何も言わない。

「まあ、ここはやっぱりってところだろう。」

半ば予想だった事に優真はさほど驚きはしなかった。

「次は、アツミ・ハイモート、クワリス・ラージ。」
「よし、来た！」
「イエイ。」

アツミとクワリスは共にガッツポーズを取った。

これも予想通りの結果で、誰も騒ぎ立てはしない。

だが、次からは誰が選ばれるかは分からない。

「そして、次は……霧谷優真。」

「えっ!？」

優真は自分は選ばれないと思っていたが、突然の指名に驚いた。

「俺負けたのに……」

「誰が勝ち負けで決めると言った？試合内容重視で選んでいる。」

優真の言葉にコザー教師はため息をつきながら答えた。

内容重視という事で負けた者にも希望が見えてくる。

「次は……アリサ・ウイステリア。」

「やった。」

喜ぶウイステリアの隣でクワリスは小さくガッツポーズを取る。

これで明日は急接近、とクワリスは密かに思った。

「六人目は成瀬愛華、そしてリル・ウエーバー。」

「やりました！」

「・・・よかった。」

愛華とリルは手を取り合って喜んでいる。

どうやら保険室に二人でいる間に色々と話し合って、友情が芽生えたようだ。

これで残る椅子は後二つ。闘技場にいる生徒は次の言葉を待った。

「七人目、霧谷優音。」

「やっつったああ！！！！」

選ばれた優音は体全部を使い、飛び跳ねて喜んでいる。

「確かに、さっきのあれはインパクトでかかったからなあ。」

アツミはしみじみと思い出し、さっきできた大穴を覗き込む。

・・・我が弟子ながら恐ろしい・・・とアツミは思った。

「これではレンが選ばれれば全員で行けるな。」
「無理ですよ。」

楽しそうな優真の言葉にレンは寂しそうに笑いながら言った。

そんなレンの様子に喜んでいたみんなも静かになる。

「私は負けて、内容も散々でしたし、選ばれるなんて事は」
「最後に、レン・グラッド。この九名で明日はギルドに行く。」
「ち、ちよつと待って下さい！」

淡々と説明していくコザー教師にレンは大声を出す。

「何で私が選ばれるんですか！？私負けたし、何もできなかったし・
・・・」
「学園長が決定した事だ。変更はない。」

コザー教師はレンにそう答えると、また説明に入る。

だが、選ばれなかった生徒はざわめいている。

レンは放心状態で椅子に座り込んだ。

「良かったじゃん、レンちゃん！これでみんな一緒に行けるよ！」
「うん……」

優音は嬉しそうだったが、レンは素直に喜べなかった。

そんなレンを見かねた優真は声をかけようとしたが

「はっ、どうせあいつの親父がこの教師だからだろ？いいねえ、
身内のコネがある人は。」

闘技場にいる生徒の一人が大声でそう言った。

優真はその声が出た方を向いて立ち上がった。

「おい、だれ」
「今言った奴は誰だ？」

優真が立ち上がったと同時に今まで気絶していたジュンが立ち上がった。
った。

今のジュンからは誰もが恐怖で身動きが取れないほどの殺気を放っている。

「今、レンを悪く言いやがった奴はどいつだ？」

明らかに努気を含んだ声。悪く言った本人も恐怖で体が動かない。

「やばい、あれマジできてますよ。言った奴は殺されるかも。」

「ええ!？」

こんな状況でもアツミは涼しい顔をしている。

「た、確かに悪く言ってたけど、殺すなんて……」

「いやいや、あの殺気はマジだよ。俺等も似たような陰口は何度も叩かれて来たから。」

クワリスも無関心な態度でジュンを眺めている。

「し、師匠……私は大丈夫ですから……」

レンはあの時以上の殺気を放っているジュンを脅えながら止める。

「レン、ああいう奴には痛い目見させた方がいい……」

「駄目です!もうレンって言うてる時点で駄目です!いつもみたい
にれっちゃんって言うてください!いつもの師匠に戻ってください
!!!」

レンの悲痛な叫びが闘技場に響く。

すると、殺気立っていたジュンがいつもの雰囲気に戻っていった。

「……はあ、全く。おい、誰が言ったか知らんが、れっちゃんに免じて許してやる。だが、次はない。」

ジュンはドサツと座って、不機嫌そうに黙り込んだ。

「明日お前達が世話になるのは魔導士ギルド『精霊の翼』というところだ。」

それまで事の成り行きを見守っていたコザー教師はタイミングを見計らってまた説明を続けた。

「各自、準備して行く事。以上、今日は解散。」

コザー教師の説明が終わったが、それから誰一人口を開かなかった。

まだ、さっきの雰囲気之余韻が残っているのだろう。

だが、一人、また一人と闘技場から人が出ていき、最後には優真達だけとなった。

ジュンはレンにいきなりダメ出しされると、静かに舌打ちをした。

それを見て優真達が苦笑している。

「さあ、帰ろう。」

ようやくいつもの雰囲気に戻った優真達はみんなで笑いながら寮に帰っていった。

第十七話

実技試験の次の日、ギルド体験の一日の朝、優真は目覚めた。

窓からは朝日が注いでいて、いい天気だった。

が、そんな良い気分を台無しにしてしまう男が一人。

「……くかー、むむむ……そして俺様登場……むにゃむにゃ……」

いったいどういう夢を見ているのか、ジュンは上半身がベッドから落ちていた。

優真はやれやれとため息をつくと、自分の枕でジュンの顔を思いっきり叩き付けた。

「ふごお!!!? 何だ何だ!?!」

優真の攻撃を受けて直ぐに飛び起きる。

どうやら効果抜群だったようだ。

「さっさと加減起きろよ。準備しとけ。」

「んあー、あー、ギルド行くんだっけか……」

未だに寝ぼけているのか昨日はあんなに騒いでいたのに、今は興味なさげに言う。

そんな時、どこからか叫び声が聞こえてきた。

「いーやーいー！……！」

「うわっ！？今度は何だ？」

「隣の部屋から聞こえたぞ！」

優真達の部屋は二階の一番端で、その隣はアツミとクワリスの部屋だ。

という事はアツミ達の部屋から叫び声が聞こえてきた事になる。

優真とジユンは直ぐに隣の部屋に向かった。

「何だ！？どうした！！」

優真が部屋に入っていくと、そこには寝間着のアツミを足蹴にしている美少女がいた。

クワリスはベッドの上で事の成り行きを見守っているというか被害が自分に及ばないようにしている。

「いつまで寝てんのよ、アンタは!! さっさと着替なさいよ!!」
「痛い、痛い! 足蹴にするなよ!! うわっ、服を脱がすな!!」?

事態について行けず、優真はただポカーンとしている。

その横でジュンが愉快そうに服を剥ぎ取られているアツミを見ている。

「えーっと・・・あれは誰?」

「ああ、あれは・・・」

と、ジュンが口を開いた瞬間、アツミが優真に向かって飛んできた。

「ぐほお!?!」

「ぎゃあ!!」

二人は絡まって部屋の外に吹っ飛ばされた。

ジュンがやれやれ、といった感じで美少女を見る。

「おい、リリース。そこらへんにしとけよ。」

「はあ、はあ、そうね・・・」

リースと呼ばれた少女は肩で息をして、部屋の椅子に座った。

クワリスはベッドの上から降りてきて、優真とアツミも頭を押さえながら立ち上がる。

「あら、ジユン。その人は誰？」

「ああ、こいつは学園の友達、霧谷優真だ。優真、こっちは、リースミス・ラグレイトだ。」

優真は改めてリースを見る。

肩くらいまである綺麗な金髪に青い瞳、背は優音くらいのお華やりに負けないくらいのお美少女だった。

「はじめまして。あたしはリースミス、リースって呼んで。」

「ああ、霧谷優真だ。リースも優真って呼んでくれ。」

「ええ、わかったわ、優真。」

リースはそう言ってニコッと可愛らしく微笑んだ。

優真は一瞬見惚れたが、さっきの光景を思い出して顔を引きつらせた。

「ねえ、リース。俺と優真の扱いが雲泥の差なんだけど……」
「うるさい、アツミはいいのよ。アツミなんだから。」

全く理由になってないリースの言葉にはあゝとため息をつくアツミ。

「つーか何であんなに怒ってたんだ？」

「それは……せつかくアツミに会いに来たのに寝てるからつい……ゴニョゴニョ……」

リースは赤面しながらぼそぼそと聞こえるか聞こえないかの声で言った。

だが、しっかりとその場にいる全員に聞こえていた。

「へー、こんな可愛い彼女がいたのか、アツミ。」

「あ。」

優真の言葉にやっちゃまったよ、という顔をしているジュンとクワリス。

アツミは顔面蒼白で後ずさっていく。

「ん？」

見るとリースはボンツと音をたてて赤くなっていく。

「か、可愛いつて・・・もー、優真はお世辞が上手なんだから。それにあたしとアツミはまだ付き合っていないわよー！」

リースは照れながらアツミを殴る蹴るの暴行を加えている。

しまいにゃ、魔導具らしき大剣を横にしてバシバシ叩く。

「いてっ、いてえ！！てゆうかそれシャレになんねえ！！」

「もー、可愛いだなんて・・・」

アツミは必死に訴えているが、リースは自分の世界に入っている。

そうしながらもリースの手だけは動いてアツミに攻撃している。

「なんだ・・・あれ・・・」

「リースはな、褒められたりすると照れ隠してアツミを攻撃する。」

優真の言葉にジュンは笑いながら答える。

既にアツミは気絶寸前の所まで来ている。

「さて、そろそろ止めさせるか。」

ジューンは臆する事なくリースに近づいていく。

何やら懐を「ごそごそ」まさぐってリースの横に立った。

「リース。」

「む。」

ジューンがそれをリースの目の前に差し出すとリースはさっとそれを奪い取った。

アツミは既に虫の息。時々体が痙攣している。

「さて、リース。他にも紹介したい人達がいるから朝飯でも食おうぜ。」

「ええ、そうね。」

さっきの暴走振りは少しも見せずキリツとした態度に戻るリース。

優真は隣にいるクワリスに話しかける。

「なあ、さっきのってどうやって止めたんだ？」

「ああ、あれはね。昔からリースはジュンの飴が大好きなんだ。だから、ジュンが飴をあげれば大抵の暴走は止まる。」

何だその設定は、と優真は心のなかで思った。

ふと、優真がアツミを見てみると、白目を向いて気絶していた。

「おーい、大丈夫かー？」

「……………」

優真は何度か呼びかけてみるが特に返事がない。

こりゃ愛華に任せた方がいいかな、と優真はアツミを担ぎながら思った。

……………。

優真達の前の席に座っている愛華と優音とウイステリアは目をパチクリさせている。

「えーっと、お兄ちゃん、何があったの？」

「あー、何か細かい事は俺にも分からんのだが……………」

優真は隣に座っているアツミを見た。

アツミはげっそりとして、リースはニコニコとアツミにくつついて微笑んでいる。

「あー、三人とも、こいつはリースミス・ラグレイト。で、リース、こっちは左から優真の妹の霧谷優音と幼なじみの成瀬愛華、学園の友達のアリサ・ウイステリア。」
「よろしく、リースって呼んでね。」

リースはアツミにくつついたまま、三人に笑いかける。

三人はどうリアクションしたらいいか分からず、ただポカンとしていた。

だが、一番順応能力が高い優音は直ぐに元の調子に戻った。

「リースさんは師匠の彼女さんなんですか？」
「……あ……」

優真とジュンとクワリスの言葉が上手くハマった。

アツミは優音にそう思われた事とこれから来る恐怖に血の涙を流した。

第二ラウンドスタート、カーン。

しばらくお待ちください。

.....。

リースの暴走が収まった時にはアツミは床にひれ伏していた。

優真は女子三人に事の経緯を話して、これからは迂濶にリースを誉めないように注意した。

「で、リース、本題なんだけどな。」

「うん。」

リースはオレンジジュースをズルズルと飲んでいる。

ジュンはパンを頬張りながら本題に入る。

「何で、こっちに来たんだ？アツミに会ったため？」

その言葉にリースはぽつと頬を染める。

ジュンはしまった第三ラウンド開始か！？と思ったがどうやら不発に終わったようだ。

「それもあるんだけど、お父さんとお母さんが社会勉強の一環とか言っただけの魔法学園に入学することになったのよ。」

それを聞いたアツミは一瞬で起き上がりワナワナと震え出した。

リースは嬉しそうだが、それ以外の全員は気の毒そうな目でアツミを見ていた。

「なあ、そういえばさ……」

優真はふと気付いたようにリースに尋ねる。

「ジユン達の幼なじみという事はリースも十賢者の子供？」

「ええ、そうなるわね。確かお母さんの二つ名が『純白の水姫』だった気がするわ。だからあたしの属性も『白水』ね。」

アツミがリースを苦手なのは属性の相性が悪いからか？、と優真は思った。

リースはそうは思っていないのかアツミの腕をギュッと抱きしめている。

アツミの腕がだんだん青紫色に染まっていくが優真は見なかった事にした。

「ねえ、今日はみんなは学園行くの？」

「いや、今日はギルドに行くんだ。」

ふとリースがそう聞くと、優真はギルドに行く経緯を話した。

説明が終わるとリースは目を輝かせてさらに強く腕を抱きしめる。

アツミは痛みに顔をしかめているが、誰も見て見ぬ振り。

「あたしも行くー!!」

「いや、リース、学園は？」

アツミは腕を何とか外そうとしながらリースに聞いた。

リースは負けじとぐいぐい引っ張りながら笑みを浮かべる。

「大丈夫。あたし、本当は明日からだから。」

「ああそうですか……」

アツミはもう全てを諦めたかのような顔をしていた。

「でも、リースさんも行っていいんですか？」

「うーん、大丈夫じゃないか？ 実力は、少なくともアツミより上だし。」

嬉しそうなリースと達観したような顔のアツミを見ながら優音が聞くと、ジューンは楽天的に答える。

優真はいつものメンバーにまたキャラが濃い一人が加わって、一波乱起きそうな予感がしていた。

.....

寮を出てから数十分。途中で合流したレンとリルを連れて、優真達はギルドの前までやって来た。

「おおー！」

「ほえー！」

ギルドの建物を見て、同じようなリアクションをする霧谷兄妹。

ギルドにはでかでかと看板があり、この世界の言語だが召喚魔法には言葉が分かるという要素もあり一応優真達は話す事も読む事も出来る。

「『精霊の翼』か.....」

「よっし、皆の衆、突撃じゃ！！」

優真が感慨深く思っている暇もなく、ジユンはギルドに足を踏み入れていく。

優真達もジユンに続いて初めてのギルドに入っていく。

「おおー！！」

中に入ると、色々な格好をした人達や中には優真達と同じくらいの歳の人も居る。

皆、思い思いの事をしていて、雑談する者、酒を飲んでいる者、踊っている者、e t c . . . なんかも居た。

「こんちわ〜！リーザス魔法学園の者ですが〜。」

「あ、はいはい。」

ジユンが大声でそう叫ぶとギルドの人達は一斉に優真達を見る。

そして、その中の一人が間伸びした声で応対した。

「あなた達がリーザス魔法学園の学生さん達？」

対応してくれたのは、ソフィアと同じくらい綺麗な女性で優真達男子群は全員見惚れてしまった。

「あんたは何見惚れてんのよー！ー！！！」

「ギャー！ー！！！」

朝と同じようにリースに鉄拳制裁を喰らわせられるアツミ。

そのままゴロゴロと転がり壁に激突。意識を失った。

「あいつ、まだ半日も経ってないのに気絶し過ぎじゃないのか？」

「まだまだ、リースの恐ろしさはこんなもんじゃないよ。」

色々細かい手続きをジュンが行っている最中で、優真とクワリスはひそひそと話していた。

「ひい、ふう、みい・・・あら一人多いみたいだけど・・・」

「あー、一人どうしても一緒に行きたいって奴がいます・・・駄目ですか？」

ジュンが相手の顔色を伺うように聞いてみると、美人な女性 シルディアはうーんと考えてしまった。

「私の一存じゃ決められないからなあ・・・マスター！マスターいますか！？」

「ここに居るよ。」
「うわあ!?!」

シルディアがギルドの最高責任者のギルドマスターを呼ぶと、いつの間にかそのマスターは優真の隣にいた。

「それでマスター、どうしますか?」

「ふむ。試験が不合格だったなら仕事をさせるわけにはいくまい。少なからず危険な仕事じゃからの。」

危険、という言葉に愛華と優音は反応した。

元々危険という事は承知していたが、やはりそれを聞いてしまうと少し不安になる。

だが、優真は心配するな、と二人に声を掛けて少し落ち着かせた。

「あいつは明日転入する事になっていて、まだ試験受けてないんですよ。」

ジユンがそう説明するとギルドマスターはふーむと考え込む。

やがて、何か思いついたようにぽんと手を叩いた。

「ならば、今テストをしようではないか。誰か手が空いてる者はお

らんか!？」

マスターがその場で声を張り上げると、マントとフードに体を隠した女の子が出てきた。

「……………」

「おお、メイリーシエ、やってくれるか？」

「……………(こくり)」

メイリーシエと呼ばれた寡黙な少女はマスターの言葉に頷いた。

その様子を見てリースは一步前に踏み出す。

「あたしはリースミス、よろしくね。それでマスターさん、試験方法は？」

「そうじゃのう、まだ入学前じゃからそんなに魔法も使えんじやろうから……………」

「失礼な!？あたしはむぐつ!?!？」

マスターの言葉にカチンと来たリースが反論しようとしたが、ジュンに口を塞がれた。

(ちょっと何すんのよ!!)

(いいから、黙っとけ。ここで正体ばらしてわざわざ難易度上げなくてもいいだろ!)

それもそうか、とリースはそのまま押し黙ってしまった。

マスターはテーブルの上に置いてあったピンをリースから一番遠いテーブルの上に置いた。

「ミス・ラグレイトとメイリーシエはそこから魔法を使ってこのピンを落とした方が……」

「ふっ！」

マスターの説明が終わらない内にリースは手を振りかざす。

すると、手から水弾が撃たれピンを粉々に砕いた。

それを見たギルドの人達は全員キョトンとしている。

「これで終わりかしら？あんまり余計な魔力は使いたくないんだけど。」

「ハツハツハ、こりゃあいー！一瞬で高密度の魔力を圧縮して放つその技術。どうやらタダ者じゃないようじゃな。いいじゃろう、好きな仕事を選ぶがいい。」

マスターは愉快そうに大笑いして奥の部屋に入ってしまった。

特に何もしなかったメイリーシエも元の場所に戻っていく。

「それじゃ、こっちに来て。」

優真達はシルディアに巨大な看板の前まで案内された。

「これはビジネスボード。ここに受けたい仕事の張り紙をはがして私がマスターに持ってきてもらって、手続きをするの。」

ビジネスボードには色々な仕事の依頼の張り紙が張ってあった。

そこには仕事内容と報酬金額が書かれてあった。

「まだ学生だから簡単なものを選ぶのが無難ね。じゃ決まったら私の所に持ってきてね。」

そう言ってシルディアはバーのカウンターの所に戻っていった。

とりあえず、優真は依頼内容を眺めてみる。

「ペット探してます。報酬は五千ペルセス（この世界の通貨の名前）
・・・一日用心棒募集。報酬二万ペルセス・・・ふーん色んな依頼があるんだなあ。」

「・・・ねえ、優君。」

優真の服をちょいちょいと愛華が引つ張ってきた。

優真は愛華がこうしてきたら何かお願いがあるサインだと分かっていた。

「はいはい、どういったお願いでございましょうか？」

「・・・あのね、依頼、一緒に受けない？私一人じゃ不安だから・・・」

愛華が三割増しもじもじしながら上目使いで優真にお願いしてきた。それをされるとついつい聞いてしまうのは優真の弱い所だったりする。

「あ、ああ、いいよ。俺もまだ一人じゃ不安だからな。」

「・・・よかった。」

すっかり安心して笑顔を見せる愛華。

優真がやれやれと思っていると横からリルが顔を出した。

「優真様、それ私も同行してもよろしいですか？」

どうやらリルは何としても優真と愛華が二人きりになるシチュエーションは避けたいようだ。

横からリルが出てきた事で少しむっとする愛華だったが、仕方ないかと思っただ。

「俺はいいよ。愛華はどうだ？」

「・・・うん、私も別にいいよ。」

「ありがとうございます、優真様、愛華様。」

リルは礼儀正しく優真と愛華に頭を下げた。

その様子を端から見ている男が一人。

「いいなー、優真。美少女二人を両手に花かー。」

いつものごとくジュンは優真を冷やかしてきた。

その言葉にボンツと赤くなる愛華とリルだったが、優真は気付いていない。

「別に俺はそんなんじゃないやねえって。それにお前にはレンがいるじゃねえか。」

「ええ！？何でそこで私の名前が出てくるんですか！！？」

いきなり話の矛先が自分に向いて焦るレン。

いい加減素直になればいいのに、と優真は思った。

「おう、れっちゃんはどつする？俺と一緒に来てもいいぞ。」

「……えっちな事しませんか？」

レンの言葉に若干考え込むジュン。

やがて、顔を上げてレンを見る。

「隙あらば見るものは見るぞ！」

「じゃあ行きません。」

「ああ！嘘です、嘘です！そんな事しません！」

ぷいっと顔を背けるレンに、ジュンは焦って嘘だと否定する。

レンは疑わしき目でジュンを見る。

「……本当ですか？」

「イエス、マアム！」

ジュンは姿勢を正してレンに敬礼をする。

そんなジュンを見てレンはぷっと吹き出した。

「あはは、わかりました。そんなに私と行きたいなら一緒に行つてあげます。」

「む、まるで俺がれっちゃんと行きたくて駄々こねてるみたいじゃん。」

ジュンは口を尖らせて心外だと言わんばかりに抗議する。

「違うんですか？」

「いや、そりゃね、男一人で行くよりは女の子連れていった方が花があるって思うけど、ここはもうなんか男のプライドっつーもんが……ぶつぶつ。」

ぶつぶつ独り言をしているジュンを放っておいて、レンはさっさと依頼を探し始めた。

一方、アツミとリースはというと……

「ほら！あたし達も一緒に行くわよー！」

「いや、俺は一人の方が……」

アツミはそう言いながらも内心は優音と行きたいと昨日から考えていたが、リースの出現で敢えなくそれは粉々に打ち砕かれた。

優音はそんな二人を見て苦笑している。

「あはは、ししょーとリースさんって仲がいいんですね。」
「そりゃそーよ、あたしとアツミは小さい頃から一緒だったんだから。」

やばい、このままある事ない事優音に吹き込まれたらますます俺とリースの仲を勘違いされる、とアツミは危機感を覚えた。

ただでさえアツミは何度が優音にアプローチをかけているがその全てが冗談と取られている。

仕方ない、この際贅沢は言えない。

そう思ってアツミはリースの肩に手を置いた。

「一緒に行くんならさっさと仕事探そうぜ。どうせだったら、優音も一緒に。」
「え？私もいいんですか？」

優音はちらりとリースの方を向いた。

リースはどうやら疎ましくは思っていないようでニコリと優音に笑いかけた。

「じゃあ、一緒に行きます。」

「……………（イエス！）」

アツミはぐっと二人に見えないようにガッツポーズをした。

しかし今度の課題はリースの攻撃を避けつつどうやって優音にアップローチをかけるか。

アツミはそんな事を考えながら仕事を探し始めた。

そんな三組の様子を遠目から見ていたクワリスとウイステリアは……

「余っちゃったね。」

「まあ、そうだね。」

クワリスは内心ドツキドキで、ちらちらと横目でウイステリアを盗み見ていた。

「……………い、一緒に、行く？」

クワリスは勇気を振り絞ってウイステリアを誘う。

ガチガチに緊張していてセリフを囁んでしまっていた。

「そうだね、一人で行ってもつまんなそうだからね、そうしよっか。」

「

その言葉にクワリスは天にも登る気分になった。

クワリスのテンションは一気にハイになり、スキップしそうなのを堪えてビジネスボードの前に向かった。

.....

それぞれの依頼を選んだ後、手続きをする前に一旦集まった。

「俺等があるお役人の護衛で、ジユンとレンが魔物討伐、アツミとリースと優音は脱走した犯罪者探し、クワとウイステリアさんは荷物配達.....って、アツミ達大丈夫か？」

一通り確認した優真が恐らくこの中で最も危険な依頼を選んだアツミ達を心配した。

アツミはげっそり、優音は苦笑、リースはヤル気満々な顔をしていた。

「リースが勝手に決めてしまいました.....」

「一応止めたんだけどね。」

「簡単な仕事はつままないの！せっかくやるんだったらどーんとい

ンパクトがでつかくないと。」

嬉々としてそう語るリースを誰もが心配そうになる。

流石に実力者が二人いたとしても、危険が無いわけじゃない。

「はあ、まあこうなった時のリースは聞く耳持たないから仕方ない。でも、二人は絶対に俺が守るよ。」

「いよっ！よく言ったそれでこそ漢おとこ！！で、報酬は？」

やはりそこは気になるらしく、ジュンが尋ねた。

アツミは依頼の張り紙をもう一度確認する。

「えーっと、情報提供の場合は内容にもよるけど五万ペルセス。捕まえれば十万ペルセスだつて。」

「ほう、中々に高額。でも三人で分けたらそうでもなくなるよな。」

せつかくやる気が出てきたのにいきなり凹む事をアツミに投げ掛けるジュン。

アツミはジト目でジュンを睨む。

「そついうお前等はどつなんだ？」

「ぶっぶっぶ、まあお楽しみは後にとつといて、クワちゃん達は簡

単そうだけど報酬どれくらい？」

ジューンは意味深な笑みを浮かべてもったいぶり、クワリスに話を振った。

クワリスも張り紙を見て報酬を確認している。

「俺達は何事も経験で簡単な仕事だから送り届けるだけで五万ペルセス。」

「ふーん、荷物運びにしちゃ、高くないか？」

優真は少し不思議に感じていたが、他のみんなはそもそも荷物運びがどのくらいかかるのか分かっていなかった。

「それで、優真達は？」

「俺達はある政治家を指定の町まで護衛する仕事。報酬は十五万つて書いてあったな。」

「高!？」

あまりの高さにアツミは驚く。

自分達が一番高額かと思っていたが、伏兵は意外な所にいた。

「この政治家を疎ましく思う奴がたくさんいるって事だな。まあ死

ならない程度に頑張るし愛華とリルも守る。」

「……うん、優君は私が守るから。」

「私も優真様をお守りします。」

ここまで思われても全く気付かない優真も優真である。

いよいよ発表という事でジユンはわざとらしく咳払いをした。

「ふっふっふ、皆の衆、聞いて驚け見て驚け！これが俺等の仕事だあ！！」

ジユンはテーブルの上にパンツと依頼の張り紙を叩き付ける。

そこに書かれた依頼の報酬金額は三十万ペルセスと書かれていた。

「あつれー、俺目悪くなつたかなあ、クワちゃん眼鏡持っていない？」

「ごめん、持っていないわ。俺も何か目悪くなつたみたいで……優

真、この金額読んでくれない？」

「……三十万ペルセス。」

ボンツとショックのあまり二人は変な顔でのけ反った。

そして直ぐ様ジユンに詰め寄る。

「お前、死ぬ気！？いやお前は死んでもいい、だがレンさんを巻き

込むのは止める!!」

「レンさん、今からでも遅くない。俺達と一緒に行きよう。楽だから荷物運び。」

「え?え?」

かなり酷い事を言いながらジュンを責めるアツミ。

クワリスは考え直せとレンに持ちかける。

「大丈夫だって。相手は『魔人』以下の魔物の大群ってだけだし・・・」

「魔人の大群にたった二人で立ち向かうなあ!!」

脳天気なジュンの態度にツッコミまくるアツミ。

だが優真は今出た『魔人』という言葉が分からなかった。

「なあ、『魔人』って何だ?」

「魔人はですね、魔物の階級の名前です。知能もなく、力も弱い魔物が『小鬼』、小鬼より強いのが『魔人』。」

その魔人よりも強く、人の言葉を理解し話す事が出来る『墮霊^{だりよう}』。墮霊以下の魔物を支配するようになる『龍神』、そして、龍神の上に立つのが世界に数体いると思われる『死神』です。」

リルの長い説明に若干最初の方を忘れながらも優真は頷く。

「で、ジュンの実力で言うところの辺？」

「うーん、はつきりとはわかりませんが、恐らく墮霊くらいかと。私達は良くて魔人くらいの強さですね。」

優真はリルの言葉にガーンとショックを受けた。

五段階ある魔物のランクで下から二番目とは……

多少強くなった気がしていたのだが、それでも下から二番目……

「しかし、大丈夫なのか？魔物の大群相手です。ジュンはいいとしてもレンには危険だろう。」

何とか優真は立ち直って苦笑しているレンに言った。

レンは特に気にしてなさそうに優真に笑いかける。

「大丈夫です。自分の身は自分で守れますから。……それに本当に危なくなつた時は……師匠が助けるって言ってくれましたから……。」

頬を赤く染めながらレンがそう言うと、男子はその笑顔にキュンとなつて、女子は切望の眼差しを向ける。

「アツミ！あたしの事もちゃんと守りなさいよ！……！」
「ええ！？リース守る必要なへぶし！……！」

アツミが言い終わる前にリースはアツミの顔面にゲーパンを放った。

アツミはその一撃で気絶。一日に何度気絶すれば気が済むのか。

優真はため息をついて、仕事に行く準備を始めた。

第十八話

優真と愛華とリルはギルドでみんなと別れてからある建物の前まで来ていた。

「ここでいいんだよね？」

「はい、待ち合わせ場所はここで合ってます。」

リルは依頼の紙と建物を見ながら答えた。

「んじゃ、とりあえず入ってみるか。」

「・・・うん。」

「はい。」

三人が中に入っていくと、カウンターで受付をしている女性が三人に気付いた。

「いらつしゃいませ、どのようなご用件でしょうか？」

「あー、自分達は魔導士ギルド『精霊の翼』の者なんです。」

受付の人は一瞬驚いたような顔をしていたが直ぐに責任者に取り次いでくれた。

すると、責任者らしき男性が優真達を奥へ通し、応接間らしき部屋へ案内された。

そこには、初老の男性が一人椅子に座っていた。

「バルシーム様、精霊の翼の皆様をお連れしました。」
「うむ。」

バルシームと呼ばれた男は立ち上がり、優真達を見ると眉を潜めた。

「君達が・・・精霊の翼の魔導士かね？」
「ええ、まあ、そうですね。」

優真は自分達がリーザス魔法学園の生徒だとは言わない。

学生がギルドの仕事をしている事がバレてしまうとギルドの信用を失う事になるからだ。

だったらやらせるなど優真は思ったがそこは優秀な生徒の育成という事でギルド側も協力しているようだ。

「まあ、こちら側としては仕事を全うしてくれば構わないのだがね。」

バルシームは嫌味つたらしく鼻をふつと鳴らし三人を見る。

優真はムカツときたが一応依頼人なので我慢する。

「で、仕事の内容なんだが、これから私をレナウンの町まで護衛してもらおう。」

「レナウンの町はここから馬車で半日ほど行った所にある町です。」

隣にいるリルが優真と愛華に聞こえるように説明する。

バルシームは一人早々と準備して既に部屋から出ていこうとしていて、優真達は慌ててその後を追いかけていく。

「ったく、何だあの依頼人は・・・（ボソツ）」

「・・・優君、そういう事言っちゃ駄目だよ（ボソツ）」

ボソツと呟く優真に愛華も依頼人に聞こえないように優真に注意する。

優真達が外に出ると既に馬車が待機していた。

バルシームに続き、優真達も馬車に乗り込み、馬車はレナウンの町に向かって出発した。

・・・。

「「「・・・・・・・・」」」

優真達が馬車に乗り込んでから一時間が経過したが、重い雰囲気の中で誰も言葉を発そうとはしなかった。

このまま半日は辛いと思った優真はこの状況を打破しようと口を開こうとした。

「あの、バルシーム様。」

優真より先にリルが口を開いた。

バルシームは閉じていた目を開いてリルを見る。

「バルシーム様は何故政治家になったのですか？」

「・・・今の世の中が嫌いだからだ。」

まさか返答するとは思わなかったので優真は驚いた。

さらにリルは質問を続けていく。

「それは、何故ですか？」

「今の世の中は魔物の脅威に晒されているにも関わらず、上層部の連中は何の活動もしないくせに理想論ばかり口にしてている。しかも

そいつらは……」

その後もリルとバルシームは今の政治について熱く語り合っていた。リルと話している内にバルシームもスイッチが入ったようで饒舌になっていく。

優真と愛華はこの世界の政治については全く知らず、話の内容はちんぷんかんぷんだった。がリルは共感して相槌を打っていた。

「……言葉遣いからそうだとは思っていたが、やっぱりリルってお嬢様だったんだな。」

「……うん、凄いな。……私も全く話についていけない。」

優真と愛華はリルの凄さに感心し、最初とは全くキャラが違うバルシームとリルを眺めていた。

……。

半分くらい過ぎた頃、バルシームがリルを秘書にならないかという誘いを丁重に断っていた時にそれは起こった。

「おわっ!?!?何だ、何だ!?!?」

突然、馬車の中が急激に揺れその進行が止まった。

「何事だ!？」

バルシームは馬車の中から顔を出し、外の様子を見る。

優真達も同じように馬車から顔を出すと、馬車の前方に三人の人物が立ち塞がっていた。

「おう、この中にバルシームっていう奴がいる筈だ。大人しく渡しな。」

その中で一番大柄な男が野太い声でバルシームの引き渡しを要求した。

「お前達は誰だ!？」

バルシームがそう叫ぶと三人組の内の一人がバルシームを指差した。

「知りたいのなら教えてやろう。何を隠そう俺達は盗賊ギルド『山猫』のレオル・ソネット!」

「俺はアスダム・シング!」

「あたいはシムリー・リトル!」

「『三人合わせて……』」

三人組は各々好きなポーズを取る。

どんなポーズかはご想像にお任せしよう。

『やまねこさんおったい山猫三鶯隊！！！！』

ポーズを決め、満足そうな顔をしている三人組を呆然と見つめる優真達。

とりあえず優真達はバルシームを馬車の中に残して外に出る。

「で、お前等の用件って何だっけ？」

「だから、バルシームを大人しく引き渡せ。」

優真の言葉に一番大柄なアスダムと名乗った男がバルシームを指差す。

「何でだ？」

「依頼だ、理由は以上。」

アスダムはそれだけ言って優真を睨む。

優真はそんなアスダムを怪訝な表情で睨み返す。

「依頼の詳細とか何も聞かないのか？」

「依頼人が何を考えているのかには興味がない。依頼をこなして金を貰う、それだけだ。」

アスダム達は金さえ積み重ねれば殺しも請け負う。そんな態度だった。

優真はいつでも戦闘が出来るよう両手に魔導具を出して構える。

「大人しく渡すと思うか？」

優真は三人組を睨みつけて言い放った。

すると、レオルと名乗った男がふっと笑う。

「思っではない。こういう時の為にお前達がいるんだろ？ だって
ら……」

レオルは細身の長剣を出していきなり優真に切りかかってきた。

優真はとっさに白聖でその斬撃を受け止めた。

「お前達を殺してでも連れていく……！」

「くっ!!」

優真はレオルを弾き飛ばして体勢を立て直す。

「愛華!!リル!!馬車を守りながらこいつら倒すぞ!!」

「うん!」

「はい!」

山猫三人組はバラバラに散り、レオルの後を優真が、アスタムの後をリルが、シムリーの後を愛華が追いかけた。

.....

優真とレオルはお互いを見据えたまま対峙していた。

「さつてと、まずはお手並拝見。」

レオルは優真に向かって駆け出し、細身の長剣で次々と斬撃を繰り出していく。

優真はその斬撃を苦もなく二本の刀で捌いていく。

レオルは優真の反撃をバックステップで避け、一旦距離を取る。

「ふむ、やるねえ。じゃ、これはどうだい！」

レオルは優真との間合いを一瞬で詰め、その加速を利用した突きを放った。

「うおっ!?!」

優真は紙一重でその突きを横に避ける。

優真の後ろにあつた岩がその突きで粉々に砕け散った。

「うあー……」

あんなの食らったら一溜りもない。

優真もレオルから少し離れて様子を窺う。

「おいおい、本気出せよ。こっちは最初から結構本気出してんだから。もっと見せてやるよ俺と」うがっち『穿土』の力を。」

レオルの言葉に答えるようにレオルの魔導具が紫色に妖しく光る。

優真は気を引き締めて再び二つの魔導具を構える。

「行くぞ!!!」

優真はレオルに向かって駆け出した。

.....。

その頃、アスダムと戦っているリルは.....

「はあっ!!!」

「うおお!!!」

リルの放つ爆発する打撃をアスダムは巨大な斧型の魔導具で防いでいた。

リルは爆発でよろめいた所を空中に飛んで回し蹴りを放った。

だが、アスダムは再び魔導具で蹴りを防ぐとその爆発を利用して斧の柄でリルに高速の突きを放つ。

リルは柄を両手で掴むとアスダムの後方に飛んだ。

アスダムは振り向いて顎に手を添える。

「ふむ、動きも身軽で攻撃も重い、反射神経も中々、お前強いな。」
「それはどうもありがとうございます。」

リルはこの場にふさわしくない可愛らしい笑顔を向ける。

アスダムは不敵に笑うと魔導具を地面に突き刺す。

「どうだ？そっちのギルドを辞めて山猫に来ないか？ボスには俺から伝えよう。」

「ふふつ、申し訳ありませんが私は正規のギルドの一員じゃありません。一介の学生ですから。」

依頼人じゃないから正体バラしても別にいいだろうと思い、リルはそう言った。

リルの言葉にアスダムは驚愕の眼差しを向けた。

「ほう、学生でここまで戦えるか、ならば卒業後は是非ともうちに来てもらいたいものだな。」

「ふふつ、考えておきます。さて、続きをしましょうか。」

リルが拳を構えると、アスダムも魔導具を持ち直す。

「行きます!」

アスダムより先にリルが動き出した。

リルは素早くアスダムの懐に潜り込み腕を引く。

だが、リルが爆撃を繰り出す前にアスダムは魔導具を真上に掲げ振り下ろす。

「くっ……」

リルは撃つ対象をアスダムから魔導具本体に変え、拳を振り上げる。

魔導具と魔導具がぶつかり合った瞬間爆発が起こり、アスダムの魔導具は弾かれる。

その隙にリルは再び腕を引き、爆撃を放った。

「はああ!! 『烈炎滅閃』!!!」

「ぐあっ!!!?」

炎を纏った魔導具で今までの数倍の威力の爆撃を放つ。

アスダムは後方に吹き飛ばされるが倒れないで何とか踏ん張った。

「ぐっ、流石に解放しないときついかな……『ふうめいげき風凰戟』」

アスダムは魔導具を解放させる。

アスダムの魔導具は柄が長くなり刃も大きくなっていき、風を纏った。

「さて、ここからが本番だ。用意はいいか？」

「当たり前です！」

リルとアスダムは互いに向かって同時に踏み出した。

……。

一方、愛華はシムリーの攻撃を防ぎながら戦っていた。

「アハハハハ！そらそらどうした！？逃げ回ってばっかじゃつまらないよ！」

シムリーの武器は十本ほどある針状の魔導具で愛華に向かってそれを投げながら攻撃していた。

愛華は水と氷を駆使してその攻撃を防いでいた。

愛華は逃げながら反撃の糸口を探しているのだが、中々それが見つけられない。

シムリーの魔導具は防いでも弾いても勝手に持ち主の手に戻り、攻撃の手が止まらなかった。

そんな時、どこからか爆発音が聞こえてきた。

「おやあ？向こうでも何だかドンパチやってるみたいだね。」

そう言っている間にも爆発音が何度か響く。

「あれは・・・リルさん・・・」

昨日戦った時、何度も聞いたあの爆発音。

リルも頑張ってる、なのに自分だけ頑張らなくてどうする！

愛華は一度大きく深呼吸してシムリーに向き直った。

「ようやく戦う気になったのかい？それとも諦めたのかな？」

「・・・私は・・・あなたなんか絶対負けない！」

愛華の魔導具、氷魔水蓮が蒼く光る。

すると、辺りの温度が急激に下がっていく。

「さっむいねー、全く。でも、そうじゃなきゃおもしろくない。」

シムリーは両手に複数の針を構える。

「行くよ、『雷針』」

シムリーの針に電気が纏い、バチバチと音をたてる。

だが、愛華はそれに臆さず数本の氷柱を出現させ、シムリーに放った。

シムリーは向かってくる氷柱全てに針をなげて突き刺す。

「放て、『雷破』」

突き刺さっている針は一気に放電し全ての氷柱を破壊した。

だが、愛華は攻撃の手を休めず、今度は水弾を放つ。

シムリーはその水弾も針で横に薙いただけで簡単に打ち消した。

「黄雷相手に青水の攻撃するなんて倒してくださいって言うてるよ
うなもんよ。」

「あ……」

最初の頃、魔法の相性について教えてもらった事を愛華はすっかり忘れていた。

次からは愛華の攻撃は必然的に蒼氷だけになる。

「えいつ!! 『アイシングランス』!!!」

愛華は今度はシムリーの上空に針では捌ききれないほどの氷の槍を出現させた。

「いつけええ!!!」

大量の氷の槍がシムリーに降り注ぎ、土煙で姿が見えなくなった。

やがてだんだんと土煙が晴れていくとそこには無傷のシムリーの姿があった。

「う……そ……」

愛華はあまりの実力の差に腰が抜けて尻餅をついた。

よく見ると、シムリーを中心に針が円形状に地面に刺さっている。

「惜しかったわね、危ない危ない。」

シムリーは自分に向かってくる槍だけを針に溜めている雷で打ち落としていた。

「じゃ、次はこっちの番ね。」

シムリーは愛華の真上に針を投げる。

すると、針はより一層目に見えるくらいの電気を放ち始める。

『ライトニング』

針から愛華に向かって落雷が落とされた。

「きゃああああ……!……!」

まともに雷を食らい、意識が飛びそうになる。

愛華はそのまま仰向けにバタツと倒れた。

「・・・優・・・君・・・ごめん・・・ね・・・」

愛華は薄れゆく意識の中で、そう呟いた。

・・・。

「・・・雷？」

「よそ見していると死ぬぜえ！」

レオルは一瞬の間を見せた優真に切りかかる。

優真は白聖でそれを受け、黒禍で逆に反撃を仕掛ける。

だが、レオルはそれをかわしてまた距離を取る。

今の雷は気にはなるが今はこいつをどうにかしないと。

何だか嫌な予感がする優真は黒禍に魔力を込める。

『漆黒なる闇の調べ：斬罪』

優真は斬罪を発動させてレオルに切りつける。

直感的にそのまま受けるのは危険と判断したのかレオルは横に避ける。

斬撃を急には止められず、優真はレオルの後ろにあった木を斜めに切り倒した。

「ひえー、お前おつそろしいもん持ってんな。」

「そりやお互い様だ。」

優真はそのままレオルに向かって駆け出していく。

レオルは腕を引いて優真を見据える。

優真が間合いに入った瞬間レオルは高速の突きを繰り出した。

優真はそれを体を回転させ魔導具で受け流し、その回転を利用してレオルを切りつけた。

「つとお!!?」

レオルはギリギリのところまで後ろに飛んでかわし、再び間合いを取

る。

優真はそれを許さず直ぐに追いかけて、白聖で水平に薙いだ。

「くそっ！」

レオルはとっさに魔法で岩の壁を作り白聖の斬撃を止める。

「うおおおおー！！！」

優真は白聖の煌めく封印の光を発動させ、その岩の壁を打ち消す。

398

「なっ！！？」

「でりゃああああー！！！」

それと同時に振り上げていた黒禍をレオルに向かって切り下ろした。

「がああああー！！！」

レオルはそのまま膝をついてうつ伏せに倒れた。

「はあ、はあ……」

優真は魔導具を消し、疲れきった体を休めようとその場に座り込んだ。

なんとか、勝った……けど……

優真は今ひれ伏しているレオルの姿を見た。

「死んで……ないよな……」

斬罪で切ったとは言え、死に到るまで魔力を込めたわけではない。

「……ていつ。」

とりあえず優真はレオルの魔導具を斬罪で破壊した。

こうする事で魔導具が完全に治るまで時間が掛かるとジユンに教えられたからだ。

「何も殺す事はないもんな。さて……」

優真はさっきの雷が見えた方向に目を向ける。

「二人供・・・無事でいてくれよ・・・」

優真はその方向に向かって走り出した。

・・・。

「てやつ!!はっ!!!!」

「ふんっ!!ぬっ!!」

リルの爆拳と爆蹴をアスタムは風の斧で次々と防いでいく。

どちらも全くの互角。攻撃されては防ぎ、防がれては攻撃するの繰り返しだった。

「はあ、はあ、いい加減・・・はあ、やられて、下さい・・・」

「はあ、はあ、つく、そういう分けには、いかない・・・」

両方とも息も絶えだえで体力が限界に来ていた。

リルは大きく深呼吸をして再び戦闘体制に入る。

「そろそろお二人が心配になってきました。決めさせて頂きます。」

リルの魔導具が激しい炎を纏い、空気を焦がしていく。

それを見たアスダムも魔導具を構え風を纏わせる。

互いを見据えたまま二人は動かない。

その時、一陣の風が吹き、アスダムが先に動いた。

「うおおおお！！！」

アスダムの魔導具から目も開けられないくらいの激しい突風が吹き荒れる。

「行くぞっ！！『風刃乱舞』！！！」

無数に繰り出される斬撃から鋭い風の刃がリルに向かって撃たれる。

一振り、また一振りする度に斬撃を繰り出す数に応じて風の刃が数を増していく。

多くの風の刃が一斉にリルに襲いかかる。

「行きます！！！」

リルは襲い来る多くの風の刃を流れるように受け流していく。

「『流炎舞』から……」

リルは風の刃をくぐり抜け、アスダムの懐に潜り込み、両手をアスダムの体に当てる。

「『烈炎掌破』……!!」

そのままアスダムの体を押し出しながら両手を爆発させ、アスダムを吹き飛ばした。

「がああああ……!!」

リルの爆破によってアスダムは木を薙ぎ倒しながら最後は大木に打ち付けられて気絶した。

「や、やりました……」

へっへっとうと腰が抜けてその場に座り込むリル。

体のあちこちにできた傷に顔をしかめながら空を見上げる。

「はぁー、優真様と愛華様は大丈夫でしょうか……」
「おーい!」

そんな時、リルの後ろから声が聞こえてきた。

リルがそっちに振り向くと傷だらけの優真が走ってきていた。

「リル、大丈夫か!？」

リルの側に来るや否や、心配そうな顔でリルの顔を覗き込む。

「大丈夫です、ちょっと怪我しちゃいましたけど……」
「そうか、俺も傷だらけだ。さっさと愛華の所に行って治してもらおう。」
「はい。」

リルはゆっくり立ち上がり、優真はその体を支える。

ふと、優真は今は気絶しているアスタムを見た。

「……あれ、リルがやったのか?」
「はい、そうですよ。誉めてください」

あの巨体を一人で・・・未恐ろしいな、おい。

優真は顔を引きつらせながらリルの頭を撫でる。

「あ・・・えへへ」

リルは締めりのない笑顔を浮かべている。

一通り頭を撫でた後、優真とリルは優真が見たと言う雷の方へ向かった。

長い森を抜けた時、優真とリルが見たものは・・・

「・・・愛華・・・？」

「・・・愛華様・・・」

全身氷づけにされたシムリーと冷たい表情をした愛華だった。

優真は恐る恐る愛華に話しかける。

「愛華・・・大丈夫か？」

「・・・」

優真の言葉に愛華は冷たい表情のまま振り向く。

だが、優真にそんな表情を見せたのは一瞬で、愛華は突然倒れてしまった。

「愛華！！」

「愛華様！！」

優真とリルは直ぐ様、愛華に駆け寄り無事を確認する。

「・・・大丈夫、眠ってるだけ。」

「はあ、よかったです。」

愛華が無事と分かった二人は安堵のため息をつく。

「さて、詳しい話は後で聞くとして、これはどうすっかな・・・」

優真は全身氷づけにされているシムリーに近寄り、氷をぺたぺたと触る。

「うーん、とりあえず死んでなさそうだしほっといても大丈夫か？」

「優真様、とりあえず大丈夫そうですから、馬車に戻りましょう。」

「ああ、そうだな。」

優真は後で仲間が助けに来てくれるだろうと考えて、愛華を背負い馬車がある場所まで戻った。

.....

優真達がレナウンの町に着いたのは馬車が再出発してから一時間後の事だった。

応急措置はしたが一応病院で見てもらった方がいいとバルシームに言われ、バルシームを役所に送り届けてから優真達は病院へ向かった。

「うーん、この分だと帰りは夜になるかな。」

病院から出てきた優真は赤みを帯びている空を見上げて呟いた。

優真とリルはそれほど大きい怪我はしてなかったので治癒魔法でほとんどの傷は治った。

リルは報酬を受け取るため再びバルシームの元へ、愛華は病院のベッドでまだ眠っている。

「それにしても.....」

さっきの愛華は一体どうしたというのだろうか。

大方、またトランス状態になったんだろうけど。

・・・でも、何で愛華はあんな風になったんだろう。

いつからだっけ、愛華があんな風に怒るようになったのは・・・

そっだ・・・あの時からだ・・・

その時、道の向こうからリルが走ってくるのが見えた。

「優真様〜！報酬もらってきました〜！！」

「おー、ご苦労さん。」

優真は一旦思い出すのを止めて、リルから一枚の紙をもらう。

「これは？」

「小切手です。これを銀行に持っていけば換金してくれます。」

銀行・・・小切手・・・ねえ・・・

意外と優真達の世界と共通する事が多く、優真は少しばかり驚いた。

「とりあえず、愛華の所に行こう。目を覚まし次第、帰るぞ。」

「はい。」

優真は小切手をポケットに突っ込みながらリルと一緒に歩き出した。

・・・。

優真とリルが愛華の病室に入ると愛華は既に目を覚ましていた。

「愛華、もう起きてても大丈夫なのか？」

「・・・うん、もう大丈夫。」

ベッドの上で微笑む姿は意外と元気そうで、優真は安心した。

「なあ、愛華。お前どうやってあの女を倒したんだ？」

「え？・・・私が、やっつけたの？」

優真が気になっていた事を尋ねると、愛華は不思議そうな顔で首を傾げた。

怪訝な表情をして、今度はリルが愛華に尋ねた。

「私達が駆け付け付けた時には愛華様が既に敵を氷づけにしていました。・・・覚えていないのですか？」

「……私が……うん、全然覚えてない。」

愛華の顔は嘘を言っているようには思えない。

訳が分からず三人揃って首を傾げる。

「ま、いいじゃないか。結局全員無事だったんだから。」

「優真様は呑気過ぎます……。」

お気楽に言う優真にリルはため息をついて呆れる。

愛華はそんな優真を見て苦笑している。

「じゃあ、帰ろう。みんなもう帰ってきてるんじゃないか？」

「……うん、そうだね。早く帰りたい。」

「……はあ、わかりました。帰りましょう。」

特に気にしていない優真と愛華を見て、再びリルはため息をついた。

優真と愛華は馬車を呼びに、リルは愛華が目を覚ました事を病院側に告げに一度二手に分かれた。

「ねえ、優君……。」

病院を出てからいつもより一層寡黙になっていた愛華は唐突に

口を開いた。

「何だ？」

「……あのさっきの事なんだけど……」

「愛華は愛華だよ。昔の事は気にするな。」

優真は愛華の言葉より先回りして言った。

だが、愛華は目に涙を溜めて今にも泣きそうにしている。

「……でも、私があの時……」

「はいはい、ストップ。」

優真は愛華の頭を撫でてその先を遮った。

愛華は不思議そうに優真を見上げる。

「俺はずっと前から愛華を守るって決めてるんだ。それは今でも変わらない。だから、気にするな。」

「……うん、ぐすっ……ひっく……うん……ごめんね……
……ありがとう……」

優真は愛華が泣き止むまで、頭を撫で続けていた。

その後、後から追いついたリルと一緒に、馬車でリーザスに帰って

い
っ
た。

第十九話（前書き）

自身最多の執筆量になってしまった・・・つーか長いなこの話。

第十九話

優真達が依頼をこなしている頃と時を同じくしてジユンとレンは・
・

「何かこれから魔物退治に行くつてのにあんまり実感無いよな。」
「あつちに着けば嫌でもそう感じる事になると思いますよ。」

ゆらゆら揺れる馬車の中で暇そうにしているジユンを見て、レンはため息をつきながら言った。

今回ジユンとレンが請け負う事になった依頼はマラハ村という村の近くに突如現れた魔物の大群の討伐。

今は均衡状態が続いているが、いつ襲ってくるか分からないのだそ
うだ。

詳しい話は村に着いてからという事らしい。

「しかし、何でいきなり魔物が現れるようになったんだ？」

「さあ……でも相手は下級の魔物ばかりならなんとかかなりま
すよね。」

「……まあ、多分。」

ジユンは少し言葉を濁して渋い顔で頷く。

ジュンは、下級の魔物というところで不審に思う事があった。

「・・・それにしても、大群といっても下級の魔物相手にあそこま
で報酬は高くなるだろうか・・・この依頼、少しきなくさいな」

「あ、師匠。マラハ村が見えてきましたよ。」

ジュンが考えている間に馬車はどうやらマラハ村の近くまで来てい
たようだ。

「むう・・・」

「師匠、早く行きましょう。」

馬車の中で唸っているジュンの手をレンは引っ張って半ば無理矢理
村へ連れていく。

村の中へ入っていくジュンは、とりあえず何があってもれっちゃん
は守ろうとジュンは思った。

・・・。

ジュンとレンは予め指定されていた村長の家の前に来ていた。

使用人に導かれ、最奥の部屋に入るとそこには村長らしき白髪の老

人が座っていた。

「お初にお目にかかります。マラハ村村長、レード・ミングと申します。」

「はじめまして、精霊の翼のジュン・フォレスです。」

「同じく、レン・グラッドです。」

三人が一通り自己紹介を終らせた後、レードは本題に入った。

「さて、あなた方をお願いしたいのは村に現れる魔物の討伐です。」

「魔物はいつ現れるのですか？」

いつものふざけた態度から百八十度違うジュンがそう尋ねた。

レンは驚愕の眼差しで横を見ている。

「満月の夜、大量の食料と若い娘を差し出せと通告があり、さもないと村を襲うと通告がありました。」

「何！？若い娘！？それで魔物如きが毎晩ニヤンニヤンしてるというのか！！くっそお、なんて羨ましぶおっ！！？」

一人で勝手に妄想しているジュンにレンが黙って裏拳を放って黙らせた。

少しでも見直した自分がばかだったと、レンはため息をついた。

「えっと、満月っていったら今日の夜ですよ。どうしますか師匠、今から倒しに行きますか？それとも、夜まで待ちますか？」

「……一度、魔物の住処を確認してから決めよう。」

殴られた鼻を押さえながらジユンは立ち上がった。

ジユンとレンは村長から魔物の住処の地図をもらい、村長の家から出ていった。

……。

ジユンとレンは村を出て、まっすぐ西へ。

それからしばらくすると、崖が見えてきてその下にはいかにもといった感じの洞窟があった。

「あれか……」

「見張りはいませんね……」

ジユンとレンは洞窟から少し離れた所で覗いてみるが洞窟の前には見張りはなく、魔物一匹見当たらない。

二人はしばらくそうしていたが、全く変化がないのでとりあえず作

戦をたてよつと村の宿屋に戻った。

「どうしますか、師匠。夜まで待ちますか……って、どうしたんですか？」

ジュンが何か渋い顔をしているのを何事かと思い、レンは尋ねた。

ジュンは窓際に寄り村長の家を見る。

「……れっちゃん、どうも臭うぞ。」

「っ！？わ、私は何もしてません！……ていつか、女の子に何言っんですか！……？」

真顔で臭うと言われて急に怒り出すレン。

ジュンはキョトンとしていたが、やがてああ、と納得したよつに言った。

「違う、違う、この依頼が何だか怪しいって事。」

「そ、そうですね……でも、何でそう思っんですか？」

レンがそう聞くと、ジュンは懐からこのギルドで受けたこの依頼の紙を取り出した。

「これにさあ、報酬は三十万で敵は魔人以下って書いてあるだろ？常識から考えれば魔人以下の魔物の大群だからって三十万は多すぎる。」

「まあ確かにそうですけど……」

レンは依頼の紙をもう一度よく見てジュンの言葉に頷く。

よくよく考えればこんなにおいしい依頼を誰も取らなかったのは何故か。

それは報酬と依頼内容が不釣り合いな為、誰もが不審に思い手を出さなかったからだ。

さらにジュンはこの依頼をこなしていて怪しいと感じた事を挙げていく。

「それにさつき見た感じでは魔物は一匹も見つけられなかったのに魔人以下の魔物の大群と何故分かる？」

「そ、それは、前に襲われた時に……」

「小鬼と魔人の明確な違いは一般人には分からんだろう。それに魔物が群れを成すという事はほとんどない。」

少なくとも、一体以上の墮霊が指揮していると見た方がいいだろう。」

レンの表情が驚愕に染まっていく。

ジュンは目を伏せ、これまでかという風のため息をつく。

「……でも、全く手が無いわけじゃない。」
「え？」

打開策があると言うジユンにレンは一抹の希望を見た。

だが、ジユンは渋い顔をしたままでいる。

「……敵の大将を倒せば少なくともまとまりはなくなる。そこを
一気に攻めれば勝機はある。」

「じゃあ！」

「でもな……」

一瞬歓喜の声をあげそうになったレンをジユンは手で制して遮る。

「俺の今の實力から言って時間さえかければ墮霊の一匹くらいは倒
せる。だがその間、魔物の大群は相手に出来ない。」

「なら、私が……」

「無理。」

ジユンは一人で魔物の大群を相手にしようとしているレンをバツサ
リ切り捨てた。

レンは即答されたので少しへこんでいる。

「・・・じゃあ、どうするんですか？」

「そうなんだよなー、どうすっかな・・・」

ジユンは腕を組んで考えている。

だが、全く何も思いつかない。

いつものメンバーでならこんな仕事速攻で終るのだが如何せん二人しか居ない。

自分が墮霊を瞬殺すれば事足りるのだが相手は墮霊、そう簡単にいくとは思えない。

さて如何なもんかと考えていると、レンが真剣な面持ちで話しかけてきた。

「あの、師匠。やっぱりさっきの作戦がいいと思います。」

「いや、でもあれはれっちゃんが危険すぎるし・・・」

「大丈夫です。私はそう簡単にやられませんから。」

それは出来ないかと突っぱねるジユンだったが、レンの真剣な表情を見て改めて考え直した。

やがて決心したのか真っ直ぐにレンを見据える。

「分かった。でも、危険だと思ったらすぐ逃げろよ。」

「はい！」

「じゃあ、それを前提に作戦を説明するぞ。」

ジュンはこの後行う為に練った作戦をレンに説明し始めた。

扉の向こうにいる人物の気配に気付かずに・・・

・・・。

「準備はいいか、れっちゃん。」

「はい、大丈夫です。」

この日の夕刻、ジュンとレンは魔物の大群が通るであろう道の木の上に潜んでいた。

ジュンが考えた作戦、それは奇襲。

魔物の大群が通っている時にまず木の上からレンが遠距離攻撃を仕掛ける。

そして、混乱している最中でジュンが敵方の頭を倒すという作戦だ。

この作戦に失敗は許されない。もし頭を仕留められなければジュンは敵に囲まれ四面楚歌の状態になる。

「・・・れっちゃん。」

「はい？」

緊張している様子のレンにジユンはどこか弱々しく言葉を発した。

レンの方からはどんな表情をしているか分からない。

「もし、俺が……あー、やっぱ何でもない。」

「どうしたんですか、師匠。何か変ですよ？いつも変ですけど。」

「ひ、ひどいっ！！？」

ジユンは大袈裟にショックを受けたようなりアクションをしてレンと顔を見合わせて笑い合った。

ジユンは、もし俺が失敗したらその時は一人で逃げてくれと言いつうになったが止めた。

そんな事言っても一人で逃げ出すような娘ではない事くらい分かっていたから。

必ず、二人で帰ろうとジユンが思い直していた頃、夕日の向こうから巨大な黒い影が見えてきた。

「来たぞ。」

「……」

ジユンは紫電蒼牙を、レンは幻魔雷帝をそれぞれ出した。

「・・・聴け、我が声を。答えよ、汝が魂よ。ここに飛来せしは聖なる雷。」

レンは静かに呪文の詠唱を始めた。

その間にも魔物の大群は二人の前を通り過ぎる。その中に一つだけ雰囲気が違う馬車が通り過ぎた。

「あれだ、れっちゃん。俺が合図したら撃つてくれ。」

レンは魔法の精製に集中しながらもコクリと頷いた。

ジュンは自分のタイミングでカウントを開始する。

「・・・三、二、一、今だ!!!」

「『レイジングサンダー』!!!!!!」

レンが空に魔導具をかざすと天空から暴れ狂う無数の落雷が落ちてきた。

それと同時にジュンは高く飛び、頭上に掲げた魔導具を思いきり馬車に叩きつける。

魔物達が落雷で混乱している最中で破壊音が響く。

「な……に……?」

ジユンは驚愕に染まった表情を見せた。

ジユンが破壊した馬車の中には何もいなかった。いつの間にかレンの魔法も既に収まっている。

「ハーツハツハ、まんまと罠に掛ったな人間よ。」

不意にジユンの背後から響いてくる笑い声。

ジユンはゆっくりと振り返ってその姿を見る。

そこには黒いマントを体に包んだ吸血鬼のような魔物がジユンを見据えていた。

「お前が、こいつらの親玉か?」

「ああ、そうだ。お前……と、もう一人の小娘は私達を討伐しに来たギルドの人間だな?」

バれている……ジユンとレンがギルドの人間である事とレンもいる事が。

何故だ？特に話してもいない、レンは姿さえも見せていないと言っ
のにどこでバレた？

「何故だ、という顔をしているな。少し考えれば分かる事だろう。」

そこでジューンはある一つの仮説に行き着いた。

こっちに来てからずっと疑問に思っていた事。

「そうか・・・村人もグルって事かよ。」

「御名答。村は既に私達の配下にある。」

ジューン達が村に入ってから、正確には村長の家を出た辺りから既に
二人は村人につけられていた。

村に來た事や偵察に來た事、作戦を話していた事も逐一この吸血鬼
に報告されていた。

どうりで失敗するわけだ、とジューンは内心納得していた。

「俺等を誘き出してどうするつもりだ？」

「私達魔物はねえ、魔力を持った人間が大好物なんだよ。若ければ
若いほど、その中でも女の肉はまた格別。」

涎でも垂らしそんな顔でそう言う吸血鬼にジューンは背筋がゾゾッ

となった。

「あ、生憎と俺は食っても美味くねえぞ！あ、でもれっちゃんを食いたいと言う気持ちは分かる。違う意味で。」

ズコツとレンは人知れず木の上でコケた。

額に赤い顔で今にも飛び出しそうになるのを必死で堪える。

「わざと高額な金額を示し、それに食い付いた魔導士を村人を利用して今まで食ってきたって分けかよ。」

「その通りだ。さて、お喋りはここまでだ。お前は直々に私が食ってやるとしよう。あの娘は・・・お前達にやろう。やれ。」

吸血鬼の合図で数十体の魔物がレンのいる木に群がってきた。

レンはパニックに陥ってまともに魔法が使えていない。

「きゃあー！きゃあー！こないで下さいー！ー！」
「れっちゃん！？」

ジユンは慌ててレンの元に向かおうとするが吸血鬼が前に立ちはだかる。

「お前の相手は私だと言ったはずだが？」

「くそっ！邪魔だテメエ！！」

ジュンは魔導具で相手の足を払うが、吸血鬼は軽々と飛んで避ける。

ジュンは振り払った魔導具の回転を利用し、自身も回転しながら今度は胴に斬撃を放つ。

だが、斬撃は吸血鬼の右手で安々と掴まれ、防がれてしまう。

ジュンは一度バックステップで吸血鬼と距離を取る。

「れっちゃん！反撃しろー！！」

「ふえ・・・つく・・・そ、そんな事言われても・・・」

近付くのは無理と判断したジュンは、レンに反撃しろと大声を出す。

だが、レンは半ベソをかいて震えている。

自分でも分かっている。このまま何もしなければ後は死んでいくだけだと。

だけど、そんな意思とは裏腹に体が言うことを聞かない。

それでもジュンは声を張り上げる。

「お前は！立派な魔導士になんたる！！」
「立派な・・・魔導士・・・？」

立派な魔導士。レンはその言葉で体の震えがピタツと止まるのを感じた。

幼い頃からの長年の夢。漠然的だが、ずっとそれを目指して来た。

「こんなところで立ち止まってんじゃねえ！！意地を見せる！！レン・グラッド！！！！」
「・・・」

ジュンの言葉に背中を押されたレンはすっと立ち上がり、頬を両手でパアンと叩いた。

その目にはもう恐怖や戸惑いはない。

「ありがとうございます、師匠。もう迷いません。」
「おお、頑張れ。」

二人は敵の目の前だというのに互いに互いに笑い合った。

「帰ったらたくさんご奉仕してあげます。」
「うおっ、まちで！！？ク　とかパ　とかしてもらうぞ！！！！？」
「し、師匠！！！！？」

「ハツハツハ、冗談だつとお!？」

朗らかに笑っている時に吸血鬼が鋭い爪で切りかかってきた。

ジューンはそれを魔導具で防ぐと蹴りを放って吸血鬼を吹っ飛ばす。

「おいおい、人様の楽しい会話中に不意打ちとは紳士じゃねえなあ。

「
「煩い、戦闘中に話などする方が悪い。」

そりゃごもつとも、とジューンは再び魔導具を構える。

レンは呪文の詠唱しながら器用にも隣の木に飛び移った。

「さて、あつちはしばらく大丈夫そうだし、こつたは全力でお前を倒させてもらっぜ。」

ジューンは右手に紫電蒼牙、左手に蒼陣烈火を構える。

辺りには雷がほとばしり、炎が舞い踊る。

「見せてやるぜ。俺の力の前にひれ伏しやがれ。」

ジューンは一瞬で間合いを詰め蒼陣烈火で斜め上に切り上げる。

吸血鬼はその一閃を後ろに飛んで避けるが炎がその黒いマントを焦がす。

「ふむ、俺の『紫』が効かなくて『蒼』が物凄く効く。お前、色は『緑』だな。」

「ふん、それがどうした。そんな事はハンデと思えば造作もない事
！！」

吸血鬼はそう言うと拳と蹴の高速連続攻撃を繰り出してきた。

ジユンはそれらの攻撃を紙一重でかわしていく。
時には魔導具で受けて、時には腕で受け流して、だが相手も時折爪で切り裂いてくるので油断は出来ない。

やがて捌ききれず、少しずつ後ろに後退していく。

「くっそ、速えなあおい。」

やはり腐っても墮霊。全く隙がない。

ジユンはちらっとレンを横目で見た。

レンは木に飛び移りながら魔法で敵を撃破していく。

だが、最早その顔には余裕がない。

「だあつ!!」

気合一閃　右腕から放たれた打撃を紫電蒼牙で弾き、吸血鬼の腹部に蹴りを入れる。

吸血鬼がよろめいた所でジューンは紫電蒼牙の猛烈な突きを放つ。

だが、吸血鬼はすんでの所で足を蹴り上げ弾き飛ばし、紫電蒼牙が手から離れる。

刹那、体重を乗せた拳がジューンの顔を打ち抜いた。

「ぐっ……」

とっさに顔を引いたが顎を打ち抜かれた為、目の前の世界が揺れる。

ジューンは地に膝をつき蒼陣烈火で体を支える。

「どうした、人間。その程度か？」

「……うる……せえっ!!」

ジューンは意識を強く持って敵を見据える。

転がっている紫電蒼牙を一度消し、蒼陣烈火を両手で構える。

その瞬間、辺りの気温が上昇しその刀身には蒼い炎が宿る。

「覚悟しやがれ!!」

ジュンは駆け出し、吸血鬼に向かって袈裟切りに振り下ろした。

だが、その刃は空を切り、地面に突き刺さる。

どこへ、と思った時には背中に衝撃が走り目の前に地面が迫っている。

「がっ……」

地に打ち付けられた時に口の中を切ったのか鉄の味が広がる。

振り向くと吸血鬼が右手をジュンに向けて見下ろしていた。

「覚悟するのはお前の方だったな。」

その右手には黒い、漆黒の球体が電気のような物質をほとばしっている。

魔雷まらい それは墮霊以上の魔物に許された力。

魔雷というだけあって雷はもちろん、使い手によっては炎や水、剣のような物体にも変化が出来る。

ジュンの目の前に迫っている球体がだんだんと槍のような物体に変化していく。

「・・・それで俺を貫こうってのか？」

「案ずるな、痛みはない。・・・最後にお前の名を聞いておこうか。」

何をどう思ったのか吸血鬼は急にそんな事を聞いてきた。

ジュンはニヤリと笑い、目の前の敵を睨みつける。

「俺は、ジュン・フォレスだ。」

「そうか、覚えておこう。」

その言葉を合図にジュンの胸に槍が突き刺さった。

槍はその役目を終え、その姿を消した。

「な……に……」

「なんちゃって」

槍が消えたと同時に貫かれたジュンの姿も消え去った。

吸血鬼の顔が驚愕に染まった時にはもう既にその首に蒼陣烈火の刃が当てがわれていた。

「……何故だ？」

「塵気楼って知ってつか？ 辺りの気温が一定以上になると幻覚が見えるんだ。」

吸血鬼はそうか、と呟き納得したかのように目を閉じた。

「じゃあな。強かったぜ。」

ズパツと何の躊躇いもなくジュンは吸血鬼の首と体を分断した。

地面に転がった吸血鬼の死体は血も出ずにやがて灰となって消えていった。

「さて……」

ジユンは今もまだ戦っているレンに目を向けた。
よく堪えたと褒めてやりたいくらいだ。

「よし、『神炎』」

蒼陣烈火の纏う炎がより一層激しさを増していく。

ジユンは蒼陣烈火を中段に構え、腰を深く落とした。

「『神炎滅霊閃』！！！」

蒼陣烈火の炎が巨大な炎の刃と化し、ジユンはそれを真横に振り抜いた。

その巨大な炎の刃は魔物達を一瞬で灰と化し、木々をも倒し、辺りを火の海と成した。

「わわわわ！！？」

木々を倒す、という事は必然的にレンがいる木も倒れる事になる。

「いっしょ。」

「きゃっ!?!」

木が倒れる寸前の所でジユンはレンを抱き上げ空中に高く跳躍した。火の海と化した森に取り残された魔物達は言うまでもなく火だるまになる。

『グルアアアアア!?!?!』

森に魔物達の苦しみの声が響くがやがて全ての魔物が灰と化し、消えていった。

「師匠……」

「何だ？」

未だジユンの腕に抱かれたレンが見上げる。

「手がワキワキしてますけど。」

「そっだな。」

特に何も考えずにジユンは即答する。

「顔がだらしなくなってますけど。」
「そうだな。」

再びジュンは先程と同じように即答する。

レンの目がだんだんとジト目になっていく。

「いつまで抱っこしてるんですか！いい加減下ろしてください！」

「ちえっ……」

ジュンは名残惜しそうにしながらもしぶしぶレンを下ろす。

レンは魔力の使いすぎがよろめきながらもしっかりとした足取りで立つ。

「……何だか、悲しいですね……」
「仕方ないさ、村の人だって本意じゃなかっただろうし。」

レンは悲しそうな顔で頷いて、目の前の火の海を見つめた。

ジュンは全ての魔物がいなくなったのを確認すると、火の海に向かって歩き出した。

「さつてと、鎮火、鎮火〜。」

「消せるんですか？」

「まあね、昔この除去魔法覚えなくて火の魔法使いまくったことがあって、そんな時がめっちゃ大変だったからさー。」

ジューンはどこか遠い目をしながら蒼陣烈火を出すと、片手で印を切り出した。

それが終わって、開いた片手をぐっと握ると火の海がまるでなかったかのように消え去った。

「じゃあ、囚われのお姫様達を救出しに行きますか。」

「はい。」

.....

ジューンとレンは早く助けてあげようと足早に洞窟の前まで来た。

二人が洞窟に入ろうとした次の瞬間

「危ねえ！！！」

「え？」

ジューンはとっさにレンを小脇に抱えて後ろに跳んだ。

すると、今まさに二人がいた場所に隕石でも落ちたような穴ができていた。

「いい反応だな。」

近くにある木の上から声が聞こえてきた。

そこには二足歩行で狼のような出立ちの魔物と思われる人物が立っていた。

「お前、あの吸血鬼野郎の仲間か？」

「吸血鬼？ああ、ダンテの事か。まあ、仲間と言えるものではないがな。」

ふん、と鼻を鳴らして狼男は下に飛び下りた。

ジューンはレンを背に隠し、いつでも戦えるようにしておく。

「お前達がここにいるという事はダンテは殺されたのか。」

「ふん、敵討ちか？」

ジューンがそう言うと狼男は大袈裟に肩をすくめた。

「まさか。奴がどこで死のうが生きようが俺には関係がない。」
「なら、お前は何が目的だ？」

狼男は魔雷で両手に鋭い鉄の爪を形成させ構えを取った。

ジユンもそれを見て紫電蒼牙を出現させる。

「俺の目的は強い奴と戦い、勝利し、その肉を喰らうことだ。どうやらお前は強そうだな。」

「そいつぁ、どうも。……れっちゃん、これ持って先に人質助けてやってくれ。」

ジユンは懐から紙に包まれた丸い物をレンに手渡した。

レンはそれをまじまじと見つめている。

「これって……リースさんに渡してた飴じゃないですか？」
「そう、魔々ネット田中で大量購入した魔法の飴。中にまだ敵がいるかもしれないから戦闘になったらそれ舐めて。」

はぁ、とよく分かっているがとりあえずレンは頷いた。

ジユンはそれに満足してレンに笑いかけると、今度は真剣な表情をして狼男に向き直った。

「行くぞ!!」

ジュンは掛け声を出して狼男に突撃していった。それと同時にレンも洞窟の中へ駆け出した。

ジュンの振りかぶった一撃を狼男は両手の爪で防ぐ。

「一つ聞かせる。」

「何だ？」

ギリギリと槍を爪が受け止めた状態のまま、ジュンは聞いた。

「あの中にお前や吸血鬼野郎のような堕霊はいるのか？」

「ふむ、そうだな。確かにもう一人俺達と同じ堕霊がいるな。」

ジュンが一瞬渋い表情をしたのを狼男は見逃さなかった。

「あの娘が心配なら行かせるべきではなかったのではないか？」

「心配はしてねえよ。あの娘はなんてったって俺の弟子なんだからな。」

とは言っても、ジュンでさえ苦戦を強いる相手をレンが倒せるかど

うかは微妙だった。

だが、レンに持たせたあの飴、あれを使えば今のレンならば一時的に墮霊以上の力が出せるだろう。

問題はその時間。その効力が続く時間は限りなく短い。

その中でどう無駄なくレンが敵を倒せるかにかかっている。

「ふっ！」

「ぬう・・・」

ジユンは考えるのを止め、力で狼男を弾き飛ばした。

紫電蒼牙に魔力を込め、バチバチと電気を走らせ威圧するかのよう
に頭上で回転させる。

「でやああ!!!!」

回転させた紫電蒼牙を狼男に向かって袈裟切りに切り下ると、雷
の斬撃が地を走る。

「はっ!!!!」

狼男は避けもせず真正面から受け止めて斬撃を打ち消した。

お返しとばかりに狼男は爪を振り上げ地に三つの斬撃を走らせる。

「にゃろっ!!」

ジュンは左に転がりその斬撃を避け、体を伏せた状態から魔力を練る。

「『サンダーボルトランス』!!!」

かざした手の平から雷の槍が形成され、狼男に放たれる。

だが、狼男は高く跳躍し雷の槍をかわすと、爪を振り上げジュンに向かって落ちてくる。

「うおっとお!?!」

ザシュツ、と爪が地面に突き刺さる。

すんでの所でジュンは紫電蒼牙を地面に突き刺し空中に逃げる。

直ぐ様、抜いた紫電蒼牙で狼男に向かって叩きつける。

しかし、狼男は後ろに跳んでその打撃を避ける。
一進一退の攻防、今のところ実力は全くの互角。

「ふっ、やはり貴様は強い。ここまで心踊る気分は久しぶりだ。」
「本気出してないくせによく言う。俺も全力でやるから本気出せ。」

ジュンがそう言って左手に蒼陣烈火を出すと狼男は不敵に笑った。

次の瞬間、狼男の姿が目の前から消えた。

『雷走』

それに続くようにジュンも雷走を発動させて後を追う。

ここからは常人には何が起こっているのかわからないだろう。

ただ、お互いの武器のぶつかり合う音が響くだけ。

だが、だんだんとジュンの動きが狼男に劣ってきた。

「があっ！！？」

動きが鈍ったところで蹴りを入れられジュンは木に体を打ち付けられる。

「げほっ、ごほっ……」
「五回だ。」

体をくの字に曲げて咳き込んでいるジユンの前に、狼男が現れる。

「俺の斬撃、打撃合わせて五回貴様の体に叩き込んだ。ここまで防がれたのは初めてだ。」

「げほっ……そうかよ……」

高速の戦闘の中でジユンはかなり健闘したのだが、攻撃は当たらず狼男の左手の爪を壊すくらいしか出来なかった。

「最後にお互いの名を名乗ろう。俺はウルフォス。」

「けっ、今の魔物は仕留める時に名乗るのがブームなのか？」

「ふっ、さあな。」

ウルフォスは右腕を引いていつでも突き刺せる体勢に入る。

ジユンが名乗ったらすぐに貫くつもりなのだろう。

「俺は、ジユン・フォレスだ。」

「記憶した。さらばだ。」

ヒュツと音をたててジュンに迫る鉄の爪。

ジュンは左手に持つ紫電蒼牙をギュツと握り締める。

(ああ・・・今からこれ振っても間に合わねえな。)

迫り来る爪の動きがスローモーションに感じる。

(この魔法、使えねえと思ってたけど・・・これ修得してなかったら死んでたわ。)

ジュンの口から魔法の呪文が紡ぎ出される。

『マグネリア』

ジュンがその魔法を発動させると突然、ウルフォスの爪が標的をジュンの隣の紫電蒼牙に移した。

「なに!!?」

「俺の勝ちだ、ウルフォス。」

がら空きのウルフォオスの体を蒼陣烈火が貫いた。
そして魔力を込め、炎を噴出させる。

「グレアアアアア！！！！」

突き刺されたウルフォオスは燃えながら雄叫びを上げ、灰となって消えていった。

マグネリアは超磁力の魔法。自分の魔導具を強力な磁石に変えて金属は引き寄せられる。

「意外なところで使えたな。」

既に魔力が空になったジユンは夜に変わろうとしている空を見上げて寝転がった。

「あー、流石に、墮霊の二連戦はきつかったー。」

すぐにもレンを助けに行きたかったが、思うように体が動かない。

「れっちゃん、死ぬなよ。」

動けないジューンはもう祈る事しか出来なかった。

.....。

ジューンとウルフォスが戦闘を始めた時、レンは暗い洞窟の中をただひたすらに歩き続けていた。

「うっ、暗いですっ、不気味ですっ・・・」

レンは拳動不審で辺りを見回しながら進んでいく。

すると、奥の方からだんだんと光が見えてきた。

「明かり？人質はここにいるんでしょうか・・・」

レンは身を隠しながら明かりの方をそっとうかがう。

レンが見たのは異様に広い空間。その中央にはテーブルがいくつもあり、周りにゴミが散らばっていた。

そしてさらにその先には巨大な鉄格子。目を凝らして注意深く奥を見ると数人の女性が中でぐったりしているのが見えた。

レンは周りに敵がない事を確認して素早く牢屋に近づいた。

「大丈夫ですか！？今鍵を開けます！えーっと・・・」

レンはどこかに鍵がないか探してみる。

だが、テーブルの上にも床にもどこにもそれらしき物は見当たらない。

「お探しの物はこれかな？」

「っ！？」

突然、レンの背後から声が聞こえてきた。

レンは驚いてすぐに振り向くと、人の形をした鳥獣のような魔物が目の前に立っていた。

「あなたは・・・」

「はじめまして、私はレウラと申します。」

レウラと名乗った鳥人は恭しく頭を下げた。

レンは幻魔雷帝をレウラに向けて警戒しながら様子を窺う。

「さて、あなたの目的はお嬢様方を助け出すことですね？でも、この方達がいなければ私達が餓死してしまうのです。ここはどうか退いてはくれませんか？」

物言いは丁寧だが思いつきり上から見下している態度にレンはむっとした。

それにここで人質を見捨てて退くレンではない。

「できません！大人しくその鍵を渡しなさい！！」

「・・・交渉決裂ですね。仕方ありません。」

レウラはゆつくりと手を上に掲げる。その手から火の玉が魔雷によって形成される。

レンも幻魔雷帝に魔力を込める。だが・・・

「あれ・・・？」

いくら魔力を練ろうとしても幻魔雷帝は何も反応を示さない。

いつもなら魔力を練ろうとすると魔導具が緑色に輝くのだが、今は輝くどころか逆に魔導具自体が消えそうになっている。

「おや、どうやらここにたどり着く前に随分と魔力を消費したようですね。魔導具本体を維持するだけで精一杯のようです。」

先程の魔物の大群との戦闘でレンの魔力はほとんど底をついていた。そもそも全快でも墮霊には敵わないというのにこんな状態では勝負にもならない。

レンの額から冷や汗が流れ落ちる。

「では、死んでいただきましょうか。」

「あ……」

そうだ、あの飴。師匠から貰ったあの飴を……

そう思った時にはもう既にレウラの火球が目の前にまで迫って来ていた。

「あつっ!!んっ……」

レンはギリギリで何とかかわすが、足に擦り火傷の痛みで顔をしかめる。

「避けましたね、でしたら次はどうでしょう。」

レウラが再び手の平の上に火球を出現させる。

しかし、今度のは初発とは比べ物にならないほどその質量を増していく。

レンは痛みを堪えながらポケットの中をまさぐる。

「あれ……ない……ない……」

身体中のどこを探しても魔法の飴が見つからない。

焦って辺りを見回してみるとレンの後方一メートル程の所に落ちていた。直ぐ様取りに行こうと立ち上がるが、足の痛みで上手く立ち上がれない。

「では、今度こそ死になさい。」

レウラの手がレンに向かって振り下ろされる。

すると、限界まで大きくした火球がゆっくりとレンに近づいてくる。

「あと……もう少し……」

レンは手を伸ばして魔法の飴を掴み取る。

レンが飴を口に入れたと同時に巨大な火球が襲いかかり火柱が上がる。

「ふふふ、魔法使いの丸焼きのかんせ……ん？」

レウラは不意に違和感を感じて横に跳ぶ。

すると、火柱の中から雷の槍が今レウラの体があった場所を貫いた。

「しづといですね……」

レウラが苦々しく呟くと、火柱の中から軽い火傷を負っただけのレンが歩み出てきた。

その手に持つのは綺麗な緑の光を放つ幻魔雷帝。

「力が……魔力が湧き上がってきます……」

その言葉に反応するかのように幻魔雷帝の光がより一層強くなる。

ふと、レンは握ったままの飴の包み紙に何か書いてあるのに気が付いた。

「えっと、この飴には心を落ち着かせるリラックス効果があります。」

確かにあれなら納得です・・・

レンはこの飴を貰った時のリースの豹変ぶりを思い出していた。

「それに加え、魔力の回復と一時的に魔力の増加の効果が見れます。但し効果は五分間。・・・なら、早く倒さなきゃなりませんね。」

レンは包み紙をポケットにしまい、幻魔雷帝をレウラに向ける。

それを見たレウラは、また澄ました表情に戻る。

「火あぶりが串刺し、どちらか選ばせてあげましょう。」
「どっちもお断りです!!! 『サンダーボルトランス』!!!!!!」

レウラに向けている幻魔雷帝の先から無詠唱の雷の槍が放たれる。

レウラにはすんでのところで避けられたが、速度、威力共に格段に上がっている。

時間はあまりありません　　レンは直ぐ様次の魔法を発動させる。

「舞え雷、切り裂け雷。その舞いは全ての者を魅了し、その剣は敵の四肢を切り刻む。」

「二重詠唱!？」

二重詠唱　二つの魔法の詠唱を一つに繋ぎ合わせ、同時に発動させる高等術式。

未熟者が無理に二重詠唱を行おうとすれば魔法は発動せず暴走の危険さえあるが、今のところレンは上手く制御している。

この術式を知識としては知っていたが、まさか自分が出るとは思っていなかった。

ただなんとなく出来そうな気がしたからやってみた、というレンにしては何ともいい加減な気持だった。

そう思わせるだけの力が、あの飴にはあったのだらう。

「『ダンシングボルテックス』!!『サークル・ライティングブレード』!..」

レンは目の前に電気を帯びた球体とレウラの上空に六本の雷の剣を出現させる。

雷の玉は縦横無尽に駆け回り、六本の剣はその切っ先をレウラに向ける。

レウラはそれらを無視して本体であるレンに襲いかかった。

「ハッ!!」

「行け。」

レウラが剣を出現させ、レンに切りかかるようにするが、レンの一言で雷の玉がレウラの横っ面を貫いた。

「ぐっ……がっ……」

目にも止まらぬ速さで次々とレウラにダメージを与えていく。

致命的な傷は負わせられないものの、反撃の隙を全く与えない。

「落ちろ!!」

雷の玉がレウラを殴打している中で上空に待機している六本の剣が一気に襲いかかった。

「ゲアアアアア!!」

土煙が上がりレウラの姿が見えなくなる。その土煙が晴れてくると、

そこには剣に貫かれ血まみれになるレウラの姿があった。

「次で、終りです。」

再びレンの周囲に凄まじい程の魔力が立ち込める。

レウラは血走った目でレンを睨みつけた。

「な、舐めるなああああ!!!」

レウラは両手をレンにかざす。すると、そこから最初は小さな火球だったが、次第にその部屋を埋め尽すほど巨大な火球に巨大化した。

それを見たレンはかなり焦った様子を見せる。

「あ、あの、そんなの放つたらあなたも死んじゃいますよ?」

「アアアアアア!!!」

既に頭に血が上っているのかレンの言葉は届かない。

その間にもさらに火球は巨大化を続ける。

レンは幻魔雷帝をその巨大な火球に向けて限界までの魔力を込める。

「人質の人達は死なせません！絶対に止めて見せます！！」

幻魔雷帝が緑色に光り輝きレンは目を瞑り詠唱を唱え始める。

「叫べ、轟け。現世うつしよの門の場に我はあり。隠世かくりよの門の場に汝あり。
響け、神の咆哮ほうこう。」

レウラの足下に巨大な緑色に光り輝く魔法陣が現れる。

「『ダイバインエクスクレイム』！！！」

魔法陣がより一層輝き凄まじい轟音を上げながら巨大な雷がレウラを巻き込み天へと昇る。

レウラの巨大な火球は雷の威力の前に消滅。

レウラも雷の中で灰も残さず消えていった。

「はあ……はあ……」

レウラが消えたところで丁度五分。レンの中の魔力と幻魔雷帝は消え去った。

「か、勝ちました〜。」

先程のレンの魔法で部屋の上には星が瞬く空が見えるようになって
いる。

レンは疲れている体に鞭打ってレウラがいた場所に落ちていた鍵を
拾い牢屋の扉を開いた。

「皆さん、助けに来ました。早く村に帰りましょう。」

ぐったりしていた人質の娘達も帰れるという言葉に歓喜し、一人、
また一人と牢屋から出ていく。

最後の一人が出ていくのを確認したレンはよろめきながらも外に向
かって歩き出した。

・・・。

「れっちゃん！無事だったんだな！！」

「はい、なんとか・・・。」

ジユンは洞窟から出てきたレンに直ぐ様駆け寄りレンの顔を覗き込
む。

レンは心配いらないう風笑顔を見せるが明らかに疲れた顔をしている。

「あ、師匠。飴ありがとうございます。お陰で助かりました。」

「ああ、とりあえず洞窟内での話は後にして今は村に戻ろう。あの村長を問い詰めねえと。」

「そうですね、あ……」

突然レンの体がぐらっと傾いて慌ててジュンが支える。

「どうした！？大丈夫か!？」

「あはは……ちょっと疲れすぎちゃったみたいで、足に力が入りません。」

ジュンに支えられて何とか立っているが、レンの足はガクガクと震えている。

ジュンは何だか妙に嬉しそうな顔でレンに提案した。

「れっちゃん、おんぶとお姫様抱っこ、どっちがいい？」

「ふえ!？な、何を言ってるんですか、師匠!!」

「だってしょうがないじゃん。れっちゃん立てないんだし。」

「う……それはそうですね……」

いつものようなエロ顔なのだが、正論なのでレンはあまり強く拒否できない。

ジュンは渋るレンにしびれを切らしたのかレンの背中と膝の裏に手を添える。いわゆる、お姫様抱っこというやつだ。

「あ、ちょっと師匠！まだいって言ってません！！」

「いいじゃん、いいじゃん。さつきだつて一回やったんだし。」

「う・・・それもそうなんですけど・・・」

それでもやはり恥ずかしいのかレンは赤い顔してうつむつてしまう。

「はいはい、文句は後で聞きますから今は言う通りにして下さい、お姫様。」

「う、ううー・・・」

それから村に帰るまでレンは終止赤面しっぱなしだった。

・・・。

動けないレンを宿に連れていった後、ジュンは村長の家の前まで来ていた。

レンに暴力を振るっちゃ駄目ですよと言われたので荒っぽい事は
応ずるつもりはない。

少ししてジューンは村長の前にまで案内された。

「村長、依頼通り任務を達成してきましたが、少し聞きたい事があります。」

「……………」

「聞いてんですか、村長。」

「申し訳ありませんでした！」

いきなり床に手をつき土下座をする村長に流石のジューンも戸惑いを
隠せなかった。

「人質の為とはいえ、あなた方を差し出すような真似をしてしまっ
て……………」

「あー、まあ、仕方なかったかもしれないですからもういいです
よ。人質も無事帰って来たんだし……………」

土下座までされたら同情するしかなく、さっきまでの怒りがどこか
に行ってしまった。

それでも村長は頭を上げようとしなない。

「とりあえず村長、頭を上げて下さい。」

ジユンの言葉にようやく顔を上げる村長。

ジユンは溜め息をついて報酬の話に入る。

「それで、報酬の事なんですが・・・」
「分かっております。こちらに。」

すっと一枚の小切手をジユンに手渡す村長。

一応その額を確認してみるとその顔が驚愕に染まる。

「いや、これは・・・何でこんなに高額になってんですか？」

ジユンが受け取った小切手に書かれていた額は三十万ペルセスから五十万ペルセスにまで引き上げられていた。

「それは謝罪料も入っています。どうか受け取っていただきたい。」
「いや、でも三十万でも十分高いのに・・・」
「それとこちらを。」

そう言って村長は今度は高価そうな箱を取り出した。

村長はそれを開けると中には一冊の魔導書が入っていた。

「これはあれですか。村に代々伝わる秘宝というやつですか。」
「まあ、そうだと思います。構いません。これも報酬として受け取っていただきたいのです。」

ジユンはその魔導書を手にとってしげしげと眺める。

見たところ普通の魔導書のようにだが秘宝だと言った限りは単なる魔導書ではないのだろう。

「これでどうか御許しを願いたい！金額が足りないとおっしゃるのでしたらもつとお出します！」

「いや、だから三十万でも十分高いんだって……」

「でしたらこれでどうかお願い致します！」

「……………」

……………。

「結局押しきられてしまった……………」

ジユンの手には五十万ペルセスの小切手と魔導書。

とりあえず依頼は達成したのでギルド側からとやかく言われる事はないだろう。

「ま、どうせ明日からはしがない学生だし報酬は有効に使わせてもらうとするか。」

そんな事を考えている内にジューンは宿の前まで来ていた。

ジューンが宿の中に入ると既にレンが荷物をまとめて受付の所に立っていた。

「れっちゃん、もう動けるようになったのか？」

「はい、もう大丈夫です。今、馬車の手配をしたのでしばらくここで待っていきましょう。」

「おう、了解。」

ふと、レンはジューンが持っている魔導書に気がついた。

「師匠、何ですかその魔導書。」

「ああ、これは……」

ジューンは村長の家で起こった出来事を事細かくレンに説明した。

見たところ普通の魔導書のようにだが秘宝だと言った限りは単なる魔導書ではないのだろう。

「これでどうか御許しを願いたい！金額が足りないとおっしゃるのでしたらもっとお出します！」

「いや、だから三十万でも十分高いんだって……」

「でしたらこれでどうかお願い致します！」

「……………」

……………。

「結局押しきられてしまった……………」

ジュンの手には五十万ペルセスの小切手と魔導書。

とりあえず依頼は達成したのでギルド側からとやかに言われる事はないだろう。

「ま、どうせ明日からはしがない学生だし報酬は有効に使わせてもらうとするか。」

そんな事を考えている内にジュンは宿の前まで来ていた。

ジュンが宿の中に入ると既にレンが荷物をまとめて受付の所に立っていた。

「れっちゃん、もう動けるようになったのか？」

「はい、もう大丈夫です。今、馬車の手配をしたのでしばらくここで待っていきましょう。」

「おう、了解。」

ふと、レンはジユンが持っている魔導書に気がついた。

「師匠、何ですかその魔導書。」

「ああ、これは……。」

ジユンは村長の家で起こった出来事を事細かくレンに説明した。

レンは特に報酬の高額さに驚いていた。

「私達がこんなにもらってもいいのでしょうか……。」

「まあ、仕方ないさ、うんって言わなきゃ帰してもらえない雰囲気だったし。」

「そうなんですか……。」

ジユンは報酬の他に貰った魔導書を手に取った。

「その魔導書、どうするんですか？」

「んー、どうすっかな。読むの嫌いだし役に立たん可能性あるし……れっちゃんいる？」

「い、いえ、私はもう魔導書は……。」

レンは魔導書について嫌な事を思い出したのか苦々しく魔導書を見つめる。

そんなレンを見てジユンは苦笑している。

「あー、あれな。あれはちょっとやり過ぎだったかもしれないなあ。でも、あの時の経験は役に立ったっしょ。」

「あ、そういえば、あのレウラって墮霊もガンガンに殺気だってましたけど特に気にしませんでした。」

先程のレウラの殺気は常人だったら気絶してしまう程だったがレンは何ともなかった。

ジユンの殺気に比べたらレウラの殺気は月とすっぽんくらいの差があったのだろう。

「でも、一応読むだけ読んでみれば？ れっちゃんこれからしばらく魔法使えないんだから。」

「魔導書なんかに頼るなって言ったのは師匠なのに・・・って、何でしばらく魔法使えないんですか？」

レンは試しに幻魔雷帝を手に出そうとするが、全く何も現れる気配がない。

「あの魔法の飴はな、魔力が減ってる時に使うと回復と強化の効果が出るには出るんだがその後の反動がでかいんだ。

今はその反動でれっちゃんの中の心霊が眠っている状態だから魔導具も出せないし、魔力も絞り出せないんだ。」

「そ、そうなんですか……」

やはり世の中、簡単にはいかないんだな、という事をレンはこの年で実感してしまった。

「でも、何もデメリットばかりじゃない。」

「え？」

「れっちゃん、この飴舐めた時本来使えない魔法も使わなかった？」

「そういえば……」

レンは心霊と紡ぎ出していない強力な魔法をいくつか使っていた。

レンがレウラ戦の前まで使えた魔法は四つだったが、あの時は新たに三つの魔法が使えていた。

「この飴は心霊にとっては一種の麻薬になるんだ。舐めてる時は心霊がハイな状態になってポンポンッと新しい魔法が紡ぎ出される事があるんだ。」

「じゃあ私は新しく魔法が使えることになったってわけですね。」

「ま、そういう事になるかな。」

そんな話をしている途中でどうやら馬車が来たようだ。

ジユンとレンは荷物を持って外に出て馬車に乗り込む。

「よし、帰るぞ。」

「はい。」

二人を乗せた馬車はゆっくりとリーザスに向かって動き出した。

第十九話（後書き）

次回はアツミと優音とリースの話。リースがうさを晴らしたアツミをどつきます。

第二十話（前書き）

更新がめちゃ遅れました。申し訳ない……これから大学受験があるので更新は遅れると思います。

第二十話

クワリス達と同時にギルドを出たアツミと優音とリースは、凶悪犯罪者レイン・ホルテを捕まえる為魔法警察がある町、都市マルデイスに来ていた。

「さて、まずやる事といたら宿の確保よ。アツミ、行ってきなさい。」

都市に着いた途端いきなり顎でアツミを使うリース。

流石のアツミもむっとしたようで返事を返さず一人で先に行こうとしている。

「アツミ……死にたいの？」

「ごめんなさい、やらせていただきます。」

アツミはリースの周りに渦巻く魔力の流れを感じて素直に土下座をする。

アツミ、リースが来てから急速にヘタレ進行中。

面白いこと大好きな優音も飽きたのか今は依頼の紙を見ている。

「依頼主は魔法警察ですから警察署に行けばいいんですよ？」
「ええ、そうね。それじゃ、行きましようか。」

仲がいい姉妹のように歩き出すリースと優音。

残されたアツミはトボトボと肩を落としながら宿に向かった。

.....

警察から細かな詳細を説明してもらったリースと優音は観光しながら宿に向かって歩いていた。

「もっと人相悪いかと思ってましたけど意外と普通でしたね。」

優音は警察署でもらったレインの似顔絵を見ながら言った。

リースもそれは思ったらしく、苦笑して頷いている。

「でも、例え外見が普通でも中はどんなことを考えてるか分からないわよ。こんな顔してもう何人も人を殺してるんだから。」

リースは苦々しくそう言いながら似顔絵を睨みつける。

レイン・ホルテの罪状は主に殺人。その数は既に五人に上っている。都市のどこかに潜んでいるらしいのだが、相手も魔法を使いつつももう少しのところで逃げられる。

「・・・少し、怖いですね・・・」

「優音・・・大丈夫よ。何があってもあたしが守ってあげるから。」

「リースさん・・・ありがとうございます。」

リースの頼もしい一言でじゅんと感動を覚える優音。

こんなに優しい人なのにどうしてししょーは怖がつてるんだろう、と優音は思った。

「あの、リースさん達っていつから一緒にいたんですか？」

「そうねえ・・・気付いたらもう一緒にいたわね。あたしとアツミとジュンとクワリスと、あともう二人。その二人も十賢者の子なんだけど今は遠い所にいるわ。」

リースは懐かしそうに目を細める。リースの脳裏には昔のたくさんの思い出が蘇っていく。

いつも六人で過ごしていた日々はとても充実したものだった。

・・・アツミ達をつれて里帰りでもしようかしらね、とリースは思

った。

「へえー、どんな方達何ですか？」

「んー、一人は男でもう一人は女の子なんだけど、どっちも強くて頼りになるわね。」

「やっぱりみんな強いんですねー、私も見習わなくちゃだめですね」「優音だったらすぐ強くなれるわよ・・・あれ？」

突然、リースは足を止め注意深く辺りを見回す。

優音は不思議そうに立ち止まったリースに振り返る。

「どうかしたんですか？」

「・・・魔物の気配がする。」

優音が驚く間もなくリースはダツと駆け出した。

「え！？あ、あの！待ってくださいーい！」

優音は直ぐ様リースを追いかけるが中々追い付けない。

と、思ったら路地裏で突然リースが急停止しその背中に衝突しそうになった。

「つとと、リースさん、魔物見つけました!？」
「・・・あれを見て。」

リースがそう言って指を指す方向には三人の子供が頭は牛、体は人間のような魔物にじりじり追い込まれている。

「何でこんな町中に魔物が・・・」

「そんなことよりも早くあの子達を助けましょう!」

優音は風威紅鉄を構えて魔物に向かって走り出した。

「あ、ちょっと優音! つもう、仕方ないなあ。」

ため息をつきながらリースも走り出した。

「グリアアアアア!?!」

「「うわああああ!?!」」

「きゃああああ!?!?」

「ちよーつと待ったあ!」

魔物の太い腕が子供達に振り下ろされる寸前、優音の飛び蹴りが魔物の側頭部に炸裂した。

意表を突かれた魔物は受け身も取れず地面に転がる。

「今のうちに早く逃げて！」

「は、はい！」

三人のうちの一人がもう二人の手を取って走り出す。

すれ違い様にリリースも駆け付け優音と共に魔物を睨む。

頭を振りながら立ち上がる魔物は鬼の形相で二人を睨み返した。

「グルルルル……」

「どうやら魔人みたいね。あたし達二人なら楽勝よ。」

「はい！いきます！」

優音は魔力を練り上げ風弾を形成し左右の銃で放つ。

魔物は屈んで風弾を避け、低い体勢のまま二人に接近しその腕を後ろに引いて攻撃を仕掛けてくる。

（甘い……！）

イメージするのは水の壁。何者をも通さず、弾き返す。

リースは地面に手を当て、魔物との間に水の壁を出現させ打撃を無力化させた。

そしてその水で魔物を包み込み、球体の水の牢を作り身動きを封じる。

『水牢』
すいろう

魔物は水の中でもがき暴れるがリースの魔法はその程度では壊れない。

「今よ、優音。」

「はい！」

ズドン、ドンツ、と風威紅鉄から二発の風弾が放たれ、水牢ごと魔物の頭と心臓を貫いた。

魔物は泡を吐きながら水の中で灰となって水牢と共に消えていった。

「ふう、終わったわね。」

「はい、怪我がなくてよかったです。」

それまで緊迫した雰囲気が幾分和らぐ。

優音は風威紅鉄を消して路地裏から出ようと歩き出す。

リースも優音に続いて一步踏み出そうとするが……

「……………」

ふと視線を感じてビルの上を見上げる。

だが、そこには誰も居ない。

「……………気のせい、ね。」

「リースさん！早く行きましょー！」

優音に急かされてリースは走って路地裏から出る。

その少し後、リースが見ていたビルの上から一人の男が現れた。

「……………ふっ、今回は楽しめそうだな。」

その男は再び暗闇の中に消えていった。

……………。

カコーン・・・

ざぱーん、と水が流れる音が聞こえてくる。

「はあゝ、生き返る・・・」

そんなおじん臭いセリフを呟きながらアツミは湯船に浸かる。

リースと優音が帰って来ると、この宿には温泉があると説明した。

すると早速入ろうという事になり、三人は部屋で直ぐ様準備をした。

一応、混浴もあるにはあるが当然リースがそれを許すはずもない。

アツミとしては他意はなく、何気なく言っただけなのだがリースの反応は

『死ね、スケベ。』

と、殺意たっぷりに言われた挙句ケツキックで十メートル程吹っ飛ばされた。

「うわ、ケツに青痣が出来てるし・・・」

アツミが痛むケツをさすっている中、隣の女湯から声が聞こえてきた。

『気持ちいいですね、極楽、極楽。』
『ホントね。』

いけないとは思いつつも聞耳を立ててしまうアツミ。

この薄い壁の向こう奥にはパラダイスが広がっているのか……

ゴクツと生唾を飲んで無意識に壁に近付いていく。

幸い、他には客はいないので誰にも咎められない。

『ムッフッフ、リースさん、意外とポインなんですなえ。』

『ち、ちよつと優音！どこ見てるの？あ、やだ、待って……ん！』

『ぶっ！！！？』

色っぽいリースの声をばっちり聞いてしまったアツミ。

定番と言えば定番なこのシチュエーション。

実はアツミはこういう展開をちよつと期待していた。

『やったわね、この！反撃よ！』

『え？あ、ちょっと待ってください！……んっ、あっ……り、
リースさん……そ、そこ……』
「そこってどこー!？」

我を忘れたアツミが突然奇声じみた声を上げた。辺りを包み込む一瞬の静寂。

あ……と呟いてからではもう遅い。

『そろそろ上がりましょう。』

『そうですね。』

「いや、ちょっと!」

二人が湯船から出てぺたぺたと足音が聞こえてくる。

カラカラ、と引き戸が開き閉まる直前にリースがボソツと呟いた。

『アクアリバイアス』

男湯、女湯にある全ての水と湯が上空で一つになり、渦を巻く。

「ええっ!？」

『死ね、害虫。』

リースの死刑宣告に反応して大量の水がアツミに押し寄せてくる。

「あ、あ、あ・・・ぎゃあああ！！！」

アツミが水に飲み込まれて水の中で振り回される。

「ゴバボバババ！！！」

リースはそれを一蔑すると引き戸をピシヤツと閉めた。

すると、アツミを包んだ水の渦は大理石の地面に叩き付けられた。

「あああああ・・・がくつ。」

凄まじい衝撃を受けたアツミは白目を向き、すっぽんぽんで気絶した。

・・・。

「最近、扱いがぞんざいだ・・・」

「何か言ったかしら、変態。」

「り、リースさん……」

あれから数十分程してからアツミが部屋に戻ると、待っていたのは冷やかな視線だった。

優音になんとかなだめられてリースはしぶしぶ依頼の話をし始めた。

「魔法警察でこれ貰ってきたからよく覚えて。」

そう言っつてリースが取り出したのはレイン・ホルテの顔写真と詳しい資料だった。

アツミはまず資料の方を手に取り、眺めていく。

「レイン・ホルテ、二十二歳。マルティス魔法学園三年生だったが教師を魔法で攻撃したため退学。」

その後、二年に渡り魔法による殺人、強盗、恐喝などの犯罪を起こし依然逃亡中。ふーん、魔法学園にいたんだな。」

「そうね。そうじゃなきゃ魔法なんてまともに使えないわ。」

世に出ている魔導士の多くは魔法学園で魔法の使い方を学んでいた。

中には独学で魔法を扱う者もいるが、基本的に魔法学園を卒業していなければ魔導士の資格は得られない。

リースは資料のある項目を指差した。

「重要なのはここ。レインの職は魔物使い《ビーストマスター》よ。」
「《ビーストマスター》って何ですか？」

聞き慣れない単語に首を傾げる優音。

リースの代わりにアツミがその問いに答えた。

「《ビーストマスター》ってのはその名の通り魔物を使う人の事。一体から複数の魔物を服従させ使役する職だよ。」
「ほえ、そんなんですか。」

召喚士とビーストマスターは共に魔物を使うところでは似ているがある一つの点で決定的に違いがある。

それはビーストマスターは無理矢理に魔物を服従させているが、召喚士は魔物と契約を交わしている。
ビーストマスターが魔物を使役する時はその魔物に首輪などを付け、魔力で洗脳するのに対し、召喚士は魔力を使わず魔物に協力を仰ぐ。
ビーストマスターは自らの力が問われるが、召喚士は魔物との信頼関係が物を言う職業だ。

「レインの使う魔物は下級なものを使うけど、現時点で確認されてい

る強力な魔物は三体。騎士^{ナイト}、獅子^{レオ}、天使^{エンジェル}。」
「一度に襲つてこられたら厄介ね。あたしとアツミはともかく優音は一人じゃ荷が重いかも……。」
「私なら、大丈夫です、やれます。」

優音の瞳の中に強固たる決意が宿っている。

その目を見たアツミとリースはわかったと頷いた。

「じゃあ今からバラバラに行動。見つけたら空に派手な魔法打ち上げて。優音は銃声で分かるから。」

「了解。」

「わかりました。」

三人は宿を飛び出て散々にレインを探しに出た。

……。

「ちて、どくに居ることやら。」

既に日が高い時間にビル街を歩きながらアツミは呟いた。

この街のどこかに居ることはわかっているが、こつ広いとどくにレインがいるか全くわからない。

「空飛んだ方が早いかな・・・ん？」

アツミが暗い裏道に差し掛かった時、空気がざわめいた。

ふと、上を見上げるとビルの上辺りに魔力が収束しているのがわかった。

「行ってみるか。」

アツミは体に風を巻き付かせゆつくりと浮上していく。

半ば予想していたとは言え、まさかというか、やはりというか先程見た指名手配の写真に写っていた男が立っていた。

「レイン・ホルテ・・・」

「貴様も、俺を殺しにきた魔導士か？」

アツミを射抜くその眼光は狂気に満ちている。

殺し合いに悦楽を感じている、その言葉とともにアツミはそう感じた。

「ま、最悪殺すという選択肢もあるにはあるが、出来れば生け捕りという依頼だ。」

「そうか、ならば楽しませてもらおうか！」

レインは虚空から鞭のような物が巻き付いた長い棒を取り出した。

そして、それを中段に構えてアツミに襲いかかってくる。

「んぐっ！」

アツミはとっさに応戦して風雅窮絶で棒の一撃を受け止める。

だが、その一撃は思いの外強力で両手に衝撃が走る。

「くなくそおっ！」

アツミは何かレインごと前に弾いた。そして、手に数本の風の矢を出現させレインに放っていく。

だが、棒に巻き付いていた鞭がほどけ、しならせながら次の瞬間には全ての矢を打ち落としていた。

「どうした、お前の力はこの程度ではないだろう。」

レインは嘲るような目でアツミを見据える。

レインの太刀筋は全く迷いがなく死を恐れていない感じがする。

アツミはこのままでは不味いと思い、風の矢を上に向かって打ち上げた。

「ふっ、仲間に助けを求めたか。面白い。」

「直に魔法警察もここに来る。覚悟しろよ。」

「魔法警察、あの腰抜け共か・・・」

レインは魔導具をコンクリートの上に突き刺す。

すると、レインを囲むように三つの魔法陣が形成された。

「我、魔を操る者成、レイン・ホルテの名においてその身を現せ。」

三つの魔法陣が共鳴し、光を放つ。

アツミはそのまばゆい光を直視出来ず腕で目を覆う。

光が収まると魔法陣があつた場所に三体の魔物が立っていた。

「騎士^{ナイト}、獅子^{レオ}、行け。」

レインの一言で三体の内二体、騎士と獅子が左右に散る。

残された天使はアツミの前で悠然と佇んでいる。

「お前の相手はこいつだ。せいぜい、すぐにやられないようにな。
「……………」

アツミは黙って天使に向かって矢を引き絞り、放った。

だが、次の瞬間今までそこにいた天使が一瞬にして消えていた。

「なっ……がっ!？」

アツミが驚く間もなく背中に衝撃が走り、そのまま前方に吹き飛ばされる。

何とか体勢を立て直し、振り向くと同時に数本の矢を出現させて一気に放つ。

が、またもやそこに天使の姿はなく、いきなりアツミの隣に現れた。

「うわ、はっや!？」

アツミは半ば無意識に風雅窮絶を天使に叩きつける。

しかし、今度は受け止められ風雅窮絶ごと後ろに投げ飛ばされる。

「どわあっ!?!」

アツミは何とか風を体に纏い空中で静止する。

そしてそのまま大量の矢を連続して天使に放った。

「……なんとまあ、速くて硬くて厄介な事だ。」

天使は大量の矢をその身に受けたにも関わらず平然としていた。

そしてすぐ、天使は背の白い翼を左右に広げ羽ばたいた。

再びアツミは風の矢を数本放つが天使が腕を一振りしただけで全て弾かれた。

「ああ、もう!むかつくわあ!」

苛立って叫ぶアツミに天使はスッと手をかざす。

急速に収束していく光の粒子。まばゆい輝きがアツミの視界を埋め尽していく。

アツミは直感的に危険を察知して横に飛ぶ。

一瞬にして光の光線が今までアツミがいた場所を貫いた。

「ひええ、恐ろしい……」

アツミの後ろにあった向かいのビルの看板の一部分が溶けて消えていた。

攻撃力、防御力、スピード、全てを兼ね揃えた魔物を前にアツミは少々焦りを感じた。

いつの間にかレインの姿がどこにもない。この場は天使に任せ、どこかに行ったようだ。

「思ったより厄介だな……二人とも無事かな……」

アツミの脳裏に一瞬リースと優音の姿がよぎったが今は集中、と気を引き締めた。

……。

アツミが天使と戦闘している中、リースはアツミが放った風の矢があつた場所に向かつていた。

「あつた。あのビルの上ね。」

アツミがいるビルが見えてくる。その更には天使と戦闘中のアツミの姿が。

リースは助太刀しようと急いでビルの中に突入する。

今日は休みなのかビルの入口は開いていなかった。ので仕方なく破壊した。途中色んな扉が開いていなかったがそんなことリースには関係ない。

破壊神と異名がつきそうなほど壊しては進み、壊しては進みを繰り返すリース。

五階ほど上がった所で急に殺気を感じリースは立ち止まった。

五感を研ぎ澄ませその殺気を放っている者を探す。

近づいてくるのかどんどん大きくなる殺気存在。そして次の瞬間

「外!？」

窓の外から何者かがガラスを突き破って入ってきた。

大量に降り注ぐガラスの破片をリースはバックステップで避けその人物と距離を取る。

いや、人ではない。ゆっくりと立ち上がるそれは鎧。

本来、人の身を守る鎧だがその中に人の気配はない。鎧に魂が入った騎士と呼ばれる魔物だ。

「あんたが騎士^{ナイト}かー。いかにも強そうだわ。」

騎士は剣を鞘から引き抜いてその切っ先をリースに向ける。リースは右手をゆっくりと顔の前に持つてくる。

「よし、行くわよ。」

その言葉と同時にリースの薬指にはめてある指輪が青く光り輝く。

光が収まった時にはリースの手には青く美しい装飾が施されている剣が握られていた。

リースの指輪型魔導具、『水^{すい}霊^{れい}輪^{りん}』の力だ。

水霊輪の力は自らの魔力で水を作り出して使うか、もしくは空気中の水分を使って水に形を与える力である。

自分が思い描く形ならどんな物でも生成可能。今リースが手に持っているのはリースの母親、青き戦乙女の異名を持つメイリン・ランジエス（今はラグレイト）の武器をモチーフにした剣だ。

「はあっ！」

リースは横薙一閃に剣を振るう。狙うは両足。この手の魔物は首や腕を斬り落としても全く意味がない。まずは機動力を奪う。

だが、騎士も剣を下にしてリースの一撃を受け止める。リースの動きが一瞬鈍ったところで蹴りを放った。

リースは後ろに飛んで蹴りを避けると左手で簡易魔法陣を作り出す。

『スプレッド』

魔法陣から水柱が騎士に向かって飛び出す。

騎士は剣を前にして水柱を防ぐが、やがて耐えきれなくなり後ろに吹き飛んだ。

地面を転がりながら騎士は壁に当たって止まる。だが、騎士は平然と立ち上がる。

「効いてるのか効いてないのかわからないし……」

リースはげんなりとした表情で呟く。その間に騎士が剣を構えて走ってくる。

リースも再び剣を構え、これに応戦した。

……。

アツミの風の矢に気づいた優音はリースと同じようにビルに向かって走っていた。

正直、二人の手前見栄を張ったものの優音は不安で仕方なかった。

まだ経験も知識も二人には遠く及ばない。そんな自分が戦えるのかと……

でも、これは自分で選んだこと。最後まで貫き通したい。

優音はそう決心し、ビルの中に入ろうとした。

しかし次の瞬間

「グルアアアアア！！！」

「え？きやあ！？」

突然上から唸り声を上げながら魔物が落ちてきた。

ビルの入口に立つのはレインが使役する獅子シオと呼ばれる魔物。

優音は震えそうになる自分の体を深呼吸で落ち着かせて獅子を見据える。

ゆっくりと銃型の魔導具、『風威紅鉄』を構える。

獅子は警戒しているのか入口付近でうろうろしているが、常に視線の先には優音がいる。

「あああああ！！！」

優音は雄叫びを上げながら獅子に向かって駆け出していく。

それを見た獅子は体勢を低くして迎撃体勢をとっている。

そんな中、ふと優音は思った。

（私の戦う理由ってなんだろう？）

元の世界に帰るため？でもそれは他の人がやってくれている。

魔法を学ぶため？だったらこんな危険な事しなくても学べるはず。

なら、一体どうしてなのだろう？

考えれば考えるだけ益々わからなくなる。

(でも、一つだけ……)

一つだけ理由が思い浮かぶ。

それは優音の苦い思い出。優真と優音の両親が死んだ頃の話。

優真が小学六年、優音が五年の時だった。

優音のクラスでふとしたきっかけで今まで秘密にしていた両親の死が周りにバレてしまった。

子供は時として残酷。優音は両親がいない事をネタにいじめられていた。

泣いている優音に友達は助けず、慰めもしない。

そんな優音をいつも助け続けてくれていたのが兄の優真と姉のような愛華だった。

優真はいじめた奴を逆にいじめ返し、愛華は泣いている優音をいつも慰めてくれていた。

中学生になる頃にはそんなことは全くなっていた。それと同時に優音の中ではある思いが芽生えていた。

（私も、お兄ちゃんやお姉ちゃんみたいに誰かを助け、誰かを慰められる人になりたい）

それからだった。誰かの力になりたいと思うようになったのは。

それはこの世界に来てからも変わらない事だった。

（だからきつと、私の戦う理由は ）

「誰かの力になりたい。誰かを守りたい。だから私は戦うんだ！」

優音の魔導具が赤く、紅く光り輝く。その銃口からは紅き風を纏った銃弾が放たれる。

風威紅鉄は優音の思いに答えるかのように、今までの数倍はある威力の銃弾で獅子を吹き飛ばした。

獅子は入口のガラスを突き破り中で体勢を立て直す。

その隙に優音は解武を発動させて魔導具の形を変えていく。

その姿は以前見せた凶悪な程の威力の長銃だった。

『サイクロンブレット!!』

銃口から放たれるのは目では見切れないほど速い風の銃弾。

魔力を溜めない為威力は落ちるがその分速さがある。

風の銃弾は見事獅子の額に命中。しかし、獅子の体は硬く貫くまでは到らない。

「グオオオオオオ!!!」

万人が怯む程の咆吼。そしてすぐ優音に向かって駆けてくる。

優音は長銃を元の二対の銃に戻し、獅子を狙い乱射しその足を止めようとする。

だが、獅子は左右に移動しながら銃の照準を狂わせ、少しずつ優音に近づいてくる。

そして高く跳躍し、その鋭い爪を空中で振り上げる。

「つく!?!」

ギリギリのところではバックステップで後ろに避ける優音。反射的に二対の銃を連続で放つ。

ズドドドド、と凄まじい数の銃弾の嵐。致命的なダメージは与えら

れないが獅子は一度退いて距離を取ってきた。

(このままじゃ、まずい……)

獅子の攻撃は当たればほぼ致命的、対して優音の攻撃は殆どダメー
ジがない。

このままだと時間の問題という事は明らかだった。

「ウガアアアア!」

「ひゃあ!」

獅子の突進をまた紙一重でかわす優音。だが、だんだんと動きにキ
レがなくなってきた。

(もっと、強い攻撃……)

優音は解武習得直後にアツミに言われた事を思い出していた。

『解武は思いの形。より緻密に、より細かくイメージすればそれは
理想の形に変わる。』

『ま、要は外見と中身を細かくイメージ出来れば解武はどんどん強くな
るって事だよ。』

(まず、形は・・・)

優音は心を落ち着かせてイメージを始めた。頭の中で原型を形作っていく。

(映画で見たような・・・なんかこう、ガコンッていうやつ。)

優音が言っているのは恐らくポンプ式のショットガンのようなものだろう。

意外とアクション好きの優音は映画で銃を何回か見たことがある。

だが、問題は中身。流石に優音が銃の構造まで知るわけもない。

となると、仕方ない。銃の事は”銃本人”に聞いてみるしかない。

「風ちゃん。」

『はい、なにー?』

優音が魔導具に呼びかけると光が飛び出し、ポンツと音を立てて小さな女の子が現れた。

髪は紅く、同じ赤の着物を着込んで両手には二対の銃が握られている。

彼女は優音の心霊。名は風鈴^{ふうりん}。特に名前を持っていなかったので優音が思いつきで名付けた。

「外はイメージ固まったから中の方お願い。」

「えー、めんどくさいー」

ちなみに、心霊の性格は主の性格に関係する。主に似るか、逆の性格になるか、大雑把に言えばその二通りしかない。

風鈴の場合は主に似たと言っていていいだろう。優音は興味がある事はとことんやり抜くが、それ以外はやる気が全く感じられない。

「そんな事言わずに、ね？」

「むー、仕方ない。このままだと優音が殺されちゃうからなあ・・・
わかったよ。」

「ありがとう！」

風鈴が魔導具に戻ると優音の頭の中で銃のイメージが一瞬で完成した。

そして、風威紅鉄は優音のイメージ通りに形を変えていく。

野生の勘だろうか。獅子は形を変える優音の武器を見て唸り声を上げながら駆けてきた。

優音は駆けてくる獅子に向けて形を変えた風威紅鉄を構えた。

その手には赤みがかった銀色のショットガンのような銃。優音曰く、ガコンツてやるやつが握られていた。

「グルオオオオオオ!!!」

『ゲイルストライクブレット!!!』

獅子が飛びかかると同時に優音は銃の引金を引いた。

銃口から圧縮された風の弾が放たれた。暴風が吹き荒れ、獅子だけでなく近距離で放った優音までも吹き飛ばした。

「ガアアアアア!!!」

「きゃあああ!!!」

優音は地面に叩きつけられたが特に大怪我はしていない。

獅子は凄まじい風弾の威力で体は風の刃でスタスタに切り裂かれ壁に激突し、灰になって消滅した。

「か、かった」

『お疲れさま、優音。』

「うん、ありがとう」

優音は労ってくれる風鈴に答え、ビルを見上げた。

「ししょーとリースさん、大丈夫かな？」

優音は未だ戦闘しているかもしれない二人を心配して呟いた。

……。

優音が獅子を倒す少し前、リースは新たに剣を出現させ騎士と対峙していた。

騎士は既に左腕がない。どうやらリースが斬り落としたようだ。

だが、リースは少し息が上がっていて、騎士は特に疲れていない。

騎士のような魔物は、物に魂が宿り行動するとされ、体力という概念が存在しない。

その為、この手の魔物は体力がある内に倒さないと後から辛くなってくる。

「はあ、はあ……もう、いい加減やらねさい！」

リースはもう何度目になるかわからない剣の斬撃を連続で放つ。

騎士は双剣の斬撃をあるいは受け止め、あるいは避けて直撃を免れる。

いい加減痺れを切らしたリースは思い切って両手の剣を投げつける。

騎士が双剣を弾いている隙にリースは両手で魔法陣を展開していく。

「大いなる海の守り神よ。広大な蒼海より引き連れ敵を飲み込め。

『ダイダルウェイブ』！！」

魔法陣から大量の水が流れ込み巨大な波を形成して騎士を飲み込む。

流石にこれは防ぎようがない。騎士は成す術もなく流され、壁に叩きつけられた。

「.....」

このくらいでリースは安心はしない。まがりなりにとも騎士は墮霊の一角。この程度で倒せるほど弱くはないだろう。

リースの予想通り、騎士は床に広がる水の道を真っ直ぐ歩いてくる。

だが、その足取りは妙に弱々しく、最早誰の目から見ても戦える状態ではない事が分かる。

それでもリースに向かって来るのは操られているからなのだろう。そう思うと魔物だが、どこか哀れに感じた。

「せめてもの情けよ。一撃で葬ってあげる。」

リースは頭上に青い装飾が施された大剣を振り上げる。

騎士はゆっくりと近づいてくる。

騎士がリースの間合いに入った瞬間、頭上の大剣が振り下ろされた。

.....。

同時刻、天使と交戦中のアツミだが、天使の圧倒的戦力に防戦一方だった。

「.....っ!？」

アツミは迫り来る無数の光線を紙一重で避けていく。

それにしても、やたら天使が強いのは何故かとアツミは考えていた。

そもそも魔物がどこから現れるのかわかっていない。一説には魔物

の母体がどこかにあるのではというのを聞いた事があるが、流石に予測なので信憑性に欠ける。

目の前の天使は恐らく墮霊。それも純正の。

純正というのは最初からその階級で生まれた事を意味する。魔人は魔人として。墮霊は墮霊として。

純正の墮霊は魔人から墮霊になった魔物より遥かに強い。

対してアツミは普通の墮霊と同等の強さで、今のままでは天使には勝てない。

そう、今のままでは。

「はあ、仕方ない。本気出そうか。」

そう呟いた途端、アツミの魔力が急激に跳ね上がる。

天使は急激に上がったアツミの魔力に焦りを覚えたのか、もう一度光線を放つ。

「『速』の解武 発動」

刹那、アツミの姿が天使の視界から消えた。

天使の放った光線が虚しく地面のコンクリートをえぐる。

不意に天使の背中に衝撃が走る。天使は振り向き様に腕を雑払う。

だが、そこに敵の姿はない。ただ、虚空が広がっているだけ。

さらに、ザシュツという何かを切り裂く音と天使の左腕に衝撃が走る。

当たり前のようにあった左腕の肘から下がなくなっていた。

「……！！」

声にならない声を上げ、天使の顔が苦悶の表情になる。

「限界まで魔力を溜めた矢だ。それに貫けないものはない。」

声はするけど姿は見えない。天使は辺りを見回すがやはり誰も居ない。

いや、いないわけじゃない。アツミが速すぎるのだ。

そのスピードは今までの比ではない。最早高速という次元ではない。正に神速という名がふさわしいだろう。

「これ疲れるからもう終らそう。『げんそつふうし幻想風矢』」

限りなく同時に見えない所から放たれる黒い風の矢。

それらは一瞬にして天使を取り囲んだ。その数およそ百。それらが一斉に天使に突き刺さったのだ。

灰となって崩れ落ちていく天使。それを見届けるとアツミは屋上に姿を現した。

「つ、疲れた……」

「アツミ！」

「ししょー！」

ようやく天使を倒し、へばっているアツミの元にリースと優音が駆け寄ってくる。

二人は特に大きな怪我はしていない。とりあえずアツミは安堵の息をついた。

「二人とも、大丈夫だったのか？」

「はい！私もリースさんも魔物倒しましたよ……って、それどころじゃないんですよ！」

やけに焦った様子で巻くし立てる優音。なんだか要領を得ないので代わりにリースが説明した。

「へばつてる時間はないわよ！今下でレインが魔法警察と戦闘中！」

「えーっ、もう少し休ませてくれよ……」

「駄目です。ししょーが戦わなかったら誰が戦うんですか!？」

アツミは無言でリースの方を向く。リースもリースでアツミが言わんとしていた事が分かったようだ。

「あ、あたしは駄目よ。さっき少し大きな魔法使っちゃったから。」

「え？俺も解武に結構魔力使っちゃったんだけど……」

二人は顔を見合わせて黙り、同時に優音を見る。

その二秒後、意味を理解した優音は手と顔をぶんぶん振り回して無理を連呼した。

「無理です、無理です！そりゃあ私は魔力をあんまり使っていないですからそれほど疲れてないですけど……. だけど無理です!」

優音は解武は出来るが解魔が出来ないという特異な性質を持っている。

その為、魔法は使えずただ銃弾に風を纏わせる事しか出来ない。

だが、それを補う程のその驚異的な攻撃力。恐らくそれだけならばジユンの蒼陣烈火に並ぶ程に強力だろう。

さらに解武で銃の形によって変質する銃弾の効果も特徴で、なかなかの戦力になるだろうとアツミは思っていた。

「あー、もう！こんな事になるんだったらジユンからあの飴もらっとくんだった！」

あの飴というのはもちろんジユンがジャパネットタナカで大量購入した魔法の飴だ。

魔力が少ない時に使うと回復と強化の効果が見れるが、その代償として数日は魔法が使えない。

しかもその効果は五分しかもたない。微妙に役に立つんだか立たないんだかよくわからない代物だ。

「はあ、嘆いても仕方ないわね。少しだけ魔力も回復してきたから優音のサポートくらいは出来るわ。」

「ええっ!?!」

「そだな。知恵と勇気で頑張るとしよっか。」

「ししよーまで……うう……」

この二人がサポートしてくれるのは心強い。心強いんだが実質戦うのは優音なわけで……

『大丈夫。』

(風ちゃん?)

心の中で風鈴が呼び掛けてきた。

『優音は強いよ。さっきの事を思い出して。』

(……誰かを守りたい……)

『そう。その思いがあればどんな敵にも負けないよ。魔導具は思いの形。思いが強ければ強いほど、魔導具もより強力になる。』

(うん、そうだよね……ありがとう、風ちゃん。)

心霊との会話を終えると優音はすっと立ち上がった。その顔には最早迷いはない。

「お二人とも、行きましょう!」

「ええ!」

「おう!」

三人は優音を先頭に階段を降りていった。

.....

階段を降り、水浸しの階を通り、破壊された扉をくぐり今はもう原型すらとどめていない入口に着くと目の前には壁があった。

優音は不審に思って視線をだんだんと上に持って行くと壁ではないことに気づく。

ゴーレムだ。およそ十メートルはある巨大なゴーレムが魔法警察を見下ろしていた。

「なんちゆうでかさだ.....」

呆然とアツミがゴーレムを見上げながら呟く。

ゴーレムの肩に乗っているレインが三人に気づいた。

「ほう、貴様等、俺の下撲共を倒したか。やはり楽しませてくれる。」

レインは狂喜に歪んだ笑みを見せる。

優音はその笑みに一瞬恐怖を感じブルツと体を震わせる。

「少し待っている。直ぐにこいつらを片付ける。」

レインはそう言ってゴーレムを操り魔法警察の人達に巨大な拳を叩きつけさせた。

ゴーレムの足元で逃げ惑う人々。レインはそれを見て悪魔のような笑い声を上げていた。

「止める！」

アツミの放った黒い風の矢空気を切り裂きレインに向かう。

だが、その矢はゴーレムの手で防がれあっけなく拡散してしまった。

間発入れず、リースは少ない魔力で一本の長剣を造りゴーレムのゴツゴツした皮膚を利用してレインの元まで跳ぶ。

「はああー!!」

「ふっ」

リースは渾身の一撃を放つが、やはり疲労が溜っているのか簡単に受け止められた。

レインは受け止めた棒でリースの長剣を絡め、弾く。そこに、無防備なリースの腹めがけて蹴りを放った。

「ぐっ……」

「リース！」

「リースさん！」

アツミは飛び上がり、ビルの壁に激突しそうになったリースを受け止める。

間一髪。背後には戦いの被害からかビルの壁が破損して細い鉄工がいくつか顔を出していた。

あのまま吹き飛ばされてたら、と思うとアツミとリースの背中に冷や汗が流れる。

「もう大丈夫。アツミ、ありが……」

むにゅ。

この場には不釣り合いな感触がアツミの手に広がる。

ゆっくりと見下ろすとアツミの手の中には柔らかい豊かな双丘が。

アツミの頭の中でガンガンに危険危険危険とシグナルが発せられている。

ああ……どうせ地獄を見るなら今の天国を思い切り堪能したい……

・

事も有るうにアツミは戦闘中にリースの胸を鷲掴みにしていた。

「な、な、な・・・」

「待とうか、リース。うん、話せば分かる。話せば。だからネ、暴力はよそうよ、暴力は。」

「だったらさっさと離せ！このスケベー！！！」

隣でリースがアツミにたこ殴りを始めた時、優音は二人に呆れながらレインと対峙していた。

「いいのか、小娘。貴様の仲間は仲間割れを始めたぞ。」

「いいの。あなたなんか私一人で十分。」

「ふっ、ならばせいぜい楽しませてくれよ。」

レインはゴーレムを操り優音を踏み潰そうと足を上げる。

優音は体を捻って避け、ゴーレムの後ろに回り込み数発の風弾を放つ。

だが、巨大なゴーレムに対して小さな銃ではちよつと傷がつくだけでまるで歯が立たない。

（だったら・・・）

優音は一瞬で銃をイメージ、構築しショットガン型の風威紅鉄を出現させた。

『ゲイルストライクブレット!!』

優音はゴーレムめがけて引金を引いた。魔力で圧縮された風弾が放たれる。

風弾はゴーレムの背に命中。だが、この攻撃でさえも風で少し切れ目を入れる程度のダメージしか与えられなかった。

「ハハハハハハ!!もつとだ!もつと俺を楽しませろ!」

ゴーレムはその巨体に似合わない素早い動きで優音に石の拳を連続で振り下ろす。

何とかかわしていくものの、獅子との戦いが尾を引いているのかその動きに切れはない。

「あっ!?!」

やがて石につまづいて尻餅をついてしまう。そこに容赦なくゴーレ

ムの拳が振り下ろされる。

優音はキュッと目を瞑ってもう駄目、と心の中で呟いた。

しかし、いつまでたっても体に衝撃が来ない。

恐る恐る目を開いてみると、そこには風雅窮絶と水霊輪で作った大剣でゴーレムの一撃を止めているアツミとリースの姿があった。

「まったく、リースのせいで優音が危なかったじゃん！」

「うるさい！あんたがあたしの、むむむ胸を触るのがいけないんでしょー！」

リースは思い出してしまったのか顔を真っ赤に染めている。

そして二人同時にゴーレムの一撃を弾き返した。

「優音、大丈夫？」

「あ、はい。リースさんも怪我してないですか？」

「うん、あたしも何とか。でも厄介なのはあれよねえ……」

リースはこっちにゆっくりと向かって来るゴーレムを見て呟いた。

その時アツミがポンッと何かを思いついたように手を叩いた。

「あれは？昨日の試験で見せたあのすげえ威力の技」
「あれは・・・撃つのに少し時間がかかりますけど」
「何言ってるんすか。その為に俺等がいるんですよ」

アツミが頼もしさを感じさせる笑顔を優音に見せる。

リースもコクリと頷いて剣を大剣から双剣に切り替えた。

「アツミ！援護お願いよ！」
「ラジャ！」

リースが先に走り出し、アツミもその後をついていった。

すぐに優音は風威紅鉄を長銃に変化させ周囲の魔力を吸収し始める。

アツミの魔力もリースの魔力も限界寸前である。

アツミが生み出す風の矢もそう多くは出せないだろうし、リースはもう武器を作り出す事は出来ないだろう。

だが、それでもアツミはゴーレムを風の矢で錯乱させ、リースは足止めをしている。

(早く・・・もっと早く・・・)

心の中で焦りながらも優音は集中する。

「きゃあ!?!」

「リース!ぐおわっ!?!」

ゴーレムの強力な一撃にリースの双剣は折れて吹き飛ばされる。

アツミはリースに近付こうとするが隙を見せたところでゴーレムに雑払われる。

「ぐう……」

「っ……」

地面に蹲るアツミとリース。もう既に立ち上がる気力さえない。

「クハハハハハハ!!!」

狂人じみた笑い声を上げながらレインはゴーレムを操りゆっくりと優音に近づいてくる。

優音は未だに目を瞑って集中している。

ゴーレムの拳が届く範囲に優音が入った。ゴーレムは石の拳をゆっくりと振り上げる。

「全くね、っ痛う……」

「お二人とも大丈夫ですか？」

見るとアツミは腕をおさえていて、リースは足を引きずっている。

見るからに痛々しそうにしているが、二人は大丈夫と優音に笑顔を見せる。

そんな時に三人に魔法警察の一人が近寄ってきた。

「やあやあ、どうもどうも。あなた方のお陰でレイン・ホルテを捕まえる事が出来ましたよ」

何気に尊大な態度からこの場を任された責任者のようだ。

だが、妙にでかい態度が気に入らず、アツミとリースは睨みつける。だが、仕事、仕事と割り切って何とか目を剃らす。

「いやあ、お若いのに大した実力ですね。あ、こちらが今回の報酬になりますね」

アツミとリースは目を剃らして怒りを我慢しているので小切手を出されている事に気付いていない。仕方なく優音が受け取った。

「今後とも何かあったらよろしくお願いしますよ。なっはっはっは」

陽気な笑い声を上げながら責任者らしき人は戻っていった。

「きーっ、なにあの態度！ム力つくったらありやしないわ！！」
「まあまあ」

足の痛みも忘れて怒り狂うリースを優音が何とかなだめる。

アツミも黙ってはいるが不満を隠しきれていない。

「とりあえず報酬はもらったんですし、今日はもう帰りましょう。
この分だと夜になっちゃいます。」

「・・・そうだな。もう二度と魔法警察になんか関わらないしな。」

アツミにしては珍しく辛辣な言葉を残して優音に同意した。リースはまだ不満顔だったが二人になだめられてしぶしぶ納得した。

それから三人は馬車に乗り、都市マルデイスを出た。

疲れた三人がすぐに眠ってしまうほど馬車の揺れは穏やかだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8643a/>

Happiness Magic！ ～ハピネスマジック！～

2010年10月28日06時04分発行